

俺の鎮守府

やんやんいやん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも自分が艦これの世界に行ったら？ってな感じです。自己満足なんで完成度クソです。

目次

1、始まり	1
2、とまどい	4
3、現実	7
4、パーフェクツ	10
5、連行	12
6、君の名は	15
7、忌まわしい記憶	19
8、天使と悪魔	21
9、山田孝夫(上)	24
10、山田孝夫(中)	26
11、山田孝夫(下)	30
12、進展	33
13、キャパシティ	36
14、CQC	39
15、立ち上がれ	43
16、めぐりあい便所	47
17、だが断る	53
18、尻太鼓	56
19、あなただけ見つめてる	60
20、球磨	63
21、山田孝夫の事件簿	71
22、山田孝夫の事件簿(解決編)	76
23、真の絆	81
24、尻と山田と大本营	85

25、	紳士とは	90
26、	タミヤ	96
27、	コック山田	101
28、	哀れな戦士	107
29、	駆け抜ける嵐	116
30、	side 五月雨	122
31、	追跡者	126
32、	持ち主探しの大冒険 (古鷹型編)	132
33、	持ち主探しの大冒険 (睦月編・前編)	136
34、	持ち主探しの大冒険 (睦月編・中編)	140
35、	怒り	147
36、	山田、動きます。	154
37、	艦娘脅威のメカニズム	160
38、	金剛という女	166
39、	持ち主探しの大冒険 (睦月編・完結編)	172
40、	山田、散る。	184
41、	すごいよ!!金剛さん。	190
42、	愛ゆえに (上)	197
	愛ゆえに (?)	204
43、	愛ゆえに (中)	211
44、	愛ゆえに (中2)	233
45、	愛ゆえに (下)	240
46、	さらば川内	250
47、	償い	257
48、	ごめんね、鳳翔	270

52、	51、	50、	49、
叫び	絡みつく恐怖	力	IT (イット)
304	292	284	277

1、始まり

俺は無職だ。

今年で25になる。今まで働いた事はないのかだつて？いやいや、そんな事はないよ。俺だつて少しはまともな人間だ。この前までは仕事をしてたさ。今は失業保険が出るまで待機している所だ。まあ、俺の話がメインじゃないから割愛するがもう少し付き合ってくれよ、ジヨニー。

俺は興味の移り変わりが激しい人間だ。たとえばこの前まではガール○ンのゲームにドはまりしていたが、今はメダ○ツトのゲームにドはまりしている。だがそんな俺でも長く続けているゲームがある。それは艦隊これくしょん。通称艦これだ。最初は絵に惹かれ何となく初めてみたのがきっかけだった。いろんなサイトでクソゲーだか運ゲーだか書かれていたが正直、俺もそう思う。だが何というかやりがいという確かな魅力もあるのだ。

今日も艦これの遠征をひたすら回す。前のイベントでチンパンかましたからあまり資源がないのだ。就職活動？まだだ、まだその時ではない。まとまったお金が貰えるまでは何もしない。当然だよなあ？

「目え疲れたなあ、少し休憩するか。」

ある程度やる事をやった俺はスマホのカバーを閉じベッドの上に寝転ぶ。仕事を辞めてからか、こころなしか体が重い。太ったな。腹をつまみながら思う。そうだ！明日は久々に友達に声をかけてどこかドライブにでも行こうかな

。どうせあいつら半分ニートみたいなものだし。そう思った俺は友達に連絡する為に再びスマホを手取る。さきほど休憩するかと言っていたのにこのありさまである。スマホ依存症って怖いね。

その時、スマホから凄まじい光が起こった。

「えっ？？」

俺は驚く暇もかわす余裕もなくなすすべく光につつまれた。

「.....」

いやあ、驚いた。まさかスマホがあんなに眩しく光るとは。俺はおもわず腕で顔を守る体勢になっていた。痛みはない。おそらく液晶かなんか壊れたのだろう。韓国産か中国産に違いはない。よくニュースで見えるからな。とりあえずスマホを修理してもらうしかないか。やれやれと閉じていた瞼を開けスマホを取ろうとした時、俺は絶句した。

「ふえ？」

キシヨイ声が出たが今はそんなのどうでもいい。それよりも大事な事がある。なぜ、なぜ俺は砂の上で寝ているのだ？

咄嗟に周りを見てみる。するとそこには見慣れた景色があった。ありえない、意味わからないという思考よりも言葉が先に出た。

「海だ.....」

見渡す限りの水、波、独特の匂い。間違いない海だ。俺は呆然としていた。だってそうだろう。さっきまで自分の部屋で寝ていたのに今は浜辺で寝ているのだから脳ミソが働かないのは当然の事。

「えーっと、えー3 a d j l j 6 7」

脳の処理が遅れている為か言葉すらバグっていた。そのとき。

「あのお、大丈夫ですか？」

背後から咄嗟に声をかけられた。

「はあああああああああつ?!?!」

「ひっ！」

突然の声になさげなく叫んでしまった。しょーがないだろ。チキンハートなんだからよ。俺は深呼吸をしてなんとか自分を落ち着かせる。そしてゆっくりと後ろを振り向くと声の本人は尻餅をついていた。しかも半泣きだ。俺の奇声にびっくりしたのだろう。悪いことをしたな。でもあんたも悪いんだからな。いきなり声かけるんだからと思いつながら相手を起こすため手を差し出す。

「あつ、すいませ.....」

とその時、俺は止まる。なぜなら俺が手を差し出した相手の顔を見たからだ。それは不細工だったからではないむしろ逆だ。青い髪、青い瞳、ぷつくりとしたほっぺ。なにもかも見覚えがある。そう、それは艦これが始める際に配属される艦娘の一人、俺の初期艦五月雨その人だったのだから。

2、とまどい

俺の脳が二次元と三次元の区別をつけている間にも時間は進む。俺は今、目の前の五月雨(?)に手を差しだしたまま固まっている状態である。よくフリーズするな。64か?とふと思う。つまらない事だけは何故か頭は働く。そんな事が考えられるほど余裕が戻って来たのか?と思ったその時、手に感触があった。

「あつ、ありがとうございます。提督」

提督?俺が?現在、彼女の手と握手する形になっている。女の人の手を握るのなんて小学生以来の事だ。感動する。

「提督?」

彼女に再び声をかけられ正気に戻る。

「ああ、ごめんなさい。」

俺は尻餅をついたままの彼女を起こす。彼女は俺の頭一つ分身長が低かった。服装も艦これのイラストと同じだ。特に印象的なのは目だ。すごくキラキラしている。吸い込まれる様に綺麗だ。絶対日本人ではないというのがわかる。

「はあ、びつくりしましたよ、提督ってあんなに大きな声が出るんですね。」

「あの一」

「なんでしよう?提督?」

「さつきから提督と呼んでますが俺、ただの無職ですよ?」

それはそうだ。俺はこの間仕事を辞めたばかりなのだ。提督だなんてそんな大層な職についた覚えもない。たぶん人違いだろう。そう思い、少しジョークを交えて答える。しかし彼女は首を傾げてこう言った。

「無職?あははっ!何言っているんですか、提督はこの海を守るという大事なお仕事を一生懸命なさっているじゃないですか。からかわないでくださいよお。」

彼女は口に手を当てクスクス笑っている。

「ええ?」

いやいやいやいや、さすがの俺でも多少は現実とゲームの区別はついている。確かに俺は提督だ。だがそれはゲームの中だけの話で現実とはただの自宅警備隊なのだ。

……ああーと俺は悟った。夢だと。これから宛のない就職活動に身を投じる俺が現実をごまかす為に作った夢だ。そうか、それなら納得がいく。なんでかって？リアルな俺なんて女の人との交流は皆無だからだ。

「なあんだ……」

「？」

俺はすべてを悟り、背筋を伸ばす。目の前の脳内彼女は丸い目をさらに丸くして小首をかしげている。抱き締めた。

俺はどれだけ欲求不満なんだ。名残惜しいが現実に戻ろう、この夢はリアル過ぎて気持ち悪い。自分が踐んでいるこの砂もやけにリアルだ。手ですくってみるとごくサラサラしている。まあ、砂だもんな。そして俺はこれが夢であるという決定的な場面を目撃する。それは

「あっはははははあー!!キツモチイイイ♪」

俺のいる位置より少し遠い浜辺に筋肉質の男が走っている。奇声を発しながら。見た感じ若くもないし歳をとっている感じもしない。だいたい30くらいだろうか。ん？何故筋肉質と一目でわかったなって？そりゃあ分かるよ。だって

全裸だもん。

「あああああああああつ!!うええあああああ!!緊急脱

出
う
う
う
う
!!
」

俺は俺の腹部に全力のボディブローをかました。

3、現実

「うええええええええええつ!!」

おかしいな。さっきの一撃で目が覚めると思っていたのに景色が全く変わらない。てゆうかすげー腹痛い。的確にみぞおちに入ったのだろう。吐きはしないがきたない声が出ってしまった。痛い。ただそれだけ。

「ひゃつ、ど、どうしたのですかっ? 提督。自分のお腹を殴って……」
俺の奇行を見て五月雨が駆け寄って来る。ありがとう、五月雨。なかなかいないぞ、目の前の気違い男に心配の声をかけてくれる女の人なんて。君はええ嫁になれる。この俺が保証しよう。それはともかくなんで夢の中なのにこんなに痛いんだ。まだかすかに鈍い痛みが残る。まさか夢ではなく本当に……まさか、な。

さてよ。もしこれが夢じゃなく本物の俺の現在ならさつき見たマップの筋肉質なおじさんは……俺は首をゆつくりと右に向ける。そう、奴がいた方向だ。恐ろしい、恐ろしい。だけど俺は見極めなければならぬ。真実を。
「……いない。誰も。」

俺は先ほど奴がいた所を凝視していた。上、下、右、左。なんども確認した。俺は立ち上がって360度周りを見た。山、住宅地、道路、電柱。そして一面に広がる海があるばかり。特に変わったものはない。見た感じ、人は俺の目の前にいるオドオドしてやけに守ってあげたい感を放つ五月雨に俺だけだ。おっさんはいない。

「ありがてえ、ありがてえっ!!」
俺はとっさに土下座の形になった。何に? と自分に問いかけるが、もうどうでもいい。これは現実だ。現実なんだ。俺は今ここにいます。もうそれだけでいい。正気(?)を取り戻した俺は彼女、五月雨と向き合う。

「いやあ、すいません。重ね重ね奇声を発してしまつて。」
「いえ提督が元氣なら五月雨もうれしいです。」

とても眩しい笑顔で会話してくれている。さつきまでトチ狂つて

いた俺に

「ええ娘や・・・」

「えっ？なんですか？提督？」

思わず言葉に出てしまった。だってしようがないじゃないか、しずかちゃんなみに優しいんだもの。

「っ！いや、なんでも・・・」

とっさに誤魔化したのが恥ずかしい。しっかりと俺の目を見て話してくれる。人見知りの俺にとってそれはうれしいやら恥ずかしいやらで俺の感情をかき乱すには十分すぎるほど効果は抜群だった。そんな俺を知ってか知らずか五月雨は俺に視線を合わせ続ける。

「ふふ、変な提督さん。・・・あれ？」

今度は五月雨が辺りをキョロキョロと眺め始める。

「どうかしたんですか？」

俺はふと訪ねる

「いえ、さっきまでそこに妖精さんが遊んでいたんですけどいなくなってしまうたなど思ってます。」

妖精さん？はてそんな可愛いのいたっけかな。俺がここに来てから見たのは五月雨と・・・

「・・・」

「ん？どうしました？提督？」

違う、違う。ありえない。あれは人だ。いや人か？いやはやまさか、あれが妖精のわけがない。あれだろ？妖精ってのは小さくて緑っぽい服着てのほほんって感じの生き物だろ？あんなにゴツイ露出魔が妖精のわけないだろ。うん、そうだ。そうに違いない。でもいちお聞いておこう。

「あのお、五月雨さん？」

「はい、なんででしょう？」

「妖精ってのはアレですよ？小さくて可愛いものですよね？」

「いいえ、妖精さんといっても個体差がありますから大きさはそれぞれ違うんですよ？錬度にに応じて成長していくんです。」

．．．．．うん？

「でもさっきの妖精さんはすごかったですね。あんなに大きい妖精さんを見るのは初めてです。もしかしたら私達の鎮守府に来てくれるかもしれないね。楽しみです。」

「ねっ、提督。」

．．．．．

「五月雨さん。」

「提督、さっきから気になってたんですが、さん付けはやめてください。私達の上官なんですから。呼び捨てでいいんですよ。」

「それじゃ、お言葉に甘えて、五月雨。」

「はい、なんででしょう？」

「ハンカチを、ハンカチを持ってきてくれないか？」

「ハンカチ？、っ！どこかケガされたのですかっ？」

「いや、まあ、うん。そんなところだ。」

「それは大変ですっ。でもハンカチより包帯のほうが．．．」

「いや、ハンカチでいいんだ。」

「わかりました。すぐ持ってきます。待っててくださいいっ。」

五月雨は俺の頼みを聞くとそのまま走り出していった。もうやめよう、考えるのは。もうやめよう、抗うのは。今の俺に出来るのは受け入れる事のみ。そして思う。俺は彼女が戻って来るまで涙を我慢できるのだろうか。と

4、パーフェクツ

あの後、俺は大いに泣いた。途中からなんで泣いているのかわからなくなったが涙が止まらなかった。

ひとしきり泣いた後、少し精神が落ち着いた俺は五月雨が来るまで海を眺める事にした。まあ、やる事ないし、もうなんか疲れたしな、しばらくたてばきつと五月雨がハンカチを持ってきてくれるだろう。涙も枯れてもう必要ないんだけどせつかく持って来てくれるんだ。無駄にはしない。汗を拭くなり広げてスカーフにするなりやりようはあるだろう。

「て．．．くー！、ていとくー！」
「ん？」

微かに声が聞こえる。おそらく五月雨が来てくれたのだろう。声が聞こえる方向に振り向くと二つの人影が見える。一人は五月雨だ。両手に箱を抱えて走ってくる。まさかあの箱の中身は皆ハンカチって事はないよな。そしてもう一人、五月雨の後を追いかけて走ってくる人がいる。あれは．．．

「はあ、はあ、はあ、て、提督。おまたせしました。ハンカチいっぱい持って来ましたよ。」

俺の予想は的中していた。皆ハンカチだったよ。まいったな。

「鎮守府の皆さんからハンカチを一枚ずつお貸りしてきたので、遅くなつてしまいました。すいません。」

鎮守府中？すごいな。皆貸してくれたの？それって艦娘の皆の事、だよな。箱の中身を見せてもらう。確かにいろんな形、色のハンカチがこれでもかと敷き詰められていた。ただ涙を拭う物が欲しくて頼んだ奴がこんな量なるなんて思わなかったよ。

「あ、ありがとう。こんなにたくさん．．．」

あまりの量に言葉がつまる俺に五月雨は。

「っ！そうですよね．．．こんなにハンカチがあつても困っちゃいますよね。私って本当にバカだなあ。ははっ」

俺はガツ！つと五月雨の両肩を掴む。

「いやっ！五月雨は悪くない！俺はうれしい。こんなにハンカチを持ってきてくれて、息が切れるほど走って来てくれて、俺は幸せ者だっ！本当にありがとう!!」

俺がありのままの思いを叫ぶと五月雨は少し顔を赤くしてにぱつと笑った。

「本当ですかっ？よかったあ。五月雨うれしいです。」

もうあかん。涙がまた出てきた。健気で一生懸命。パーフェクツや。ホンマもんのパーフェクトガールやでえ。涙のナイアガラや。とまれへん。

「ほな、さっそく使わせてもらうで。ホンマありがとな。」

「なんで関西弁？まあ、いいつか。どうぞ思う存分使ってください。」

感動しすぎて心の声と逆になってしまった。涙で前が見えねえ。俺は箱の中からピンクのハンカチを一つ取るとそのまま涙を拭う。

その時ザクツザクツと音が聞こえた。

「もう、五月雨ちゃん、もう少し遅く走ってよ。私、運動、ニガテナのにいい。」

先ほど五月雨と共に走ってきた人が追い付いてきた。相当息があがっている。遠くから見るとある程度誰なのかは検討がついた。その人は五月雨に一言声をかけると俺に顔向けて話かけてきた。

「あつ、提督。お疲れ様です。．．その大量のハンカチ何に使うんです？」

その人、工作艦明石は俺をきよとんとした顔で見つめていた。

5、連行

五月雨と同様に自然な感じで話しかけてくれている明石に思わず、頷き黙ってしまふ。俺は筋金入りの人見知りだ。ハーレムアニメの主人公みたいに初手からフレンドリーに会話できるはずがない。五月雨の時は唐突すぎたからなんとなく会話出来ていたがな。

でも明石とは完全に初対面だ。なのに彼女も俺を知っているみたいな感じがある。なんか変な感じだ。

「ねえ、提督・・・」

うつむいていた顔をとっさにあげる。そうだ、さすがに失礼だな。人見知りでも最低限のマナーは守らなければ。怒っちまったか？・・・明石の顔を見たが怒ってはいない。よかった。俺は明石に返事を返そうと覚悟を決め、視線を合わせようとしたが明石の視線が何故か俺の右手に向いている。

うん？俺も自分の右手を確認する。特になんにも変わりない。普通の手だ。

「それはっ!？」

五月雨が声を出す。ふと五月雨の方を向くと何故か顔を赤くしている。血圧高いのかな。大丈夫？何がなんだかわからず右手を眺める。

「その右手に持っているのは・・・」

明石が言葉が続ける。持っている？ああ、五月雨が持ってきてくれたハンカチか。確かに今俺は柄がついたピンクのハンカチを持っているが・・・そうか。これは明石のハンカチだったんだ。俺が明石のハンカチを右手に持っていたから視線が右手に向いていたんだ。なるほどね。・・・待てよ、それなら何故五月雨は顔を赤くしたんだろう。

俺の疑問に答えるように明石は言った。

「話を聞いてくださいっ!!」

ああ、もう、何がなんだかわからない。あれ？おかしいな。俺は犯罪者なのか？幼女を洗脳してパンツを持ってこさせた犯罪者なのか？ハハッ、とんだピーターパン野郎だな俺は。あれ？おかしいな。ここ地上なのに宇宙があるわ。綺麗だな。彗星か？いや違う。禿げた・・・おっさん？何だよ？手招きして。そうか俺を迎えに来たんだな。犯罪者の俺を。わかったよ、今行くから待つとけて。タピオカ？持ったよ。心配するな。ああ。

—————刻が見える—————

ドサツ!! (倒れる音)

「提督!!」

「死んだふりなんて小賢しいですよ、提督。私のレンチか五月雨ちゃんのパロスペシャルどちらか選んでください。」

「大丈夫ですか？提督・・・明石さん、提督気を失っています。」

「ええ？あら本当。仕方ないなあ。このまま鎮守府に連れていきますか。五月雨ちゃん、提督の足を持ってくれる？」

「そうですね、いつまでもここに寝てると風邪引いちゃいますし・・・よいしょっと。」

まるで豚の丸焼きの様な形で鎮守府に連れていかれる提督。

はたして彼はどうなるのか、どうなってしまうのか、それは彼にも作者にもわからない。次回「君の名は」デュエルスタンバイ!!

6、君の名は

ーごめんね。私が願ったからこんな事になってしまったの。

ーだけど、あなたしかいない。私の姉妹達を助け出してくれる人は。

ーあなたは臆病でおバカでおまけにスケベ、本当にどうしようもない人だけ。

ー私を知っている。

ーあなたには気づいていないでしょうけど、あなたには人を引き寄せる魅力があるの。

ーだから大丈夫。あなたなら出来る。信じて。

ーどんな事があっても決してくじけないで。

ー今の私には祈る事しか出来ないけど。

ーあなたの周りには私達がついている。

ーあなたに会えないのは辛いけど。

ー私、いつまでも待っているから。

ーだからね？提督。

ーいつか私を。

ー迎えにきてね。

ー。

「うつ、うつん。・・・」

起きて始めに見たものは染み一つない真っ白な天井。ゆっくり起きて周りを見渡してみる。大きな本棚、学習机のようなものに、壁には地図が貼られている。あれは茨城か？

部屋は広くはない。せいぜい人が2、3人入れるくらいか。俺が寝

ている右側にはガラス張りのベランダ広がってそこから海が見える。
ああ、俺はー「ガチャ」

部屋の奥のドアから誰か入ってくる。

「あつ、提督。起きたんですね？よかった、よかった。」

明るい声で部屋に入ってきたのは明石だった。なにやら・・・痛っ
!!なんだ？頭が痛い。

「だっ大丈夫ですか？提督。体調が悪いならもう少し寝てください
い。」

明石は俺の布団を直して寝るように促す。お言葉に甘えよう。本
当に痛い。

「驚きましたよ。いきなり倒れるんですもん。あの後五月雨ちゃんと
二人でここまで提督を連れてくるのには苦労しました。」

「その話は止めてくれ。最大級のトラウマになっちまうわ。」

あれ？言葉が、敬語じゃない、それになんだ？まったく緊張もしな
い。浜辺の時はチェリー丸出だったのに。どういう事だ？

「うん、効果はあり、と。」

明石が何やら紙に記入している。

「あのさ。」

「はい？なんですか？提督。」

「お前、さつきから何書いてんの？」

「いやあ、大したものではないですよ、全然。艦娘に対するコミュニ
ケーション良好つ、と。あつ、提督。」

「なんだべさ。」

「部下にパンツを取ってこさせるほど欲求不満なんですか？」

「ちがわいつ!!俺がそんな事させるわけねえだろ!あんないい子を悪
の道に引きずり込むほど腐ってねえわ!!」

「嘘ですよ。五月雨ちゃんからちやんと話を聞きましたから・・・うん、
問題なしっ!さっすが私。完璧な調合ね。」

「調合?」

俺は考える。調合?何の調合だ?調合って薬とかの?・・・っ!俺
は直感的に自分の腕を見る。腕の間接部分に四角の小さいガーゼが

貼られている。注射とか点滴後に貼るあのガーゼが。

「お前、俺に何か盛ったな？」

ギクツ！肩を震わす明石。

「な、ななな何ですか？盛る？私のは天然ですよお？」

なにが？

「わかりやすいな、お前。俺がこんなに初対面の奴に軽口叩けるわけがあるまい。まさかこれの副作用で頭が痛いのか？」

「あ、それは提督を連れてくる時、私がつかり落としてしまったからです。だって提督の髪、私の足にチクチク刺さって痛かったんですもん。・・・あつ。」

「言っちゃまったな。言わなくていい部分も言っちゃまったな。お前なあ、もし「まあまあまあ」

明石は俺の口に何かをあてる。先端が×の形になっている棒状の物を。これってあれだろ？どら・・・

「いいじゃないですか、細かい事は。体に害のあるものではありませんし、むしろ私に感謝する事になりますよ？まあ、今日は1日ゆっくり休んで下さい。難しい話はまた明日って事で」

俺の言葉を遮り、明石はそそくさと部屋から出ようとするがピタッと止まった。

「提督、カーテン閉めます？」

「いや、まず謝れよ。第一なんでこんなに明るいのカーテンなんて・・・」

海が見えるベランダの方を向くと。

「司令官、大丈夫ですか？」

「なによ、ピンピンしてるじゃない！このクソ提督!!」

「ちゃんと生きてるクマ。」

「当たり前だろ、姉さん。」

「どもども♪元気そうですね。記念に一枚っ！」

「ふん、情けないな。提督よ。今度私が鍛え直してやる。」

大中小様々な艦娘がガラスの向こうに立っていた。小さい子なん

てもうガラスにへばりつく形になっている。

「明石」

「はい。」

「お願い。」

「はあい。」

シャツシャツ。

「ではまた明日。お休みなさい。」

ボタンツ！カーテンを閉めてくれた明石が部屋から出た後、俺は布団にくるまり目を瞑る。もう寝よう。明日は明日の俺が何とかするさ。

ドンドンツ！

「テイトクウー!!なぜ閉めるのですカー！開けてくだサーイ!!」

「お姉様っ！ガラスを叩かないでくださいっ！壊れてしまいますっ！」

「……頭にきました。」

「照れ屋さんですね、提督さんは。」

「大人の私に照れたのね。」

「それはない。」

「私に頼ってくればいいのに。」

「何を？なのです。」

絶対寝れない。

7、忌まわしい記憶

唐突に目が覚めた。目が覚めるという事はあれから無事に寝れたという事だ。部屋の明かりがカーテンを閉めてもらった時よりいくらか暗くなっているように感じる。夜中になつたのだろうか。耳をすませば波の音が聞こえる。なんかいいな、この感じ、気分が落ち着く。

今日あつた出来事を思いだして見る。俺は仕事を辞め、失業保険が出るまで自由を満喫しようとする自分の部屋で艦これをしていた。その後、咄嗟に友達を誘ってどこか行こうと考え、スマホを手にとったら瞬間、光って俺は浜辺に飛ばされていた。

そこで初めて会つたのは艦これのキャラクターの五月雨。最初はコスプレをしている痛い人だと思つたが初対面の俺の事を提督と呼んでいた。ふざけてる様には見えなかつたし、しっかりと俺の目を見て話して話す彼女の瞳は驚くほどキラキラしていた。服装もコスプレイヤーの着ていそうな手作りの服とはまた違う、なんか着なれている感じがした。

それでも夢だと思つた俺は………？俺は………？

なんだっけ？五月雨に会つて、それでも夢だと思つて俺はあゝく………何をしたんだっけか？ええーつとそれから明石に会つて………？なんで明石が出てきたんだっけ？思い出したくないような、思い出したいような。でも何故か明石には感謝したい。そんな気がする。

記憶が途切れ途切れで気持ち悪い。本当にアイツは俺の体に何を入れたんだ？害はないって言ってたけど気になる。倒れたって言うてたからなんかの栄養剤かなんかだと信じたいが、俺の言動が高校時代の頃に戻っている。ろくなものではないという事は確かだ。

っ！一瞬、全身が震える。例の薬のせい？いや違う。そんな危ない震えではない。もつと単純なものだ。トイレ行きたい。

俺の膀胱がエマージェンシーコールを発している。ずっと行つてなかつたもんな。刺激を与えない為、ゆっくり上体を起こす。そして

足を床に着けたその時、根本的な事に気づく。

「トイレってどこ？てか、ここどこ？」

考えもしなかった。ここに来た経緯もわからなければどこなのかもわからないのだ。出入口は明石が入ってきていたあのドアしかない。この際ここが何処なのかは置いておこう。とりあえず、あそこのドアを通ってトイレを見つければ暴発してしまう。はやく・

カタカタッ！

突然、天井から音が鳴る。びっくりした。ネズミか？音がした天井を見上げると四角形の穴がぽっかりと空いていた。

理解ができずしばらく穴を眺めていると、うつすらと人の顔が見えた。悲鳴は出なかった。だって出したら出ちやうもん。

「提督、こんな時間にどこ行くの？あっ！もしかして夜戦？ずるいよっ！私も連れてって？」

声が出た後、中から何かが出てきた。

「神通も那珂ちゃんも、もう寝ちゃったから暇だったんだ。」

軽巡洋艦川内は屈託のない笑みを浮かべ俺の前に現れた。

初対面だが、なりふり構っていられない。

「すまん、川内。トイレは？」

「トイレ？私は大丈夫だけど？」

「いや、お前じゃない。トイレはどこにある？」

「そのドアを出て左側のドアを開けたら廊下に出るからそこを右に進めばあるよ。」

「ありがとう。」

よし、目的地の場所はわかった。あとは突貫するのみ。足早にドアに近づきドアノブを掴んだとき、後ろから肩を掴まれた。

「私も付いていく。」

「・・・なんで？」

8、天使と悪魔

「私、わかるよ。トイレの後・・・夜戦行くでしょ？」

「お前は正気か？それもからかっているのか？」

「どつちもっ!!」

もう正直すぎて逆に清々しい。

「貴様のエゴに俺を巻き込むんじゃないっ!!」(ア○口風)

ヤバい、そろそろダムが崩壊する。俺のほう为正気を保てないわ。すると川内の手が俺の肩から離れる。わかってくれたか。

「えいっー!」

俺が安心した瞬間、背中にズシリと重みが加わる。川内がおんぶの形で俺にしがみついていた。首に川内の腕が絡み付き、腰には足がハサミギロチンの如く挟まれる形になっている。こいつ、一瞬で首と膀胱にダメージを与えにきやがった。

「よーしっー!トイレに向かって全速全身っ!!進めー!提督号っ!!」

・・・後で泣かす。そこから無心でひたすらトイレに向かった。生きるため、解き放つため、俺は向かう、明日を取り戻す為。

ついた。俺のオアシス。長かった、本当に。途中何度も背中の中がだだっ子のように揺さぶってくるものだから首、膀胱へのダメージが波のように強弱をつけて襲ってきたのだ。気持ち的には毒沼に進んでいく勇者そのものだった。だが悪い事ばかりではない。

おんぶするという事は背負う側の背中和背負われる側の胸が密着するということだ。・・・ありがとう。

「降りてくれ。」

「もう終わりかあ。つまんなーい。」

スタツ!と俺の背中から降りる川内。

もういろいろ言いたい気持ちを殺してトイレに入ろうとするが俺は止まる。

「どしたの?」

どうしたの？だと？入れるわけないだろ。入り口に女の人のマークが付いているトイレなんて。

天使：いけません。男子足るのも淑女の憩いの場に足を踏み入れるなど言語道断です。

悪魔：うるせえよ!!もう限界なんだよ。いいじゃねえか、便所なんてみんな構造は一緒なんだよっ!!

天使：……………。

天使？

悪魔：緊急事態なんだ。きつと許されるさ。それに女子トイレに入る機会なんて二度とないぜ？

天使：……………女子トイレ。

おい、天使。

悪魔：男ならよお、冒険しようぜ？

天使：……………冒険。

天使意思弱くね？

悪魔：「レッツ……………」

天使

悪魔：「女子トイレ……………」

天死いいいいいいいいいいいいいいいい!!

……………。

「川内。」

「なあに？」

「見届けてくれ、俺の生きざまを。」

ギイイ。

もう、止まらない。俺は進む。恐れなどない。

「きゃあああっ!!」

「うおっ!!提督っ!」

「あらあらあ♪」

たどえどんな困難があらうと。

俺は逃げない。

逃げてはいけない。

俺は俺の道突き進む。

ガチャ(ドアロック音)

後悔はない、俺が決めたことなのだから。

ここですべてを終わらせる。

ジャー!!

ガチャ(ドアロック解除音)

「あ、あああああ。」

「お前っ!何を堂々・・・と。」

「うふふふ。」

俺は成し遂げた顔で蛇口で手を洗う。そして水気を落とし、出口を出た。

そこには川内が腕を組んで待っていた。

「終わった?」

「ああ、終わった。すべてが。」

それがその日最後の俺の記憶。

9、山田孝夫（上）

朝、それは1日の始まり。すべての生き物が一斉に行動を開始する。そのなかでも人間というのは他の生物とは違い、喜怒哀楽がはっきり表現できる。個体同士のコミュニケーション能力が高く、知能も高い。人間は道具を使い、物を創り、繁殖し、数を増やす。

彼、山田孝夫もその一人である。

日本海軍茨城北東支部、田尻鎮守府。今日も凜々しい声が響き渡る。

「全体っ！気を付けっ！・・・休めっ！」

人が何百、何千人くらい入れそうな会場に（体育館だと思っして下さい。）艦娘達が艦種ごとに整列している。彼女達は人類の敵、深海棲艦に唯一対抗出来る貴重な存在だ。しかし彼女達の出生は不明、そして深海棲艦と同じで海に浮かべるといふ事から最初は彼女達も深海棲艦と同じものとして考えられていた。

彼女達もあの化け物達と同じで自分達を喰い殺すに違いないと。しかし、ある日彼女達が深海棲艦を倒し、人間を守ったという噂が広まった。それから人類は態度を改め、彼女達と友好関係を築き、人類を守るため協力して貰っている。それが大まかな流れだ。

「0800、それでは朝礼を始めます。現在、我々の海域近くには……………」

壇上には軽巡洋艦大淀、通称任務娘が朝礼を仕切っていた。様々な報告、状況が事細かに話す。そして。

「……………という事です。何か質問はありますか？」

「……………」

「無いようならこれで…あっ！」

朝礼が終わろうとした時。大淀は何かに気がついた。

「申し訳ございませんっ！提督の挨拶を忘れていました。提督、どうぞ。」

艦娘全体が壇上に視線を向ける。

すると気絶した山田提督を明石が担いでやって来た。

「ごめん、大淀。提督また気絶してて全く起きないんだ。いちお連れ
て来たけど・・・」

明石は山田提督を雑に下ろすと肩を回す。

「ええ？なんで気絶してるの？仕方ない・・・これも業務の為。」

そう言うで大淀は腕をまくり、深呼吸をした。そしてカツと目を大
きく開けると。

「はあああああ!!」

という掛け声と共に人差し指で山田の頭を突いた。すると。山田
の目がすつと開いた。

「・・・えっ？何、この状況、怖いんですけど。」

あの夜、川内に人生終了の報告を終えて涙を流していると突然背後
から何者かに殴られ気を失った。そこまでは覚えている。そこから
何故この場所にいるかがわからないけど。

俺の回りには満足そうな・・・大淀？と何故か顔がひきつっている
明石。そして大量の艦娘。状況が把握出来ない俺に大淀はマイクを
手渡す。

「さあ、提督。ご挨拶をどうぞっ!」

「挨拶ってなんの？」素で返す。

「なんのって、私達艦娘に対する労いの言葉とか。これからも頑張ろ
う。みたいな？」

お前、そんなフランクなキャラだっけ？

10、山田孝夫（中）

労いの挨拶といわれてもなんの事だか、さっぱりわからん。労いより謝罪の挨拶ならわかるが、体育館に人が集まりその前で挨拶するというのは校長の挨拶かスポーツ大会の開会式ぐらいなものだろう。よく寝たからか頭がやけに回る。昨日の第一号女子便所特攻作戦の実行に対する謝罪の挨拶かと思ったが違うらしい。

音一つ無く、大勢の前に見られているこの状況で昨日の一件がここにいる全員がまだバレていないのかバレているのか判断がつきにくい。女という生き物は噂話で成り立っている（持論）。昨日の俺の行動を見た奴が他の奴に話した時点でアウトだ。ゴキブリ方式で広まってしまう。事実は事実だ。それは認める。だけど弁明をさせてもらいたい。あれは仕方ない状況だったと、決して欲望に負けて入ったのではないと。

俺は昨日のすべての元凶、川内を血眼になって探す。いた。川内は真ん中より少し後ろ側にいた。あつ！目が合った。するとすべてを悟ったように右手を上げ勢いよくサムズアップのポーズをとった。川内い……。信用してるぞ。俺も川内にサムズアップを返した。

場面は変わり……

「姉さん」

「なに？神通」

「提督となにをなされてたのですか？」

「川内の後ろの神通が微笑みながら聞いてくる。」

「昨日、遊んでくれてありがとうって意味でサムズアップしてたの」「そうなんですか。いないと思ってたなら提督の所に……良かったですね。遊んでもらって」

姉の幸せそうな顔を見つめ神通もつられて笑う。

ちなみに末の妹、那珂は立ったまま器用に寝ている。

「うん。提督におんぶしてもらってね、トイレまで運んでもらったの。」

「もうっ！姉さん、トイレくらい自分で行ってください。恥ずかしい。」

提督にそんな事をさせたのかと神通は少し怒ったように叱った。

「違うよ？トイレに入ったのは提督。」

「え？」

神通は理解できなかった。姉の言葉を。なにせ100%女性というこの鎮守府に男性用トイレという場所は存在しないのだから当然だ。神通がバグったファミコン並に硬直していると前から声が聞こえた。

「本当よ。」

川内の前に立っている龍田が答える。

「昨日、天龍ちゃんとトイレで話していたら提督が入って来たの。凛々しかったわあ。でも天龍ちゃんは顔を赤らめて涙目になっちゃって、可愛かったわ。」

「お、おい！その話をするなっ！あれは、あれだっ！目にゴミが入っちゃっただけだっ！！だがアイツが入ってきたのは本当だ。間違いねえ！」

龍田におちよくられ、天龍も反応する。

「吹雪もあの場にいたから後で聞いてみるよ。」

龍田と天龍の主張で疑惑が確信へ変わった。一連の会話を聞いた神通はフリーズしている。

「ねっ、本当でしょ？」

無邪気な顔をして語りかけてくる姉の話など最早、彼女の耳には届かなかった。しかし他の艦娘にはしつかり聞こえていた。さあ、山田のいうゴキブリ方式が現実になろうとしている。覚醒の時は近い。

「司令官、なんてことしてるのよ。」

「・・・ハラショー。」

「雷がいるのに。」

「意味わかんねえよ、なのです。」

陽炎型

「司令、最低。」

「ホンマ、アホやなあ。」

「不潔です。」

「・・・」

「へんたいさんだあ。」

「嘆かわしい。」

「いいねえ、その発想は無かったわ！」

白露型

「一番に話が盛り上がってる。悔しい!!」

「あとでお仕置きねえ。」

「君には負けたよ。」

「提督さん、頭おかしいっぽい。」

吹雪型

「うう。」

「うちの姉を泣かせるなんて許さないっ！」

「男らしいなあ。」

睦月型

「まあ、提督も男だから気持ちはわかない事もないにやしー。」

「怒ってないよ。」

「うぷぷ、このまま地獄に落ちればいいぴょん♪」

「あほくさ」

軽巡の近くに整列していた駆逐艦から重巡、軽空母、空母、戦艦、潜水艦と提督の勇姿はあつという間に駆け巡る。巡洋艦だけに。

山田は何か話そうと口を開けようとすると、駆逐艦の列、先頭の雪

風が手を挙げた。

「雪風さん、どうぞ。」

大淀が雪風に言った。

大淀に指された雪風はにっこり笑いながら山田に問う。

「しれえはおとこのひとなのになんでおんなのひとのといれにはいったんですか？」

t o b e c o n t i n u e d

11、山田孝夫（下）

土下座とは日本に古くから伝わる最大の謝罪の形。地面に直接座り、額を擦り付けるといふ日本人の伝統的文化である。アニメ、ゲームなどの主人公が女の子の裸、または身体に触るなど一線を一時的に踏み込んだ場合によく発動させる。見ている方はいい。ただ眺めて「あははっー」「マジかよ？ありえねーww」「必死かよ？」と感想を述べて終わるのだから・・・

雪風の発言より約0.5秒、彼女の上官はそれはそれは綺麗な土下座をしていた。あるものは笑い、あるものは驚き、あるものは呆れ、あるものは寝ていた。しかし彼の号泣しながらの弁明のおかげで結果的に全員の誤解を解くことが出来た。この一件で鎮守府の男性用トイレの設置を決定。この出来事は後に「土下座便所革命」と呼ばれる事になる。この革命が後日、日本中の鎮守府に大きな衝撃を与えるなど今の山田には知るよしもなかった。

その後、朝礼は終わりそれぞれ会場から退出する。残ったのは壇上の大淀、明石、そして弁明に成功した達成感で右腕を上げたまま燃え尽きている山田だけになった。

「今回、初めて朝礼やったけどやっぱりダメね〜。馴れない事やるもんじゃないわ〜。」

「お疲れ様、でも結構、様になつてたよ？大淀。」

「ありがとう、でもまさかこんな事になるなんて思わなかったなあー。」

「仕方ないでしょ？私達の提督なんだから。土下座の時は驚いたけど、言い訳もせず堂々としていて好感が持てるよ？私は。」

「そうね、どこぞの色ボケ親父とかあのイケメンよりはいくらかマシかも。」

「それより大淀、今さらだけど口調が素だけどいいの？」

「いいのいいの。この人、さつきから右手上げたままだし、どうせまた

お得意の気絶でしょ？私本当は敬語嫌いなよねえー。なんつーか疲れる？みたいな？」

大淀が衝撃の告白をしたと同時に山田の右手が下に動いた。

「明石。」

「あつ、はい。」

突然、山田に呼ばれて明石は驚きながら答える。一方大淀はやってしまったという表情で固まっていたが、次第に今までの自分の会話を思いだし、顔が青ざめている。そんな事を知ってか知らずか山田は続ける。

「そろそろ教えてくれないか？ここはどこで、俺はなぜここにいるかを。」

山田の真面目な質問に緩んでいた明石の顔もキュツ！と引き締まる。

「わかりました。それでは執務室に行きましょう。そこですべてをお話します。ついてきて下さい。」

足早に明石は出口に向かっていく。山田も後についていくが途中で止まった。大淀の前で。

「大淀。」

「はいいいいい！」

「トイレをなるべく早く早く作ってもらいたい。頼めるかい？」

「はいっ！今すぐに妖精さんに頼んで今日中にでもっ！」

「ありがとう。」

「いえいえっ！当然の事ですのでっ！」

「あと・・・」

「はいっ！」

「ストレスになるようなら敬語使わなくてもええよ？俺も敬語嫌いだしな。」

「えっ？」

予想外の言葉に啞然とする大淀に山田は握手を求める。

「お前とは、なんか長い付き合いになりそうだ。そんな気がする。だからよろしく頼む。」

「……………。はいっ！こちらこそよろしくお願いします。提督。」
握手を終えた後、ダツシユで明石を追いかけていく山田を見ながら
大淀は思った。

この人が私達の提督になってくれて本当によかったと。

12、進展

大淀は高校時代に同じクラスだった、萌子ちゃんに似ている。先生に敬語を使わない生徒として悪い意味で目立っていた。黒い眼鏡に髪はショートカット。それに毎日真っ赤なカチューシャをつけていた。

本人いわく、大人に敬語を使うと自分がナメられるから使いたくないそうだ。そんな彼女に俺は惚れていた。高校時代の最初で最後の初恋だったんだ。

顔は違うが、話し方、声が彼女に似ていた大淀に親近感がわき、あの頃と同じように接していた。・・・未練だな。

明石を追って会場を出ると目の前に大きなプールがあった。何人かの艦娘が水上に浮かんでいる的に何かを撃ち込んでいる。射撃訓練、みたいなものだろうか。

「おっほん!!」

突然の咳払いに驚き、振り向くと出口の引き戸に背中を預け腕を組んでニヤリと笑う明石がいた。お前、ちゃんと待っていてくれたのな。すると背中を引き戸から離し、俺の正面に立つ。しばらく間が空いたあと俺に手を差し出し得意そうに言った。

「お前とは、なんか長い付き合いになりそうだ。そんな気がする。だからよろしく頼む。」

俺は素早く明石の手を握るとおもいつきり力を入れた。

「いだだだだだだっ!!い、痛いですっ!!止めてくださいあいつ!」
ギリギリギリギリ。

「ごめんなさいっ!ごめんなさいっ!つつ、爪が、爪が食い込んでますっ!!」

「お前ともなんか長い付き合いになると思うがまあ、なんかその、う

ん。よろしく」

「雑っ!!」

その後、涙目+膨れっ面の明石が無言で俺を先導してくれた。途中至るところで艦娘に話しかけられたが笑って誤魔化した。一人一人相手にしているとキリがないからな。会場からしばらく歩くと大きな建物が見えてきた。

「着きましたよ。ここが私達の鎮守府です。」

「すんごいね。」

それしか言葉が出なかった。全体が煉瓦におおわれており、窓がこれでもかというほど並んでいる。横幅も長くまるで漫画にありそうな感じの建物だ。平民の俺にはとてもじゃないけどそれぐらいしか表現出来ない。

「あと少しです。はぐれないでくださいね。」

明石にただひらすらついていく。階段を何回か登り、廊下を進む。そしてやっと明石は一つのドアの前で立ち止まりドアノブを引く。相談室って書いてあった。

「ここで座って待っててください。準備して来ますので。」

通された部屋には2つのソファアの間テーブルが置かれているだけのとてもシンプルな部屋だった。例えるなら学校によくある応接室だ。とりあえず片方のソファアに座る。疲れた。こんなに疲れたのは中学の合唱コンクール以来だ。

トントン。ガチャ。

「失礼します。」

「失礼します。」

明石の後に大淀も入ってきた。二人は俺の前のソファアに腰掛ける。気まずい。

「それでは改めてお話致します。提督、いえ山田孝夫さん。あなたが何故ここに連れてこられたのかを。」

大淀が先ほど会ったとは違う真面目な顔で口を開いた。

連れてこられた？コイツらは俺がこの世界の人間ではない事を知っているのか？それに俺の本名まで……。鼓動が早くなり、背筋がゾツとする。いままで溜め込んでいた不安が一気に溢れだした。額に汗が流れる。

大淀と明石は真面目な顔で俺を見つめている。とても不気味だ。部屋中が静寂に包まれる……。

すると明石がポケットからなにやら大きなものを取り出した。ヘルメットだ。……。ヘルメット？視線をヘルメットから大淀と明石に変えると彼女たちはさっきの真面目な顔を一変させて穏やかに笑っていた。そして口を揃えてこう言った。

「VRで」

「VRでっ!？」

山田孝夫の声は鎮守府中に響いたという。

13、キヤパシテイ

もうツツコミの気力も無くなり素直に明石からヘルメットを受けとる。見た目は全体が黒で、そこら辺に見かける普通のヘルメットそのものだった。中身を覗くと赤やら青やらいろんな色の小さい光が点滅していて前の部分には液晶になっていて何やらロゴが映っている。なんだかカツコイイ。

「ささっ、ググイツと被っちゃって下さい！」

明石が身を乗り出して催促してくる。山田はそんな彼女の勢いに怯むと深呼吸をして大きく息を吐く。覚悟を決めてヘルメットを被る。

ウイイイイ。

音とともにロゴが消え画面が暗くなる。しばらくして明るいbgmが流れ出す。始まるのか？画面が黒から白に変わる。

「なぜなに艦これー!!」

小さくデイフォルメ化された明石と大淀が大きくてを振っていた。

「ようこそー！艦これの世界へ、山田孝夫さん!!」

「今からこの世界の事、そして私達、艦娘の事をより良く知ってもらおう為、分かりやすくお教えしまーすっ！」

「説明を担当する大淀とっ？」

「解説を担当する明石でえす！」

「よろしくお願いしまーす!!」

.....。

「まず、この世界は山田さんがいた世界ではありませーん。」

手を×の形にする大淀。

「ここは山田さんがいた世界のもう一つの可能性、パラレルワールドなのですっ！」

えへんと胸を張る明石。

「こちらの世界は山田さんの世界より科学が進歩していて車や電車、

飛行機などの移動手段は無く、みんなワープホールを使って人間はみんな移動しているよ。」

「らくちん、らくちん♪」

「そんな中、突然海の中から異形の化け物、深海棲艦が現れたの。」

「そして奴らは次々と人間を襲いはじめたのよ。」

お互いの体を抱き合ってブルブル震える大淀と明石。

「人間も武器や兵器を駆使して対抗したんだけど・・・」

「まったく効かなくて被害は広がるばかり。しかも奴らは人間が使っていた武器、兵器を吸収して更に強くなっていったんだ・・・」うつむく二人。

「そんな時、奴らに対抗できる唯一の存在が現れたのです。それが・・・」

大淀の目がキラキラ光る。

「私達、艦娘です!!」

ピースする二人。

「その後、なんやかんやあって人間と協力して深海棲艦を倒していったんですが、」

「ある科学者が艦娘など奴らと同じだ。信じられるかと反発し、なんと核弾頭を撃ってしまったのです。」

うつむきながら話を続ける二人。

「その行動が全国に衝撃を与え、各国でも同じような事が起きるようになったの・・・」

「放射能で住めなくなった人類は最低限の人間を残し、宇宙へ避難しました。今は木星に住んでいるんだ。」

「私達、艦娘はそのままでも深海棲艦にダメージを与えられますが、指

揮をする人間、すなわち提督がいればより強力な力が出せるという事がわかったのは人類が宇宙に行つて二日後だったの。」

「そこで人類の技術を結集して、あなたの世界、パラレルワールドから提督の素質がある人を連れて来ようつて事になったんだ。」

「確実に優秀な人を連れて来る為、艦娘の育成、管理がシミュレーション出来るアプリ、通称艦これを作つて山田さんの世界に普及させたのです。」

「そして優秀な人材、山田孝夫さん、あなたが選ばれここに呼ばれたという訳です。」うつむいていた顔を上げて、にこやかに笑う二人。

「あなたは・・・」カポツ！ヘルメットを脱ぐ山田。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「あれ？これからがいい所なのにもう脱いじやうんですか？提督？もう少してデイフォルメ化された水着の私と大淀をVRで堪能する事ができたのに。」

「ええっ！そんなの聞いてないわよ！明石。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「提督？・・・あつ、VRのスイッチ入れてない。それで脱いじやつたんですね？それならそれで最初から言ってくればいいのにー。」

「ちよつと、明石！話聞いているの？ねえ！」

「・・・笑う。」

「え？」

「俺のキャパを余裕で越えてて笑う。」

山田の目に光は灯っていなかった。

「大丈夫ですよ。提督。」

明石はあっけからんと山田に言った。

「……………」

しかし山田はただただ、机の一点をじつと見ている。人形のように。

「…………仕方ないなあ。」

そう言うとも明石は山田の隣に座り、山田に抱きついた。

「えっ?えっ?何をしてんの?」

明石の突然の行動に大淀は動揺し、明石を指差しながら顔を赤くして肩を震わしている。

「いやあ、男の人ってこうすれば元気になるって昔、本で読んだから」

山田に抱きつきながら何事も無いように大淀に答える明石。

「い、いくら提督でもそんな事で…………」

「大丈夫ってどういう事だ?明石?」

「ええ?」

さつきまで死んだ魚の様な目をしていた山田が明石に抱きつかれた瞬間、瞳に光が戻り顔が前よりもイキイキとして、足まで組むほど余裕な表情をしている。社長と秘書がイチャイチャしている絵を想像してください。そんな感じですよ。

「よいしょっと、それはですね。この世界に連れて来られたのは提督だけではないんです。」

山田に光が戻るのを確認すると明石は大淀の隣に座り直した。

「俺だけじゃないって事は他に俺と同じ様にここに連れて来られた人がいるって事?」

「そうです。そしてその人達は提督より前にこの世界に来ています。」

「よかった、俺一人なのかと思ったよ。」

「あははっ、提督程度が一人で世界を救える訳ないじゃないですかw」
ピキッ!

「それにほとんどの深海棲艦はその人たちのお陰でほぼ壊滅。今はど

この海域も平和そのもの。少しここに来るのが遅すぎましたねえw」
ピキッピキッ！

「でも油断出来ません、ほぼ壊滅でも壊滅ではないのですから。なので提督にもこの田尻鎮守府で指揮をとってもらいこの世界の人類の為、完全な平日を取り戻す為に奮闘してもらいたいです。」

ピキッ、ピキッ、ピキッ！

「丁度いいじゃないですか！敵の数も少ないし、ド新人の提督でも業務を比較的楽にこなせますし、そのうえゆつくりと経験も積むことが出来る、一石二鳥良いことづくめです。」

ピキッ！ピキッ！ピキッ！ブッ！（なにかが切れた音）

山田はゆらりと立ち上がり、明石が座っているソファの後ろに立ち止まった。

後ろに振り向きながら山田を見上げる形になる明石、その隣の大淀も同じように山田を見ている。

すると山田は明石の肩を後ろから両腕で包み込む、すなわちあすなる抱きというものだ。ちなみに女子がされたら恥ずかしいけど、一度されてみたい抱きしめかた第1位らしい。

「あわわわわ。」

山田の突然の行動にまたもや顔を赤らめる大淀に対し、あすなる抱きをされた明石は。

「提督、困ります。いくら私が魅力的だからってこんな事・・・」

先ほど自分から提督に抱きついた時とは違い、ほんのり顔を赤くさせてボソボソとか細かい声で呟くように声を出した瞬間。

「ぐえっ！」

明石は女とは思えないほど低い声を出した。

やった。山田のあすなる抱きは首絞めに進化した。

「大淀」

「はっ、はい。」

一連の流れを見ていた大淀が突然山田に呼ばれ思わずウラ声で返事をした。

「だいたいはわかった。俺はこの田尻鎮守府とやらでお前達を指揮して化け物共を一匹残らず駆逐☆すればいいんだろ？」

「だいたい合っています。」

「他にもイロイロと突っ込む所はあるが、おいおい解決していくとして……」

「で、提督っ！ 苦しいですっ！ タイム、タイムッ！」

さっきのキョンキョンとした展開はどこにいったのか、山田の腕をバンバン叩きながらじたばた足を動かしている。山田は腕が少し緩めた。

「画面の前の皆は真似しちやダメだよ？ やられた方は本当に洒落にならないからね。」

「誰に話しているのですか？ 提督？」

上の方を向いて語りかけている提督に質問する大淀。

「なんでもない、さっそくで悪いんだがこの施設を案内してもらえるか？ ある程度場所を把握してないと困るから。」

「昨日の事ですか？ 大変でしたよ、提督がトイレに倒れたって吹雪ちゃんと呼びに来てくれなかったらあのまま龍田さんにバラバラにされる所だったんですよ？」

いまだに首絞められたままの明石が会話に入ってくる。

「そうか、あの後龍田に手刀かなにかを喰らったから記憶がなかったのか。」

「で、私が提督を元の部屋までおぶって運んだんです。」

そうか、そんな事があったのか。山田は明石がしてくれた事について目頭が熱くなり、首絞めの姿勢を崩し、明石に感謝と謝罪の言葉を掛けようとしたその時。

「寝てる提督の顔がマヌケすぎて思わず笑っちゃいましたよ、……あっ！」

その一言がなければ彼女は助かったのだろう。

「ゆるさん。」

一気に山田の腕に力が入り、明石の首を締め上げていく。やったね。山田の首絞めはガチ首絞めに進化した。

ギリギリギリギリ!!

「ぐええええ!ぐめんない!ぐめんない!」

「大丈夫だ、明石。俺はメ○ルギ○シリーズを長年プレイし続けたベテランだぞ?加減はわかる。」

「そういうことじゃ・・・」ガクツ。

気絶した明石をそのままにして何事もなかったようにドアに向かいドアノブを掴む山田。

「よし、案内してくれ。」

ガチャ!

山田はやり遂げた顔をさせ、啞然としている大淀にそう言うので部屋から出て行ってしまった。

大淀は白目をむいて、顔中の穴という穴から水分が出ている明石を一瞥する。

「……………いいなあ。」

その後山田の後を追って部屋から退出した。

15、立ち上がれ

部屋から出た山田はふと廊下の窓から外を眺める。朝、大勢の艦娘と会合を行った会場、途中見かけた大型プール、オリンピックでも開けるんじゃないかという程のグラウンド。何もかもスケールがデカイ。人類の大半は木星に行ったとは聞いたがその影響もあるのだろうか。人がいなくなつたから勝手に敷地増やしました。みたいな？まさかな・・・。

「お待ちせしました、提督。」

山田がつまらない事を考えていると大淀が声を掛けてきた。

「ああ、いやいや全然待つてないから大丈夫だよ。」

山田の言葉に少し顔をホツとさせると大淀はすぐ真面目な顔になり言葉を続ける。

「お気遣いありがとうございます。それではまず、この施設について説明させていただきます。」

敬語は使わなくていいと前に勢いで言っちゃったけど、やっぱりタメ口なんか使わないよな。常識的に考えて。素の口調がなんかギョルっぽかったし中身は結構、サバサバしてたりするのだろうか。やはり少しあの子に似ている気がする。

「ここは茨城県の北部にある町、田尻町の土地を日本海軍が買い取り、深海棲艦から市民を守るために造られた建物です。正式名称は日本海軍茨城北東支部田尻鎮守府、少し長いですが田尻鎮守府と覚えてもらえは大丈夫です。」

「ここ茨城だったの？建物もでかいからてつきり、もつと都会のほうかと思つてたのに。」

「ふふつ、大本営、つまり日本海軍本部がある東京都はこの鎮守府の倍以上あるんですよ？」

「この倍っ!？」

「この鎮守府だけでも十分大きいと感じるのに、これの倍つて・・・。。。。さすが都会、金使いが荒いわ。」

「続いて、この建物内の説明をさせてもらいます。今私達がいる階は

最上階の5階になります。この階では主に作戦のミーティング、緊急時の為の避難場所に使われる多目的ホールがあります。しかし使われることは滅多にありません。他にはさつき私達がいた相談室、物置部屋があります。」

相談室から目と鼻の先に多目的ホールはあった。大淀がドアを開けて中を見せてくれる。映画館の様な巨大スクリーンが部屋の奥に付いており、床がすべて畳になっている。床に座るタイプか。すごくいい。い草の匂いが部屋いっぱい広がってじいちゃんの家を思い出す。今すぐ俺も畳の上でゴロゴロしたい。そう思っただけに入りに横になろうとした時。

「あれえー？提督じゃーん。どうしたのー？こんなところでー？」
「はうっ！」

突然呼ばれビックリした山田は思わず声が出た。

「あははー、提督ビビりすぎー。だから駆逐艦にナメられるんだよー？」

山田が右に視線を移すと二つ折りにした座布団を枕がわりにして仰向けの状態になりながら顔をこちら側に向けている女の人があった。「やっぱりここにいましたか、北上さん。いつも言っているでしょう、ここは寝る所ではないと。」

大淀があきれた様子で北上に注意をする。

「いいじゃーん。あたしここで昼寝するのが唯一の楽しみなんだもーん。」

目を擦りながらゆっくりと上体を起こしていく北上。

「大淀もたまにはここで寝てみたらー？気持ちいいよー？」

「寝ません。今私は提督にこの鎮守府の案内をしているんです。あなたみたいに寝てばかりでは業務に支障をきたしてしまいます。」

「んー。つまり提督とデートしてたのー？いいねえ、妬けるねえ。」

北上は煽るように大淀に笑いかける。

「でっ、デートだなんて、違います！私はただ案内をしていただけ

で・・・そんな・・・って、提督なに寝てるんですかつ!」

山田は北上から借りた座布団を頭に敷き大の字で横になっていた。

「えーわー。これえーわー。気持ちいいーわー。最高やー!」

「でしょー? 話がわかるねえー。さすが提督ー。よっ、いい男!」

「よせやい、照れるべ。」

すっかり意気投合している山田と北上。

「もうっ! 提督っ! 次っ! 行きますよ!」

顔を膨らまして山田の腕を引っ張る大淀の肩に何かピョンと飛び乗った。

「あら? 妖精さんが・・・。」

「妖精!?」ガバツ!

「うわっ!」

大淀の妖精という単語にいち早く反応し山田が勢いよく起きた。あまりの速さに隣にいた北上が驚いている。山田は大淀の肩で動いている生き物をマジマジと見る。大きさは手のひらに収まりそうなくらい小さく、ヘルメットとつなぎまを着ている。身振り手振りで一瞬懸命大淀に何か伝えようとしているようだ。可愛い。これが妖精さんか。そうだな。これが妖精・・・あれ? 俺ここに来る前に妖精にあったような気が・・・痛っ! 急に頭が。

「・・・そう。ありがとう。」

妖精から何かを聞いたらしい大淀が胸ポケットから何かを取り出し、妖精にあげていた。スルメだ。自分の体より大きいスルメを受けると嬉しそうにぴよんぴよん跳ねている。可愛い。

「提督、妖精さん達が4階に男性用トイレを設置してくれたそうなので。さっそく見に行きましょう。」

「ありがとう!! 妖精さんっ! ありがとう!!」

自分より大きなものに土下座をされる。妖精さんは今どんな気持ちだろうか。

大淀の肩から降りると妖精さんは山田の耳に近づいてきた。

「ナニ、オレラニトツチャコンナノアサメシマエヨ。アンチャンモタ

イヘンダナ。コレカライロイロトアルダロウガ、ナニカアツタラオレ
ラヲタヨレ。」

何この妖精。メツチャイケメンじゃねえか、見た目に似合わず工事
現場のおっちゃんのような頼もしい言葉が聞こえてくる。

「ミテタゼ？チヨウレイ。ナサケネエナ、ダイノオトコガドゲザナン
テ。イマモダ。」

言葉が出ない。

「ダガオマエハイイワケモセズ、カノジヨタチニシンシニムキアイア
ヤマツタ。ナカナカデキルコトジャナイ。」

・・・妖精さん。

「アノスガタヲミテ、オレタチハ、オマエハシンジラレルオトコダト、
カクシンシタンダ。」

・・・。

「サア、カオヲアゲロ。ドゲザハ、イチドダケデイイ。」

妖精さんはヒョイと山田の頭に乗ると胡座をかいて座った。

山田の瞳に真っ赤な炎が宿る。

「よし、行くぞっ！」

山田は立ち上がる。全身からとてつもないやる気が感じられる。

「さすが提督。一瞬で妖精さんと心を通わすなんて。」

「そうだねー。気分やの妖精さんがこんなにかいキキしている姿なん
て久しぶりにみたよー。」

一瞬で妖精さんと仲良くなった山田を見て、大淀は目を輝かせ、北
上は目を丸くさせている。

16、めぐりあい便所

その後、男性トイレに向かう途中、妖精について聞いたみた。大淀によると妖精は大きく2つに分けられるらしい。一つ目は艦娘の武器、装備の修理、改修、開発を得意とする妖精。そしてもう一つは建物の建造、増築、警備を得意とする妖精。

妖精さんも深海棲艦、艦娘と同じ時期に発見されたらしい。個体にもよるが大体は真面目な性格で、仕事はキツチリやつてくれるらしい。好物はスルメで仕事をこなした報酬として受けとっている。人間でいう給料みたいなものだ。あと仕事の錬度により成長して大きくなるらしい。はて？どこかで聞いたような……。まあいいか。

それでもまだ謎が多いそうで細かい生態はまだよくわからないそうだ。

そんな事を聞いてるうちに、トイレについた。俺はふと回りを眺める。やはりそうだ。ここは俺が川内をおぶり、命を懸けて駆け抜けた場所だ。なぜおぶつたのかあまり覚えていないが、アイツ、笑ってたな。顔は見えないけど俺がおぶってる間ずっと。

「浜辺に埋めてやる……。」

「埋めるー？何をー？」

「なんでもない。」

俺の発言に北上がツツコんできた。多目的ホールから出るとき、暇だからあたしも行くー。とついてきた。男性トイレは女性トイレの横に造られていた。そんなスペースなかったような気がするが、ツツコんだら負けだ。

俺の頭に乗っていた妖精さんはトイレに着いた途端、俺の頭から降り、俺のズボンを引っ張りながらトイレのドアを指差している。開けるという事か、おやすいご用だ。ドアは押すタイプで男性のマークが書かれている。パーフェクトだ、妖精さん。ドアを開けるとそこから複数の妖精さんが出てきた。1、2、3、4、5。結構いるな。ドア

から出てきた妖精さんはスルメを持った妖精さんの周りに集まった。するとスルメを持った妖精さん（これから隊長と命名）が他の妖精さんにスルメを手でちぎって配っている。

チクシヨウ、きゅん死にさせる気か。

スルメを配り終えた隊長は俺の方を向き敬礼をしてきた。つられて他の妖精さんも敬礼をする。俺も咄嗟に敬礼を返した。なんかカッコいいなこういうの。すると廊下の奥の方へ走っていった。まった。キュートだぜ。

気を取り直してドアを開ける。内容はとてもシンプルで小便器と大便器と手を洗う蛇口のみ。男は俺しかいないし、丁度いいだろう。大便の方は何故かドアが閉まっているが、十分だ。

俺は後ろを振り向き二人に話す。

「じゃあチョイと試してくるから」

「どうぞ。」

「ごゆっくりー。」

大淀と北上を一瞥しドアを閉める。

丁度、小を催してきたしきつそく……。

ジャー!!

「ふうー。」

蛇口を回し手を洗う山田。ふとドアが閉まっている大便器の方を見る。

「確認してみるか。」

後にこの行動が彼にさらなるトラウマを与える事になる。

ギイイイイ。

「さて、どんな感じかな？」

あまり考えず、己の衝動のみでドアを開ける。見慣れた洋式だろ
うが妖精達が造ってくれた出来立てほやほやのトイレだ。ぜひ見たい。
心なしかワクワクしながらドアを全開にする。へえ、これが……：

時は止まった。

決して魔法の類いではない。

彼は自ら止まったのだ。

彼の脳にフラッシュバックが起こる。

ーあつははははあー!!キツモチイイイイ♪

ーいいえ、妖精さんといつても個体差がありますから……

ーーあんなに大きい妖精さんを見るのは初めてです……

ーーー私達の鎮守府に……

山田は瞳から光が消えていく。遠足が突然中止になった事を知ら
された小学生の様に。

光輝くスキンヘッド、立派なヒゲ、紺色のネクタイ、そして体を覆
い尽くす黒光りした筋肉のおっさんが当たり前のように便座に座つ
ていた。

「変態だああああ!!誰か来て・・・」

山田が助けを求めると同時におっさんが立ち上がり、凄いスピードで動き、山田の口を手で塞ぐ。

「うむうううう!!んんんんっ!!」

虚をつかれた山田はひたすら暴れる。生きる為、外の二人に気づいてもらう為。無我夢中だった。

だがおっさんはものともしない。片腕だけで山田を押さえつけている。するとおっさんは空いている片手の人差し指を唇に当て、まるで静かにしろと言わんばかりの眼光を山田に飛ばす。殺される。山田はそう思った。

「提督?どうかしました?」

トイレの中から物音と声が聞こえて不審に思ったのか、大淀が声をかけてくる。

大淀っ!助けてくれ!殺される!そう叫びたかったが今の俺には何も出来ない。どうすればいい?そう考えているとおっさんが咳払いをして

「いや、なんでもない。テンションが上がって、コケただけだ。」

と話した。コイツ、俺の声で話しやがった!!声帯模写かつ!!おっさんはドヤ顔で俺を見てきやがった。コノヤロウ!!

「そうですか、気をつけてくださいいね。」

大淀っ!気づいてくれっ!俺はっ!

「ああ、もう出るよ。」

もう出る？俺を殺さないのか？キョトンとおっさん見ると手を話してくれた。おっさんは首をコキツコキツと鳴らすとヒゲに手を当て話始めた。

「手荒なことをしてすまない。我輩は妖精だ。君に危害は加えない。」

もう危害は加えられてるよ、心に。

「貴殿に会うのはこれで2度目だな。」

2度も地獄を見せられた俺の身にもなってくれ。

「存分に貴殿と語り合いたいが残念な事に時間がない。」

時間、よくやった、グツジョブ。

「これを。」

おっさんはネクタイから手紙を出し、俺に渡した。

「この鎮守府に慣れたら、我が大本営に来てくれたまえ。それには大本営の門を通る際、必要な書類とカードキーが入っている。ではっ！」

そういうとおっさんは床に吸い込まれるように消えていった。

ギイイイ、バタン。

「提督っ、お怪我はありませんでしたか？」

「もー、提督ー。遅いよー。何やってたのー？」

「……………」

「？」

「どうしたのー？提督ー？」

「大淀」

「はい？」

「北上」

「んー？」

「どちらでもいい、俺を強く抱き締めてもらえるか？」

17、だが断る

「トイレから出てきて、突然抱きしめてくれて……一体何言ってるんですか!？」

と少し興奮した状態で大淀が山田に答えた。

違う、違うんだ大淀。俺は決して邪な想いでお前達に抱きしめてくれと言ったんじゃない。俺は今、ギリギリで精神を保っている。先程のボーイミーツガールならぬニートミーツマツスルの出来事で俺の精神がもう半分死滅してしまったんだ。

人間、不安な時や辛い時、誰かに慰めてほしいとか頭を頭を撫でてほしいとかってあるだろ？今まさにその状態なんだよ。大人のくせに何いってるんだ。我慢しろよ。とか思った奴は出てこい。そして俺と同じ体験してみろ。

トイレのドア開けたら、無表情のボブ・○ツプが座ってたんだぞ。そして一瞬で俺との距離を縮めてそれと同時に俺の口を鷲掴みしてチラツとほくそ笑んだんだ。恐怖そのものだぞ？超展開過ぎて走馬灯が走ったわ!!おまけになんか香水のようないい匂いしたし……。もうっ!なんなんだよっ!なんなんだよっ!意味わかんねえよ!もう帰してくれよっ!帰してくれないなら抱きしめてくれよおっ!!

山田の精神が極限状態に突入しようとした時。

そつと山田の右肩に何かが置かれた。

「提督も大胆な事言うねー。でも女の子にいきなり抱きしめてなんてセクハラで訴えられちゃうよー?」

山田の横から北上が自分の右手を山田の右肩に置き、肩を組む状態になる。

「抱きしめるのは嫌だけどー、これならいくらでもしてあげるよー。」

北上は少し目を細くして山田に言った。

山田の顔にみるみる活気が戻ってくる。

パシヤ。

「北上、ありがとう。俺頑張るよ。」

「うん。期待してるよー。」

しばらくして、肩を組む状態を解き、山田と北上は向かい合って握手を交わしている。大淀はもうどうでもよくなつたのか窓から空を眺めている。彼女も段々山田の扱い方がわかって来たのだろう。
ヴヴ〜。

大きなサイレンが鎮守府内に響いた。

「えっ、何っ？敵かつ!？」

突然の音に山田が驚きながら反応する。

しかし彼女達は落ち着いている。何故だ？答はすぐわかった。

「ええ？もうお昼？早いなあ。」

大淀が呟いた。

「お昼？昼飯か？すごい音だな。」

敵が来たのかと思うほど大きな音だったな。そういえばもうほとんど全滅に近いとか言ってたっけ。山田がふと思いついて出していると。

ドタドタ、バタバダ、タツタツ、ドスドスドス!!

今度は下の階から複数の足跡の音がする。

「おおおお、凄い揺れだ。やっぱり敵か？」

「いえ、おそらく食堂の席取りをするための足音かと。」

眼鏡の位置を直しながら大淀が説明してくれた。

「席取り？こんなに広いのにそ・・・ぐえっ!!」

突然、襟を掴まれ強く引っ張られた。北上に。

「提督っ！なにやってんの！早くしないと駆逐艦共がいい席取られる

よっ!」

さっきまでのまったりとした顔が一変、阿修羅のような顔をしている。さっきまでの母親のような笑みは何処にいったの？

「引っ張るなっ! 苦しいっ!」

「いい? 席を取れないって事は駆逐艦の○○○に××[×]されて△△△△[×]されるのと同じ事なのっ! そんなのあたし耐えられないっ!!」

「お前っ! よくそんな汚い言葉でるなっ! 怖いわっ!」

山田の声を無視して襟を掴んだまま北上は進む。

「いやいやいやっ! 俺は後でいいからお前だけで行ってこいよっ!」

「だが断る!!」

「何でだっ!!」

北上は山田をグイッと脇に抱え走り出した。

パシヤ! パシヤ!

「いやあく、またいいのが撮れました。ネタが全く尽きませんねえ♪ 嬉しい限りです。」

「.....」

「さて、提督も行ってしまいましたし、私達もお昼ご飯食べに行きますか?」

「.....す。」

「え? 何です?」

「握り潰す。必ず。」

「あーらら、目が据わっちゃってまあ。こりゃあ提督も大変ですねえ。」

18、尻太鼓

「で？食堂ってどこなん？」

北上の脇に抱えられながら山田は聞いた。

「地下の一階っ!!」

俺の質問に簡潔に答え、北上はひたすら階段を降りる。てゆうかよく俺を片腕で支えられるな。普通、人間が人間を片手で持てるなんて相当な力持ちか映画やアニメのキャラクターぐらいだろう？こんなアツサリとバツクみたいな感覚で持たれるとは夢にまで思わなかったよ。

ちなみに今の俺は北上の左腕に腹をシートベルトのようにガツチリと挟み込まれている状態だ。そうだな、サーフボードを抱えるサーファーを想像してくれ。そんな感じだ。北上とは逆の方向に担がれているから、前がどうなっているのかさっぱりわからない。

「うおおおお!!」

「いつちばああああんっ!!」

「どけええええっ!!」

「やらせないよおおお!」

階段をどンドン下に降りてくと、雄叫びのような声が聞こえてきた。ナニコレ？すごく怖いんだけど。近づきたくないんですけど。すると俺の前に複数の艦娘達が勢いよく現れた。こちら側に走ってくる。どうやら彼女達も北上と同じ考えらしい。すると北上は階段を少し左に動いて、空いている右腕を横に伸ばした。まるで通せんぼしているようだ。階段の幅は大体、横に二、三人並べるかくらいの長さしかない。北上め、自分より前に行かせないようにバリケード張りやがったな。

「お前……。」

「……。」

とうとう俺の事をシカトし始めやがった。だがその勝利に対する執念。嫌いじゃない。

「北上っ！アンタ、ズルいわよっ!!通せんぼなんて…え？提督さんっ!? なっ、何やってるのっ!?!」

北上のすぐ後ろに付いていた瑞鶴がギョツとする。

「お前は…瑞鶴か?」

持たれながら階段を降りてるせいか、頭がガクガク動いてまともに相手の顔が見れない。でも格好と声でなんとなくわかった。

「うん。そうだけど。てかなんでそんな状態になってるの?」

瑞鶴が驚きながらも走りながら聞いてくる。器用だなあ。

「案内してもらっていた途中で拉致られた。」

「拉致られたって…なさけないわねえ。男のくせに。」
「それな。」

言ってくれるな、俺だつて好きでこんな事されてるんじゃない。普通の道なら抵抗も少しはしただろうが、ここは階段だ。もし落ちて変な所に当たったら死ぬかもしれん。けして、もう面倒くさいとか結構楽しいかもなんて思っていない。マジで。いやマジで。

階段が終わったのか、揺れが少し落ち着いてきた。瑞鶴以外にも続々と艦娘が増えていく、段々この状態が恥ずかしくなる。だって俺より小さい子も一生懸命走っているのに大人の俺が抱えられて楽しんでいるんだもん。情けないというか、男として恥ずかしい。

おお、いい匂いがしてきた。カレー? 揚げ物? 焼き魚? いろんな匂いが混ざって、まさにザ☆食堂って感じがする。そのとき北上の足が止まった。着いたのか? 首を右、左に動かす。入り口付近に大量のコップとその隣に水と書かれたサーバーが見える。すごい大ききさだ。後、メニューもある。板に品名が書かれていて取り外せるようになっている。以外に少ないな。

他の艦娘はどうしたって? 北上が止まったとたんに横からどんどん抜かしていったよ。巢を襲われたスズメバチのようにな。すれ違

うたびに俺に気づくといろいろな反応を見せてくれる。

「うえっ、なんで?」

「何遊んでんの? 司令官?」

「暇だね。提督。」

「キモッ!」

「度し難いな・・・」

「誰だっ!! 今キモいっていった奴!! 落ち込むから本当に止めてくださいっ!!」

山田が涙ながらに叫ぶと声が聞こえた。

「おーい。北上く、提督くこつちだクマ〜。」

「おおー。姉さんさすがー。」

突然の声に北上が答えた。口調が戻っている。

すたすと歩き出す、おそらく呼ばれた方向に向かっているのだろうか。後ろ向いているからさっぱりわからん。てか着いたなら下ろしてくれよ。

「食堂が開く30分前から店の前でスタンバっていたクマ〜。」

「大変だったにや。」

「違う、待ってたのは俺だ。姉さん達に命令されて渋々並んでたんだ。」

「あははー、木曾は大変だねー。」

なにやら会話をしている。だから下ろしてくれよ。俺の尻に目はついてないぞ?」

「提督く。遠慮しないでここに座るクマ〜。」

パンッ!

「にや、にや、にや。」

パンッパンッパンッ!

「.....」

さわっ。

「お前ら人の尻を何だと思ってるやがる。」

無防備な俺の尻を何人かに叩かれた。

「北上、下ろしてくれ。俺の尻をいじめたソイツらに天誅を下してやる。」

北上は山田を支えていた腕の力を緩めるとすぐに力を入れ、今度は山田を肩に担いだ。

「えっ?」

戸惑う山田をよそに北上は山田の尻を叩いた。

パンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツパンツ。

「「イヨオオオオオオ!!」」

パンツ!!

食堂内に和太鼓のような音が響く。

「やんやんやんやクマ〜。」

「いい音にや。」

「だ、大丈夫か?」

「いやー、さすが提督だねー。いい尻してるよー。最高ー。」

「.....」

この時の山田の顔を見た他の艦娘は皆、口を揃えて言った。

あれはヤバいと。

19、あなただけ見つめてる

「だからごめんって提督ー。あたしが悪かったから許してよー。」
「いいや？怒ってないよ？大丈夫、大丈夫。」

「少し、はしやぎ過ぎたクマ〜。許して欲しいクマ〜。」

「だから怒ってないってば。元気があつていいじゃないか。」

「怖いにや、ごめんなさいにや。」

「もうっ、だから怒ってないっていつてるじゃないか。あんまりしつこいと本当に怒っちゃうゾ？」

あの後、俺は北上に降ろされ、席に座るように促された。テーブルには球磨、多摩、木曾がいた。テーブルも椅子も木でできている。テーブルには6個椅子が置いてあった。

俺の隣に木曾、その隣は空席。俺の前には北上、その隣に球磨、多摩と並んで座っている。席に着いた俺は目の前の北上を見つめている。ただそれだけなのになんで皆そんな事を言うんだらう。不思議だなく。すると隣の木曾が俺に言った。

「お前、そろそろ止めたらどうだ？」

「え？何を？」

「何をつて・・・その目だよ。」

「目？」

木曾は胸ポケットから手鏡を出して俺に見せた。

「姉さん達も反省しているようだし、もう止めてやってくれ。その目、俺が見ても少し怖いぞ？」

俺は木曾の鏡を見た。光がない瞳、血管のように血走っている眼球。わあお、俺こんな目をしてたんだな。それは怖いわ。俺の怒りが脳を超えて顔に反映されたんだな。まああの状態で18コンボも繰

り出されちゃこうもなるわ。

ん？　そういえばさつき俺の尻を叩かず、サラツと触るだけでの奴がいたな。もしかして・・・俺は声が他の人に聞こえないように手で鼻と口を隠しながら木曾の耳元で話す。

「なあ、木曾。」

「ん？　なんだ？」

「お前、さりげなく俺の尻を触ったろ？」

「なつななななななつ!!」

木曾の顔が一気に赤くなる。

「やっぱりそうか、なにも責めてるわけじゃない。姉が俺の尻を叩いてたから自分も空気を呼んで叩こうとしたけど途中で可哀想と思つて、急遽俺の尻を触るだけに止めてくれたんだろ？」

「うううううううううう!!」

木曾は両手で顔を覆って悶える。

「ありがとうよ。お前まで叩いていたら俺は正気を保てなかった。その優しい心をいつまでも持ち続けてくれ。」

俺が木曾にお礼を言つて顔を離れると。

「そつ、そうだよ。僕は提督が痛くないように触っただけで触りたいから触ったわけじゃないんだから・・・」

チラツと俺の目を見て木曾は俯いてしまった。

・・・なんだこの女の子らしい仕草。いや、女の子なんだが、なんかこう現代の女性にはない可憐さがある。今の女はやれ高級品だの、イン○タだの、タピオカだの頭が狂ったように同じ事を何回もグルグルグルグルグルとやってるイメージしかないのに（女性の皆様すいません。）この子はどうか。俺の尻を触っただけでこの恥ずかしがりよう。おまけに口調も俺から僕に変わって・・・どうしよう。かつてない程、ドキドキしている。

「提督、木曾が赤くなってるけど何かあったクマ？」

「いいいや、なんでもない。なんでも。」

突然、球磨から声をかけられ、ビックリする。

「まあ、いいクマ。お腹減ったから早く注文しようクマ。」

「そうにや、多摩のお腹ペコペコにや。」

「提督もいつもの顔に戻ってくれて安心したよー。さあ何頼むー？」

「うん、ぼ．．俺も腹減ったぜ．．．そういえば大井姉さんまだ来ないのか？」

「何いつてるクマ。さっきからお前達の後ろに立ってるクマ。」

「え？」

俺と木曾の声が重なる。

大井はずっと見ていた。山田が座った時からずっと。瞬き一つせず、ただただ見ていた。この男をどう始末するか考えながら。

20、球磨

「まったく、提督には本当に困ったものだわ。」

山田と北上がいなくなった後、大淀が疲れた顔で歩きながら食堂に向かっていた。

「私のペース乱されまくりでまいっちゃうわー。やっぱり敬語止めてフランクに接してみるかなー？提督なら怒らなさそうだし・・・」

すると向こうから誰かが走ってくる。

「大淀さーん、ここにいたのー!!」

伊19がこちらに一目散に走ってくる。

「はあ、はあ、はあ、はあ。」

「どうしたの？そんな息を切らせて・・・。ああ、まるゆさんにまた追いかけてるの?」

「ちっ、違う・・・提督と大井さんが・・・」

「へ?」

「いつ、いいから早くきてなの!!」

なにやら切羽詰まってるイクに手を引かれ何処かに連れていかれる大淀。

「なんか嫌な予感しかしないんだけど・・・。」

球磨が大井の存在を山田と木曾に知らせて数秒。山田は戦慄していた。今までにないプレッシャーが彼を飲み込み、それに耐えられないのか心臓が異常に鼓動を上げていて、今までにないほどの感覚に軽く吐きそうな顔をしている。

「・・・・・・・・。」

山田の額に汗が流れる。

その時、大井が口を開いた。

「ごめんなさい、遅れちゃって。」

大井は姉妹達に軽く謝罪をする。

「もういいから、早く席につくクマ。腹へったクマ。」

「にや。」

「そうそうー。早く注文しちやおうよー。大井ー。」

「……………」

傍からみれば、大井は姉妹達と仲睦まじく話しているように見えるだろう。だが実際は違う。大井は俺の首を前から見えない絶妙な位置で後ろからつねっている。指全体を使い爪を立てて。ほら、木曾もなんとも言えない顔でこっち見てるだろ。

「えっ？何？提督？私とお話したい？仕方ないなあ。」

大井が突然、山田に一方的に話かけた。

「いや、俺は……………」

ギリイイイ!!

「話したいいいいっ!!」

「提督ったら大胆。と言うわけで姉さん。ちよつと提督とお話してくるわね。」

山田の襟を掴み、引きずりながら出口に向かう大井。

「わかったクマ。適当に二人分頼んでおくクマ。」

手を振りながら山田と大井を見送る球磨。

「なあ、姉さん。」

「ん？」

「提督大丈夫なのか？」

木曾に聞かれた球磨の顔がみるみる変わっていく。

「大丈夫だろ。アレでも俺らの提督なんだ。死にはしねえよ。」

先程までの球磨とは違い、語尾のクマもなくなり男のような話し方をしだした。

「でも……………」

「くどい。ならお前も付いていけばいい。俺らの提督はそんなにヤワじゃねえ。さっきのアイツの目……。面白くなりそうだ……。」

ニヤリと笑う球磨に少し戸惑う木曾。

「これで大井の性癖が治ればいいんだけどなー。」

窓の外を眺めながら北上がため息をついた。

俺は食堂の隣の休憩スペースに連れてこられた。

大井に手を離され、そのまま横になるように倒れる。

「痛いっ!!」

頭を打ってしまった。大井は腕を組みながら俺を見下ろしている。俺なにかしたっけ?とりあえず立とうと手をついて立ち上がろうとした瞬間に俺の肩を大井が抑えた。

「?」

「……じゃないの。」

「え?」

「私と同じ目線に立つんじゃないのよっ!!」

ドゴオ!!と凄まじい音がこだまし、山田の下半身が床に埋まってしまった。

訳がわからないというか物理的におかしいだろと心でツツコミながら呆けた顔をしている山田に大井は言葉を続けた。

「アンタ、ここに来るまで北上さんとイチャイチャイチャイチャイチャイチャイ……。羨ましいのよっ!私の気持ちを知っていて、わざとやっているのっ!?!北上さんと仲良く話していると思ったら、添い寝までして。」

添い寝?お互いの体を密着させて寝る?してない、してない。俺は無言で首を振る。

「その後、北上さんと手を繋ぎながらラブラブモード全快で食堂に向かって……。」

諸君、前回か前々回の話を見返してくれ。そんな事あったか?

「もう許さないっ！アンタのチ○○握り潰して・・・」

「女がチ○○なんて言ってるんじゃねえええええええっ!!」

山田はその単語を聞くと一気に床の底を蹴りあげ、地上に出てきた。

「な、なに?」

山田の突然の復活に大井は驚き、尻餅をついた。

山田には今だかつてない程のオーラを身に纏っている。

シユウウウウウウ。!!

スーパー○イヤ人並みの光を放ちながら大井に近づく山田。

「いやあ、止めて、来ないでえ。」

大井の目から涙がポロポロと溢れている。

「駄目だろ、女の子が容易にチ○○なんて言っってはっ!!」

山田の目には憎しみや恨みではなく、汚い言葉を言った、大井に対しての純粋な怒りだけがあった。

山田は大井に素早く近づき、両足首を持った。

「きやつ、アンタツ！何を・・・」

咄嗟にスカートを抑え、恥じらう大井をよそに山田は大井の両足首に自分の脇を挟め、持ち上げる。そして・・・

「ハアツ!!」

と声を上げた瞬間、大井を回し始めた。いわゆるジャイアントスイングである。

グルン、グルングルン、グルングルングルングルングルングルン
グルングルングルングルンッ!!

まるでムシ○○ングのス○パー○ルネー○スローの如く回転数を上

げていった。

「……………て。……………わ……………」

大井の声も最早聞こえない。

しばらくして回転を緩め、大井をゆっくりと地面に降ろした。

「うううううう!!」

大井が仰向きになりながら、顔に腕を置き、おいおいと泣いていた。大井だけに。

「ヤバイ、さすがにやり過ぎた。」

大井のマジ泣きを見て、冷静さを取り戻した山田が申し訳なさそうに近づく。

「ご、ごめんな?でも女の子なんだからチ○○なんて汚い言葉使うのは良くないと……」

山田は大井の顔を見る。すると腕の隙間から目が見えた。泣いてない。むしろ笑っているように見える。

山田が後ろに一步下がろうとした瞬間。

ここから速かった。大井は山田の足に蹴りを入れ、体勢を崩すと素早く上体を起こし、うつ伏せに倒れた山田の背後に回り、腕を両足で踏み、背中に座って首から顎を掴んだ。駱駝固め、別名キヤメルクラッチ。

「あああああああああつ!!」

山田が苦しそうに叫ぶ。

それに対して大井は狂ったように笑う。

「あつはつはつはつ!!獲ったわ!!これで北上さんと○○○○よーつ!!」

苦しい、苦しい、洒落にならない。どうしよう。死ぬのか?俺は……………。

「大井。」

後ろから声が聞こえる。

「さすがにそれ以上はダメクマ。」

そこにはクマが立っていた。回りには複数の艦娘もいた。野次馬だろう。

「姉さん邪魔しないで！後少しで・・・」

球磨に意見しようとした時、大井は止まった。球磨や他の艦娘からの殺気が彼女に集中していたからだ。球磨は咳払いをして言った。

「お前、ここで提督を殺すつもりクマ？本当に殺すなら覚悟するクマ。いくら姉でもコイツらからは、お前を守りきれないクマ。」

球磨を含め、他の艦娘からの殺気が一層、強くなる。

「・・・ごめん、なさい。」

あまりの緊張感に山田から離れ、震えている。大井。

すると球磨はにぱつと笑い、艦娘達の方をみて言った。

「うちの妹が迷惑かけたクマ。もう大丈夫だから食事を続けて欲しいクマ。」

明るく言い放つと、他の艦娘はゾロゾロと食堂に戻っていった。そして休憩スペースには球磨と大井、そして気を失った山田だけになった。

皆が戻るのを確認すると球磨は振り返る。

「おふざけが過ぎたな。まさか殺そうとするなんて思わなかったぞ。」

球磨が大井にゆつくりと近づく。
ポンツ。

球磨が大井の肩に軽く手に置く。

「コイツは俺に任せて、お前は部屋に戻って反省してろ。飯は後で持っていてやる。」

大井は頷く。

球磨の手が大井の肩から離れた瞬間、球磨は大井の耳元で小さく言った。

「2度目はない。」

大井はビクツと震え、走って自分の部屋に戻っていった。

「やれやれ、大井の奴め。手間をかけさせる……。」
首を鳴らし、気絶している山田を眺める。

「まあ、人間にしては良くやったんじゃないか？ タイマンで艦娘と渡り合うなんざ、大したもんよ。」

そう言うと山田の体を起こし抱き抱えた。お姫様抱っこで。

「だがな、大井に遅れるようじゃ、まだまだだ。お前にはもう少し強くなってもらわにや困る。頑張りな。山田の坊や。」

球磨は山田の顔を見ながら微笑むと食堂に戻ろうとした。すると

「あそこっ！ あそこなのねっ！」

声がする方を向くとイクと大淀が走ってくる。

「ここで提督と大井さんが喧嘩を・・・って何も無いの。」

「はあはあはあ、腰が痛い。」

イクは球磨を見つけ、近づいて来た。

「・・・提督っ!!球磨さん、どうして提督を抱いているのね?」

「ああ、うちの大井と喧嘩した後、疲れて寝ちゃったんだクマ。大井は泣かされて自分の部屋に帰ったクマ。」

「そうだったの?でも来る途中、大井さんとはすれ違わなかったの。」

「途中でトイレにでも行ったんじゃないかクマ。それより二人とも早くしないと席無くなっちゃうクマよ。」

球磨は山田を抱えたまま食堂に戻っていく。

「そうなのね、イクもお腹減ったの!!大淀さん。早くイクのー。」

イクは大淀の腕を引っ張りながら食堂に向かう。

「え?結局何だったの?」

と疑問を持ちながら食堂に連れていかれる大淀だった。

21、山田孝夫の事件簿

「・・・と。」

「っ・・・。」

「・・・とく。」

「うっ、うう。」

「提督ー。」

「あっ、・・・ん？」

「やっと起きたー。おはよう提督ー。」

「・・・ああ、おはよう・・・。」

提督と自分を呼ぶ声に山田は反応して意識を取り戻す。最初に食堂に来たときと同じ場所に座っていた。

「あれ？俺は・・・。」

山田がおぼろげに先程の事を思い出そうとしたその時、鼻孔をくすぐるいい匂いがした。すると腹からぐうぐうつと大きな音が鳴った。

「まあまあ、そんな細かいこと気にしないで早く食べるクマ。冷めるクマよ？」

そう言いながら球磨はどんぶりの麺をすする。他の姉妹達も球磨と同じように何やら食べている。

「はい、これ提督の分ー。」

目の前の北上が俺にどんぶりを差し出した。

「天ぷらそばだよー。美味しいよー。」

北上は俺にそばを差し出した後、割り箸もくれた。

「ありがとう。」

起きたばかりで頭が動いてないのか、ボーツとする。でも腹が減ってるせいか、手は自然に動いた。

ズズズー。

うまい。この世界に来て初めての食事だ。そばはネギと天かす、そしてカマボコだけの非常にシンプルな物だが今の俺にとっては最高のご馳走だ。どんどん食べるスピードが速くなり、一気にスープを飲み干した。

「はああ、うめえなあ〜。」

俺はきつと今、とても幸せそうな顔をしているのだろう。感覚でなんとなくわかる。そば一杯でこんなに幸せな気持ちになれるとは。食べられるっていいね。生きるって素晴らしいね。そんな事を考えていると。

「おー。速いな。そんなに腹が減ってたのか？」

隣の木曾がどんぶりを持ちながら言ってくる。ちゃんとお茶碗持ちながら食べるなんて行儀いいな。

「あれ？木曾もそば？」

「ああ、俺も天ぷらそばだ。というか皆、天ぷらそばだぞ？」

「そうなの？」

俺は他の奴を見渡す。確かに器が皆同じでそばをすすっている。

「なんだクマ？これは私の分クマ。あげないクマ〜。」

目が合った球磨がジト目でこつちを睨んでいる。

「にやー。」

多摩は自分の物だと言わんばかりに自分の分のそばを身体全体を使って守っている。

「いや、大丈夫だ。取らないからゆっくり食べな。」

俺の言葉に安心してか二人は警戒を解いて食べ始めた。

「二人とも大げさだなー。」

北上が笑う。

「全くだ。」

木曾も笑う。

「そうだよな。さすがの俺も人のは取らないわ。」

俺も思わず笑ってしまった。

「それもそうかクマ〜。」

「にゃー。」

「『「あつはっはっはっは!!」』」

気がついたら皆で笑っていた。ここに来てからはいろんな事が続いて笑うなんて出来なかつたし、落ち着く暇も無かつた。だけど今は腹も膨れ、気の合う仲間?とこうして笑いあっている。今、とても充実している。そんな気がする。

「.....」

山田はふと空になった自分のどんぶりを眺める。

ああは言ったけど、やっぱり何か物足りないなあ。もう少し何か食べたいなあ。そんな事を考える山田。

サクツサクツ。

すると前の方をから何とも言えない美味しそうな音がした。

「ん〜。美味しい〜。」

見ると幸せそうにモグモグと口を動かしている。割り箸の先には海老の天ぷらがあつた。

そうか、そうか。海老の天ぷらかあ。そうだよな。天ぷらそばっていったら海老天だもんなあ。カラツとした外側にプリつとした海老のハーモニーがたまらんよなあ。北上は好物は最後に食べる派かあ。うふふっ、俺達気が合うかもなあ。付き合っちゃおうか?なーんて.....

「あ?」

「んー?どうしたのー?」

天ぷらだああ?俺そんなモン一口も食ってねえぞ?そうだよな、天ぷらそばって天ぷらが主役であるから天ぷらそばなのであって、天ぷらが無い天ぷらってそれってもうただのそばですよん!?!いや待て状況を整理してみよう。起きたばかりでまだ頭が寝ぼけているのかも知れんし。

キーワード1

「天ぷらそばだよー。美味しいよー。」

キーワード2

そばはネギと天かす、そしてカマボコだけの非常にシンプルな物だ。

キーワード3

「ああ、俺も天ぷらそばだ。というか皆、天ぷらそばだぞ?」

キーワード4

「なんだクマ?これは私の分クマ。あげないクマ。」

キーワード5

北上の箸の先の海老天。

「.....ふっ。」

ガタツ!

「いきなり立ってどうしたのー?トイレ?」

「クマ?」

「にゃ?」

「?」

「北上よお、ちよつとひとつ走り付き合えよ。」

「え?」

「地獄までな。」

次回!! 「山田孝夫の事件簿（解決編）」お楽しみに。

22、山田孝夫の事件簿（解決編）

「お前、俺の海老、盗ったろ。」

山田は冷静な顔を保ちながら、静かに北上に問う。

「海老？何の事だかサツパリ。」

山田からの指摘に一瞬、体を震わせるが北上の顔はポーカーフェイスに変わり、何を言っているんだ？という風に手でジェスチャーをする。

「じゃあ、さっき俺の前で旨そうに食ってた海老はなんだ？」

北上のどんぶりをビシッと指差しながら山田は言った。

「だからそんなのないよ。ホラ」

北上は自分のどんぶりを山田の前に出すと、どや顔して腕を組んだ。確かにどんぶりの中には海老らしきモノはなく、そばのスープだけが残っている。

「確かに、普通に見ればスープだけのどんぶりだが・・・」

「提督っ、何を・・・」

山田は北上のどんぶりを持ち上げ、スープをゴクゴクと飲んだ。

「・・・っ。」

北上の顔がみるみると青ざめていく。

「んっ、んっ、んっ、・・・はあっ!!ならこれは何だっ!!」

スープを飲み干した山田は北上の目の前にどんぶりを乱暴に置いた。

ドンツ!!

どんぶりの中には少量のネギ、天かす。そして海老の尻尾が三個つあった。

「あわわわわ。」

「青ざめたな・・・北上。」

確信を得た山田はニヤリと笑みを浮かべた。そしてまた顔を元に

戻し言った。

「つーか、俺が海老をツツコんだ時、海老持ってたやん？海老食ってたやん？そんで尻尾をスープに入れてたやん？俺見てたやん？……お前現行犯やん。」

「てへっ。」

北上が右手でコツンと頭を叩く。

「いやー、ノリいいねー。一回やってみたかったんだよねー。こーゆうのー。」

北上の顔が普通に戻る。

「まあ、俺も少し変なスイツチ入って、あんなリアクションとったけど面白かったわ。」

「だよねー。でさあー……」

「ん？」

「ごめんねー？海老天食べちゃってー。提督の海老、私達の海老より大きくて美味しそうでさー。ついー……」

今まで海老天を食べたことを隠していたのは許せんが、頭を下げて北上が謝ってくれた。子供のような言い訳だが嘘偽りを感じない。まったく……最初から謝ってくれば俺もこんな事しなかったのに。「ふっ。わかったよ。」

人差し指を鼻の下でこする山田。

「提督ー、許してくれるのー？」

北上がペアつと顔を明るくする。

「ああ。」

山田はしっかりと北上を見据えこう言った。

「絶対許さねえ。お前も必ず浜辺に埋めてやる……川内と共に。」

ガタツ!!

どこかの席で大きな音が聞こえた。いるな、川内。俺は忘れてねえぞ？俺を○ツシーにした件と女子便所特攻作戦についての情報漏洩。お前も目の前で口を開けて硬直している北上と一緒に浜辺に埋めてやる。時間がかかってもいい。絶対に埋めてやる。．．．いや、もう一人か。

「木曾、この天ぷらそばに海老は最初、何個入ってたんだ？」

「提督、海老の数え方は尾だ。一尾、二尾と数える。生きているのは匹でいいけどな。」

可愛いだけではなく博学とは大したものだ。勉強になった。

「ああ、すまない。話題がそれてしまった。私のどんぶりに海老は二尾入っていたな。皆もたぶん同じ数が入っているはずだが．．．」

「だいたいそんなものだろうな。だが北上のどんぶりには海老の尻尾が三つ。と言うことは．．．」

俺はゆっくりと右斜めを向く。

「．．．．．」

球磨と多摩が二人揃って上を向いていた。

「どっちだ？俺の海老食べたのは？」

「ちよ、ちよっと待つクマっ!!」

球磨が慌てて山田に問いかける。

「木曾はっ？木曾も容疑者の一人クマよっ？」

「木曾は大丈夫だ。会ったばかりだが俺にはわかる。」

山田は木曾の頭を撫でる。心なしか木曾もうれしそうにしている。

「差別だクマー!!」

「にやー!!」

二人揃ってドンドンと机を叩く。見事にシンクロしてやがる。さすが姉妹。

「まあ落ち着け。一つだけチャンスを与えよう．．．」

「クマッ!!」

「にやー!!」

「今正直に話せば海老天の件はチャラにしてやる。もちろん北上も無罪放免だ。」

ビクッ。

「さつきは埋めてやるとは言ったがあれは嘘だ。正直に言えば許すよ……」

「コイツだクマッ!!」

「コイツだにやっ!!」

互いに互いを指差す二人。

「デデーン、球磨、多摩アウト。浜辺に埋めまーす。」

「なんでクマッ!!」

「なんでにやっ!!」

「もういい、最早何も語るまい。えーつと、北上、球磨、多摩……そして川内か。」

指を一本つつ折りながら数を数える山田。

ガタツガタツ!!

「なんてな。」

「クマ?」

「にや?」

「埋めると言っても実際にはできないし、第一女の子だからな。」

「「「?」」」

「ある程度には腹も膨れたし、それに久しぶりに笑わせてもらった。ありがとうよ。」

「『……………』」

「……………だが今度また俺の食い物盗ったらマジで埋めるからな。つ!!わりい、ちよつとトイレ行ってくるわ。」

山田は少し恥ずかしそうに立ち上がるとトイレのある四階に向かっていった。

「俺らが女の子……………か。」

「あたし女の子扱いされたの久しぶりだー。」

「私にもやー。」

「お、俺もだ……………」

山田が姿が見えなくなると四人ともほのかに顔を赤らめていた。

「いや、あなた明石を締め落としたじゃない。」

今までのやり取りを後ろの席から座って見ていた大淀が天ぷらそばをすすりながらボソツとツツコミを入れた。

23、真の絆

俺は考えていた。やはり何かがおかしいと。さっきの「女の子だからな。」発言について違和感を感じていた。何回も言うようだが俺は人見知りだ。人との対話、ましてや女の子との会話なんて緊張してまじ出れないハズだと。

ここに来て最初に会った五月雨、明石との会話だってあんなにテンパってたのに今はどうだ。

「ごきげんよう、提督。」

「提督、チーッス!!」

そのあと出会った、川内、大淀、北上、球磨、多摩、木曾、大井。彼女達とは当たり前のように話をして交流もしている。

「こんにちは、提督」

「待ってください、扶桑姉さまっ!・・・こんにちは。」

皆とは初対面なはずなのに、段々と他人ではないような気もしてきた。川内とは兄妹のように接し、大淀とは親近感を覚え、北上達とは仲良くご飯を食べ、大井とは死闘を演じた。

「あっ!クソ提督っ!!一丁前に呼吸なんかしてるんじゃないわよっ!!」

「曙ちゃん、そんな事言ってはダメだよ?すいません、提督。」

「あはっ、マジワロスw」

なんか体力もついたような気もするし、俺が俺じゃなくなっているような・・・そんな感じがして不安になる。

「やあ、提督。もうご飯は食べたのかい?って何しているんだ!二人ともっ!」

「提督さんのお尻なんか気になるっぽい?」

「魅力的なラインなのよねえw。」

あれか?俺がここに運ばれてきて、目が覚めた時に見た腕の傷跡。薬の調合なんたらと明石が言ってたがやはりアイツのせいか?さっきの首締めから時間も経っているし、探してみるか。

「おお、提督ではないか。どうした悩みごとか?よし、聞いてやるぞ。」

その代わり尻を愛でさせてもらおうか?」

「駄目よ、長門。他の子が見ているわ。後にしなさい。」

「それもそうだな、すまない、しり・・・提督よ。また後でな。」

「うふふつ。それではまた・・・。」

.....

地下一階からトイレがある四階まで階段でゆつくりと移動していた山田は立ち止まった。

すると山田の前の階段から誰かが降りてきた。

「あいたたた。提督ってば酷いなく。私のような美少女に首を締めるなんて・・・あつ。」

明石と山田の目が合う。

「あつ、提督っ!!ここで会ったが百年目!!さっきの借りを返させてもらいますよお?」

胸から大型レンチを取り出し、こちら側にジリジリと近づいて来る明石。

スツ。

山田は右の手のひらを明石に見せ、止まれの意思表示をした。

「ハンツ、命乞いですか?提督?確かに私達艦娘は、一般人に危害を加える事は出来ませんが、自分達の上官、すなわち提督が私達に対して暴力、乱暴を行った場合、自己防衛としてならある程度、危害を加えてよいと。大本営からお達しが出ているんですよ?」

「.....」

「提督は私に乱暴をしましたよねえ?」

明石の顔がニタアと歪む。

「なのでこのレンチで提督の脳天をぶつ叩いても問題はないって事ですよねえ?」

レンチを舐めながら挑発的な態度で山田を見る明石。もはや女の顔をしていない。

「二つだけいいか?」

山田は明石を訪ねる。

「俺の体に何をした？」

「何をした？・・・ああ、ナノマシンの事ですか。」

明石の顔が少し戻り、山田に答えた。

「ナノマシン？」

「そう、ナノマシン。そうですね、簡単に言えば小型のウイルスです。体の中に入ったナノマシンはその人の身体的能力を高め、精神、肉体を飛躍的に向上させます。」

「精神、肉体の向上か。」

「そうです。思い出してください。私達と初めて会ったとき、提督っば童○感丸出しで狼狽してたじゃないですかw」

顔を歪め、手を叩きながら笑う明石。

「ナノマシンを注入した事により、今私ともこうして会話が出来ているし、体力も上がった気がしませんか？そうでしょう？だから言ったじゃないですか、私に感謝するって。」

「.....」

「さあ、もういいでしょう、提督。私ってね、以外に執念深いんですよ？深海棲艦ならともかく、ただの人間に遅れをとるなんて私のプライドが許さないんですよっ！やられたらやり返す・・・倍返しだっ!!」

明石はレンチを山田に向かって振り上げた。

「だけど勘違いしないでください？決して提督が嫌いな訳ではありませんので。このレンチは特殊な素材を使っていますが、ナノマシンのお陰で大した怪我はしないはずですよ・・・ですからっ!!」

ゴオオオオオ!!

レンチが山田に振り落とされる。

「これで相子にしましょうよっ!!」

ドシン!!

大きな衝突音が廊下中に響いた。

「・・・なんで避けなかったんですか。」

「一発は一発だからな。」

山田は明石のレンチを両手で受け止めていた。

するとレンチが消え、明石がペタリとへたり込む。

「まさか受け止めるとは、さすが提督。」

「少し痛かったが、お前の言う通り何ともないわ。まあ、これで俺は今までの疑問を解消出来たし、お前も俺に一撃入れた。これで俺達にわだかまりは無くなったって訳だ。」

山田は座り込む明石に手を差しのべた。

「んじや、改めて。お前とも長い付き合いになりそうだ。そんな気がする。だからよろしく頼む。」

山田さん、いえ提督は私によくと手を伸ばしてくれた。会場ですた握手の時のような、ふざけた感じではなく真面目な態度で私を見ている。

「仕方ないですねえ。」

私は提督の手をとり、立ち上がった。ふざけたと思えば、急に真面目になったり。本当に面白い人ですね。いいでしょう、この明石。あなたの為に惜しみ無く力をお貸ししましょう。

「こちらこそよろしくお願ひしますっ!!提督っ!!」

24、尻と山田と大本営

明石との友好関係をより強くする事に成功した山田は目的のトイレに向かおうとしていた。

「じゃあ俺はトイレに行くから、またな。」

トイレに行く為、明石を通り過ぎようとした時。

「提督、そのポケットから出ている物は……」

明石から声をかけられ、山田は止まる。

「ポケット？」

思わず右と左のポケットを確かめると、ガサツと左のポケットから音がする。それに気づいた山田は顔をしかめた。凄まじく。

「提督、なんて顔を……そんな顔するなんて一体何なんですか？それ。」

「大丈夫だ。問題ない。」

「いや、大丈夫じゃないでしょ。凄く嫌そうな顔してましたよ？ちよつと見せてください。」

明石がそれをくれと言わんばかりに手を出す。

「大丈夫だ。問題ない。」

山田はそれだけ言うトイレに向かおうとした。

「待ってください。」

ガツ!!

「先ほどよろしく頼むと言ってくれたばかりじゃないですか。そんなに私の事……信じられないですか……?」

いつになく泣き出しそうな表情をして弱々しく山田に問いかける明石。

「ああ、信じられないな。お前みたいなのは。」

山田は明石の姿さえ見ず、冷たくいい放った。

「ひ、酷い。これからはあなたの為に頑張ると心に決めたのに……」

「……」

「見損ないましたよっ!!あなたはそんな人ではないと思っていたのに。」

ギユウウウウ!!

「だったら・・・」
「？」

「だったら早く俺のケツから手を離せやっ!! 変態女あああああああああつ!!」

ゴンツ!!

「なんだ、お前らは俺のケツを何だと思ってんだ? あ? あれか? ブームか? 罰ゲームか? 野郎のケツ触ってなんの需要があるってんだ?」
「うう。」

頭に大きなタンコブが出来た明石を座らせ山田が愚痴と言う説教をしている。

「ここに来る途中だつてな、すれ違う奴等からボソボソボソ言われたよ。尻が気になるやら魅力的やら悩み聞いてやるから触らせろとかよ。逆じゃねえのか普通。いや、俺そんな事しねえけどよ。」

痛そうにタンコブをゆつくりと擦る明石を更に捲し立てる。

「俺もなあ、他の所みたいになあ!! 格好よくさっ!! 登場してさっ!! 敵をバツタンバツタンなぎ倒してさっ!! 活躍するもんだと思ってたんだよ!! だけどっ、コイツにはそこまでの文章力なんて無えんだよっ!!」

余りにも怒りが吹き出し、意味わからない事を言い出す山田。
「？」

山田の意味不明な発言に首を傾げる明石。

「ああ、すまん。こっちの話だ。とにかく俺の尻を触るな、見るな、近づくな。これ破ったら、もう一発食らわすからな。」

「はっ・・・。」

山田は左ポケットから何かを取り出し明石に渡す。

「なんかもう疲れちゃった。ほい。」

山田からソレを受け取った明石は目を丸くする。

「これ大本営からの手紙じゃないですか!？」

「うん、そうだね。ちよつとトイレ行つてから話すから・・・」

明石に背を向けトイレに向かおうとした時。

「まっ、待つてください!!これをどこでっ・・・」

グニツ!!

手紙について詳しく聞こうと掴んだ。尻を。

歴史は繰り返される。

ドゴオオオオオオオ!!

「・・・という訳でソレを渡されたんだよ。」

「そうなんですか。」

肌色の二段アイスを付けた明石がトイレから戻って来た山田から手紙を手に入れた経緯を説明されていた。

俺から手紙を受け取った明石は手紙の封筒を開け、中身を見たらしい。封筒の中には「日本海軍」と書いてある青のカードと紙が一枚入っていたそうだ。

「これは提督が読むべき物です・・・」

うつむきながら紙を渡してくる明石。

「大本営に入る為の書類とかいってたけど・・・」

紙を受け取り内容を見る。

—————親愛なる山田ちゃんへ

ハアイ☆山田ちゃんっ!!元気い?いきなり連れてきちゃってゴメンネツ(;;A、)

怪我してない?鎮守府の娘達に虐められてなあい?私心配で、心配で胸が張り裂けそう(涙)

早く貴方の顔を見たくてついついお手紙書きちゃった☆(、D、)テヘツ!

山田ちゃんは私の事知らないだろうけど・・・。私は山田ちゃんの事ならなんでもわかるんだからっ♪(／ω＼*)キャッツ!!

大淀ちゃんか明石ちゃんに大体は聞いたと思うけど、賢い山田ちゃんはそれだけじゃ、満足出来ないわよね?(*ノ口、*)σ
私が手取り足取り教えてア・ゲ・ル。(?!*?)

迎えを送るから山田ちゃんは護衛の娘を誰か一人連れて来てね?

まあ、山田ちゃんを狙うようなおバカさんはいないでしょうけど)。

—ω—)

大本営で待ってるからね?(、▽、)

—————日本海軍 大本営 大釜太刀夫

「明石。」

「なんでしよう。」

「俺、元の世界に帰りたいんだけど、駅ってどこだ?」

「ありません。」

「バスは?」

「ありません。」

.....。

「明石。」

「なんでしよう。」

「この大釜太刀夫っていう人は男性？女性？」

「男性です。」

「本当は？」

「女性……。」

「！」

「よりの男性です。」

……。

「明石。」

「なんでしよう。」

「俺、お前の胸揉むからボゴボゴにするか、半殺しにしてくれ。」

「嫌です。」

「そこをなんとか」

「嫌です。」

……。

「まあ、しゃあねえか。」

山田はあきらめた顔をしながら紙を明石に渡す。

「てつきり発狂するか、飛び降りでもするのかと思ってたんですが……強くなりましたね。提督。」

「ああ、ナノマシンとやらのお陰でな。いつまでも気絶してても変わらないし、この大釜って人は一番偉いんだろ？」

「そうです。この日本を守る最大権力者でもありますから。」

「そうか、言いたい事も聞きたいことも腐るほどあるんだ。行ってやろうじゃねえか!!人様を突然こんな所に連れてきやがって……顔を洗って待つてろや。大本営とやら。」

そこには、すぐ気絶して逃げていた青年ではなく、決意と怒りと殺意に燃えている青年がいた。

25、紳士とは

「といてもだ。」

初めて立ち向かう姿勢を見せたが、一つ重要な事が書いておらず山田のやる気は一気に冷めてしまった。

「迎えに行くってあるけど、何日の何時に来るのか書いてないんだもんなあ。」

「ですね。」

この際、文章内にあるおネエ系の言葉には目を瞑ろう。だが会ったことのない人間にこんな失礼な手紙を出すか？普通。あつちは俺を知ってるとか言ってるが俺はソイツに会ったことも名前を聞いた事も無いんだぞ？おまけに連れてきておいて、迎え出すからこつちに来い？逆だろが。本当にこの国を守る軍人さんなのかねえ。

矛盾だらけの手紙に少しイラついていると・・・

ぐう。

可愛い音がした。

「お腹減りましたあ〜。」

お腹を抑えた明石が力無く言った。

「ああ、すまん。どれ食堂行くか。」

空腹の明石に気づき、二人は食堂に向かった。

「なあ、ここの食堂ってさ。」

「はい。」

「営業時間とか決まってるの？」

「いいえ？ほぼ年中無休のハズですけど・・・なんでです？..」

「いや、席を取るだけであんなに急ぐって事は食う時間がないのかと思ってる。」

「ああ、アレですか……。」

明石はなるほどねと頬を掻いた。

「席を確保する事はとても重要ですからね。」

「重要？」

「ええ、私達艦娘は深海棲艦を倒すという共通の目的があります。人間で言えば仕事みたいなものですね。」

「仕事……」

「そう、いわゆる私達は仕事仲間なのです。最低限のコミュニケーションはとりますが、それだけです。全員が全員と仲がいいとはお世辞にも言えません。」

「ああ……何となくわかる気がする。」

「なので基本、業務以外は姉妹艦や同じ艦種の人と行動する事が多いのです。姉妹がたくさんいる艦は全員で食事を摂る場合、相当なスペースを確保しなければなりません。勿論、他の艦種の方とも仲良く食事を摂る人もいますが。」

「だからなるべく他の艦と相席にならないように早く食堂に着いて席を確保しなければならぬという事か。」

顔は知ってるが、話したことがない人と飯を食うより、姉妹とか大體同じ歳の奴と食う方がいいよな。ん？

「明石よ。」

「はい？」

「お前の歳って……」

ブオオオン!!

山田の左耳に何かか勢いよく通り過ぎていく風の音が聞こえた。

「提督。長生きしたいのなら歳の事は聞かない方がいいですよ?」

薄目で笑う明石が山田の顔の左側に拳を突き出していた。

「復唱!!」

「はいっ!!」

明石の恐ろしいプレッシャーに山田はただ従うしかなかった。

「我々艦娘はっ!!」

「我々艦娘はっ!!」

「歳という概念に囚われずっ!!」

「歳という概念に囚われずっ!!」

「永遠の美貌、可憐さを保つ!!」

「永遠の美貌、可憐さを保つ!!」

「美女、美少女の集団であるっ!!」

「美女、美少女の集団であるっ!!」

魁○塾のキャラクターの様に顔を変化させ、たくましく宣言をする明石に山田は誓った。

女性に歳を聞くのはもう止めようと。

そんな事をしているうちに食堂に着いた。最初、北上に抱えられながら来た為か、正面から食堂を見ることはなかった。吹き出しの形に整えられた木材に縦書きで「食堂」とだけ書かれた看板が入り口の端に置かれていて、潰れかけの定食屋みたいな寂しい印象を受けた。

「ほら、早く行きましょっ!!」

腕を掴まれ、食堂の中に入っていく。改めて思うけど君たち本当に力強いよね？

何回も出入りしたが、やはり人が多いな。結構広くて、テーブルも

椅子もたくさんあるけど、艦娘全員が同時に食事をするには少し無理があるだろうと感じる。トイレに行く為にすれ違ったあいつらは、時間をずらして飯を食いに来てたんだな。

「んー。どれにしようかな。」

明石が調理場の壁にあるメニューを見て悩んでいる。メニューは至るところに書いてあるみたいだ。

入り口のウォーターサーバーにチラホラと水を汲む為、艦娘が並んでいた。

「どうしたの?」

ふと後ろから声をかけられた。

振り返るとスクール水着を着た少女が立っていた。

「お水欲しいの?イクが取ってきてあげるの!!」

潜水艦、伊19は俺の反応を待たず、コップの中に水を汲んで持ってきてくれた。

「はいっ!!お水なの!!」

「あ、ありがとう。」

イクからコップを受け取りお礼を言う。ナノマシンのお陰か初対面でもあまり気にしなくなっている。そこにいるのが当たり前のように。感覚が少しずつおかしくなっている事に少し恐ろしくなる。

「……………」

「……………」

「どしたん?」

「飲まないの?」

先程から動かないなど思っていたら、俺が飲むところを見たかったのか?いや、違う。誉めてもらいたいのか。

「……………可愛いじゃねえか。」

「んっ、んっ、んっ、っああ!!生き返った!!マジで旨いわ!!ありがとうよ。」

俺はイクの頭をガシガシと撫でた。

「えへへ、もつと撫でて欲しいのね!!」

頭を撫でられたイクは嬉しそうに跳び跳ねている。

撫で撫で・・・ボヨン!!ボヨン!!

そんなに嬉しいか。いいな、こういうの。俺ももし親父になって娘が出来たらこんな感じなのかな。

撫で撫で・・・ボヨン!!ボヨン!!

でもまあ、童〇〇年齢の俺が嫁が出来て、子供作るなんて天文学的にも無理な話か・・・。

撫で撫で・・・ボヨン!!ボヨン!!

「oh.....」

その時、山田は衝撃を受けた!!

目の前に広がるその二つの球体に目を奪われてしまったのだ!!

左の球体は左回転。

右の球体は右回転。

布を一枚羽織っているせいか、明確ではないが恐らく内部ではそうなっているのだろうと予測は出来た。

山田もアニメや漫画でしか見たことない程の重量圧力にはビビった!! (ジ〇ジ〇風)

「wonderful.....」

明石もイクに気づいた。

「ああ、イクさん・・・っ!!イクさん!!肩に蜘蛛がつ!!」

明石がイクの肩を見て驚きながら叫んだ。

「ええ!!どこっ?どこっ?取ってっ!!早く取って!!」

自分の肩に蜘蛛がいると指摘され、振り落とす為、イクは横に体を振った。

ブルン、ブルン!!

「excellent……」

なんとその球体は違う動きを示したのだ!!

縦の動きとはまた違う、その球体は遠心力の力を利用して更にその威力を高めた。!!

「なんて奴だっ!!」あまりの威力に山田は怯えた。

この場面にずっといたい。永遠に眺めていたいと思った。

しかし、彼はっ!! (ジ〇ジ〇風)

「ほれ、取ったぞ。」

「あ、ありがとうなのね!!助かったのね!!」

イクの肩の蜘蛛を取って床に落とした。

ホツとした顔をするイクに暖かな視線を送り、微笑む(変態)紳士がそこにいた。

「さっきお水をくれたお礼さ……」

「提督う!!」

イクに抱き付かれても表情を変えない。まさに(変態)紳士そのものだった。

それからイクと別れ、また明石と二人になった。

「提督……なに食べるか決まりました?」

明石からの質問にしんし、いやっ!……変態は答えた……

「紅しようがを乗せたチャーハン……二人前だっ!!」

性欲を食欲に変え、戦え山田っ!!頑張れ山田っ!!くたばれ山田っ!!俺達の戦いはこれからだっ!!

26、タミヤ

「あのお・・・」

山田の基地外的テンション声が食堂に響いた後、少し間を置いて調理場から申し訳なさそうな声が聞こえてきた。

「大変申し訳ないのですが、できれば上のメニューから選んでくれませんか?・・・」

大きな赤いリボンを付けた、割烹着姿の女の人のがのれんをくぐり、調理場とカウンターの間に立っていた。

「あつ、ああ!!す、すいませんっ!!」

おかしなテンションになってチャーハンなんて言ったけどメニューになかったんだな。すごい申し訳なさそうにこつちを見ている。いや、俺が悪いんだ。そんな顔しないでくれ!

「チャーハンは無しっ!!無しでっ!!」

咄嗟に右腕をブンブンと横に振り、山田は頭を下げた。

「いえ、こちらも提督のご希望を出来るだけ叶えて差し上げたいのですが・・・私と妖精さん達では手が回らないのです・・・」

その人は後ろの調理場をチラリと見た。山田もつられて見てみると調理場内には大量の妖精さんが調理をしていた。トイレを造つてくれた妖精さんかまた違う妖精かわからないが、学校の給食当番が着ているような白い服に頭巾、マスクをしている。

「伊良湖ちゃんも妖精さんも頑張ってくれているのですが、皆さんの食事量とスピードが速くて・・・」

カツカツカツカツ!!

「ん?」

カウンターの女性の話を真面目に聞いていた時、聞いたことあるような無いような音が山田の耳に響いた。ふと後ろを振り返ると先ほどにはなかった恐ろしい程のオーラを纏う二つのテーブルがあった。いや、テーブルと言うより座っている人間から発せられていた。

「美味しいっ!!美味しいですうっ!!」

「赤城さん、落ち着いて・・・そんなに急がなくても食料は逃げはしな

いわ。」

「瑞鶴、そんな張り合わなくても・・・」

「翔鶴姉っ!!これは私達に対する挑発なの!!一航戦なんかには負けてられないっ!!」

カツカツカツカツカツカツカツ!!

金の延べ棒のようなものをかじり、ご飯をかきこんでいる。

「こんなモノでは腹は膨れぬ。おひつごと持ってきてくれ!!」

「無理ですよ!!もう少しゆっくり食べてくださいよお!!」

「ふむ、やはり些か物足りないな。」

「長門、少し食べ過ぎじゃない?おデブになっちゃうわよ?」

「酒だあああつ!!ヒヤツハー!!」

「私の天ぷら、とても小さい・・・ふっ。」

「そんな顔しないでお姉様。ほら、私のあげるわ。」

「瑞雲の天ぷら・・・ありだな。」

「ああ、やっぱり物足りないなあ。日向、また並ぼう。今度はカレー頼もう、カレー。」

体が普通のサイズより、やや大きいまたはとても大きいであろう艦娘達がそれぞれ山盛りの料理を食べながら駄弁っていた。ただ飯を食っている絵なのになんて威圧感だ。イ○ル○ヨ○がド○ジャ○ラスを補食する位の見ごたえがある。店員らしい子が半泣きじゃないか。可哀想に。

「なのでメニューの種類を少なくさせてもらって、食事の量を増やして対処させてもらっているのです。」

「なら他に誰かに手伝って貰えばいいんじゃないですか?」

ここには腐るほど人がいるんだから、誰かしら手伝ってくれるんじゃないか?妖精さんだけじゃキツイだろ。小さいし、ほら包丁を使ってキャベツを切ろうとしてる。危ない、危ない、危ない。これは大変だろう。

「はい。お手伝いを申し出てくれた方はいたのですが・・・」

「が？」

「戦闘に集中して欲しいと思い、断ってしまいました。私、戦闘は出来ませんので。」

「そうなんですか。」

でもほぼ敵は壊滅したって言うし、こんなに数がいれば多少何かあっても対処出来るような気がするが。んんー。どうなんだろう。

最初にソバを食べていた時は全体的にほのぼのとしていたが、今はとてもそんな空気じゃない事は確かだ。俺の食べたソバのどんぶりより遥かに大きいどんぶりを盃の様に持ち、飲み込んでいる奴、全然足りないよ、こちらをチラチラみて次何を頼むか考えていそうな奴。っ!!後ろに並んできた。目が何だか怖いわ。

「と言うわけでして申し訳ないのですが、上のメニューから選んで頂いてよろしいですか？」

俺の後ろに並んできた二人を気にしてか俺にメニューを決めてくれと言わんばかりに切羽詰まったような顔で催促してきた。ちなみに明石はもういない。俺と彼女が話しているうちに妖精さんにカレー注文して、さつきとテーブルに向かっていった。金も何も払わなかったので多分無料なのだろう。

さつきから同じ顔二つが俺の顔をじーっと睨んでるし、とつとと決めるか。

「天ぷらそば!!」

さつきと同じだがコレでいい。天ぷら食えなかったし。

「はいっ!!」

俺の注文を聞いた途端、素早く調理場に戻っていった。そして「お待ちどう様です。」

トッ!!

おぼんに天ぷらそばを乗せて持ってきた。すげえ10秒もかかってねえ。それだけ急いでるって事か長話して申し訳ないな。俺はお礼を言っさつきと席に着こうとした。

「ありがとう、っ!.....それじゃ!!」

ガッ!!

「待つてください。」

俺は肩を捕まれた。

「まさかとは思いますが提督。私の名前・・・知ってますよね？」

「・・・とっ当然ですよ？知ってるに決まっていますよ。やだなあ。」

頭に手を当て、あははと笑う山田。

「ですよねえ？私名前忘れられちゃったのかと思いましたよ。」

フフと笑う女性。

「あははははははははは!!」

「で?」

「フアツ?」

「私の名前は?」

「・・・。。。」

ヤベエ!!真面目に誰だかわからねえ!!いや、艦これには居たよ?居たけど名前が思いだせねえ!!誰だっけ?疲労時にアイスくれる人!!ふぁーって治る奴!!えーつと。

ヒントがないか辺りを見渡す山田。すると山田の後ろで並んでいた同じ顔の一人がなにやら口を動かしている。

「!」

それを見た山田は一瞬で閃いた。この人はこの人の名前を教えてくださいようとしていると。

(ちなみに山田はこの日向の名前も覚えていない。ナノマシンのせいなのか、それともただの認知なのかわからんが。)

「?、?、?」

「ん?三文字。」

「?、?、?」

「あ、い、う?」

「?、?、?」

「・・・!」

わかった。ありがとよ。・・・(^^) d

(^^) d

山田と日向はお互いにサムズアップをした。

「恥ずかしくて言えませんでしたが、わかりましたよ。仕方のない人ですね？」

覚えてなかった事を悟らせないため山田は余裕の表情で笑う。

「もうっ！意地悪は止めてくださいな。本当は覚えてたくせにっ！名前覚えられていなかったら私、立ち直れませんでしたよ？」

山田の笑みを見て今までののは全て提督のおふざけだったとわかった彼女は胸を撫で下ろす。

「・・・・・・・・タミヤさん。」

「間宮ですうううううっ!!」

間宮さんはその場で泣き崩れた。

27、コック山田

ゴシゴシゴシ、ガシヤ。

ゴシゴシゴシ、ガシヤ。

ゴシゴシゴシ、ガシヤ。

「スイマセ〜ン、コツチテツダツテクダサーイ。」

「はい、喜んで〜!!」

ジャー、ジャー、ジャー。ゴトツ。

「キレナイー!!」

「はい、喜んで〜!!」

ザクツ、ザクツ、ザクツ、トントン。

ザクツ、ザクツ、ザクツ、トン。

「ワア、コボシチャツタ!!ドウシヨウ・・」

「はい、喜んで〜!!」

フキフキフキフキ。ジャー、ギユウウウ!!

フキフキフキフキ。

「コツチ、コツチ!!ゴゲチャウヨ!!」

「はい、喜んで〜!!」

ジュー、カチツ。カチャカチャ、ボトツ!!

「オムレツ出来ました。トツピングオナシヤス!!」

「アイヨオ。」

小さな体で器用にケチャップをかけていく。それに合わせて山田は皿にパセリを乗せた。

「ナカナカヤリマスナア、テイトクドノ。マミヤドノヨリ、イクラカウゴキガイイ。」

「アリアトアス!!」

俺は今、食堂の調理場でコックコートを着ながら働いている。何故

こんな事になっているかというのと、だいたい一時間前くらい遡る。

—————。

「わあああああんっ!!酷いつ、酷いつ!!私こんなに一生懸命頑張っているのにつ!名前すら覚えていてくれてないなんて、あんまりですうううう!!」

俺が自信満々に彼女の名前を答えた瞬間、「間宮ですう!!」と座り込んでしまった。顔は覚えていたんだ。なのにド忘れしてしまってタミヤなんて言ってしまった。いろんな人と取っ替え引っ替え会って、頭のキャパシティが越えてしまったのだろう。

この絵ヅラはキツイ……。だって大人の男が大人の女を泣かせたんだぜ?彼女は女の子座りをしながら手で顔を隠し、わんわんわんわん泣いている。完全に俺が悪者だよ。彼女の様子に気づいたのか、調理場からぞくぞくと妖精さんが間宮さんの周りに集まってきた。

「ドウシタノ?マミヤサン、オナカイタイノ?」

「ナイテチャワカラナイヨオ。」

「ヨシヨシ。」

「ネエ、ナカナイデ。」

「オレミタゼ?」

「ナニヲ?」

妖精の一人が山田を指差した。

「テイトクガ、マミヤサンノナマエヲ、ワザトマチガエテイジメテタンダッ!!」

「!!!」

間宮の周りにいた妖精が一斉に山田を見た。

「いやっ、イジメたわけじゃ……」

山田が弁解をしようとすると同答無用と妖精達が山田に集まってきた。

「マミヤサンライジメルナンテ、ユルサナイ!!」

「ジゴクニオチロ!!」

「エイツ!! エイツ!!」

「オトコノカザカミニモオケネエ!!」

「バルスツ!! バルスツ!! バルスツ!! バルスツ!!」

「いだだだだだだっ、ごめっ、いだいつ、ごめんなさい!!」

妖精達は山田によじ登り攻撃を始めた。頬をつねったり、頭を叩いたり、爪楊枝で足を刺したり、何かに取りつかれた様に尻を集中的に攻略し始める妖精もいた。

(このままでは俺の尻が陥落するっ!!)

尻の危機を感じた山田は尻の妖精を引き剥がそうとした、その時。

「ヤメネエカ!! オマエラ!!」

ピシヤリと調理場の中から一人、妖精が出てきた。

「マツタク、セツカクツクツタリヨウリガ、サメチマウジャネエカ：」

黒っぽいエプロンに、漁師のようなハチマキを頭にした格好の妖精が山田と妖精達を見つめていた。

「デスガオヤブン・・・」

「コイツハ、ソンナゲスジャナイ。ソウダロ? アンチャン?」

「そっ、そうです。いじめなんてとんでもないっ!!」

「ダ、ソウダ。オラツ、ハヤクモドレ。」

すると山田の体から妖精達が離れ、調理場に戻っていった。

「ヤレヤレ、アトハ・・・」

そう言うとその妖精は間宮に近づき、泣いている彼女の肩に乗って

「・・・・・・・・・・」

「ひっく、ひっく。」

「・・・・・・・・・・」

「え?」

「・・・・・・・・・・」

「そ、そんな事・・・」

「……………」

「……………」

間宮さんはジッと俺の顔を見ている？睨んでいる？気まずい。俺は咄嗟に下を向いた。

「……………」

「……………!!」

すると間宮は顔を赤くして、頬に手を当て上目遣いでチラチラと山田を見ている。

「うん？」

「……………」

「……………わかりました。」

すると彼女は立ち上がり、カウンターを出てそのまま食堂から出て行ってしまった。すれ違う時、口を手で押さえてコツチを見ていたが、妖精さんは何を言っただらうか。

「ホラ、アンチャン。ナニシテンダ？ハヤクコイ。」

「えっ？」

突然の妖精さんの言葉に一瞬驚いた。

「ゴカイフトイテヤツタンダ。メシヲツクルノテツダツテクレ。」

「手伝う？俺が？」

何が何やらわからんが、この妖精さんが状況を変えてくれた事はわかる。手伝うのは構わないけど、この妖精さんどこかで……………」

「ダイジョウブダ、オレラデモデキルンダ。オマエニモデキル。」

「誤解を解いてくれたのは礼を言いますが、どっかで会いました？」

「……………オイオイ。キョウアツタバカリダロウ。」

その妖精は頭のはちまきを取り、にかッと笑う。

「……………あっ！隊長じゃないか。」

山田は思い出した。自分のためにトイレを造ってくれた妖精達の事を。ヘルメットを被った、つなぎ姿の妖精の事を。

「ダイチヨウ・・・？マア、スキナヨウニヨンデクレ。イイカラハヤクテツダツテクレ。オオグライドモガ、コツチミテル。」

ふと後ろを見るとズラツと大型の艦娘が並んでいる。

〈(●)(●)〉

駄目だ、目に光がない。どんだけ飯食いたいんだよ。

俺はそそくさと調理場に入った。

コックコートに着替えた俺は、最初に皿洗いを命じられた。その間にいろんな場所からヘルプが続出し、その対応に追われている。間宮さんはこれをずっとやっていたらしい。大したものだ。

隊長から聞いた話によると、「俺たちは建物の建造が主な仕事だが、それだけじゃ暇なんだ。だから昼食時には調理場を手伝っている」らしい。というか報酬が目的なのだとか、運がいいとアイスが貰えるとの事。可愛いなもう。

「ウチ、カレー。」

「私はオムレツを。」

外から注文が聞こえてくる。

メニューは4つ。カレー、天ぷらそば、オムレツ、そしてボーキ丼。・・・ん？ああ、何だソレ？って？俺も知らん。簡単に言うと山盛りのご飯に金の延べ棒(ボーキサイト)を三本乗せたシンプルなものだ。主に空母が食べるらしい。ほぼご飯が主役のものが多いため比較的楽だ。

「ヨオ、ガンバツテンナ。」

隊長が話しかけてきた。

「ええ、まあ。」

「ケンソンスルナ。イツモヨリハヤクサバケテイル。サスガダ。」

「いやあ。」

誉められて少し照れるが、俺には気になることがあった。

「そうだ、隊長。」

「ナンダ？」

「間宮さんに何言ったんですか？泣き止んでくれたけど、どっか行っちゃって・・・」

「・・・アア、オマエハイイオンナンダカラナクナ。カオアラツテコイツテイツタ。」

「格好いいなあ!!隊長!!キザだね?」

隊長の男気に感動した山田は肘で隊長をつつく。

「ハハッ。」

隊長は腕を組んで空を見上げた。

パシヤ!!パシヤ!!

「今度はコッククさんですか・・・提督は話題に事欠かないですねえ。そろそろ直撃インタビューでもかましますかっ!!」

28、哀れな戦士

ジャー、ガチャン。

「ふう。ああー、腰痛い。」

ある程度、艦娘達の食事のペースが落ち着いて俺は今皿洗いをしている。隊長に聞いたがこの食堂は何回、何十回食べてもタダなんだとき。太っ腹だね。まあ、その代わりその日、その日で四種類のメニューしかないっていうのは少し味気ない気がするが。ちなみに明日は親子丼、麻婆豆腐、きつねうどん、冷やしボーキだつて。前三つはうまそうだが何だよ、冷やしボーキつて。何味なんだよ。

「提督……。」

「あ、ああ、はい。」

間宮さんが戻ってきた。あれ？少し顔がさつきとは違うう……。

「ありがとう御座います、手伝わせてしまつて。」

「いいえ、とんでもない。こちらこそ名前を忘れてしまつてすみませんでした。」

深く頭を下げ、謝つた。隊長がうまく説得して事なきを得たが、はじめだ。俺が悪いのには変わりないのだから。

「顔をあげてくださいいな、私もう大丈夫ですから。」

「本当、ですか？」

恐る恐る顔を上げる。彼女は前に手を組んで、やんわりと笑顔を作っていた。まつ毛は長く、目はパツチリ、頬にはほんのり赤みがかかつて、口紅までしていた。さつきまでの顔も美人だつのに、化粧をしてより完璧な美人になっている。

ドツドツドツドツドツ!!

心臓の音が速くなっていく。これは……やばい。

間宮さんは髪をかきあげ、俺を見て言った。

「……チャーハン。」

「えっ。」

「チャーハンが食べたい、でしたよね？」

「は、はい。」

「お手伝いしてくれたお礼です。美味しいの作りますから空いている席に座って待っていてください。」

すると彼女は鼻歌を歌いながら、ルンルンと冷蔵庫に食材を取りに行った。彼女の突然の変化に妖精達も啞然としている。俺と会話していた時の疲れた顔ではなく、まるで恋を知った少女のような初々しい顔をしているものだからそれは驚くだろうな。俺も驚いたよ、化粧ってスゲエなって。

「隊長。」

「ア？」

「本当に何言ったんですか？顔を洗ってこいって言ったんスよね？逆に綺麗になってるじゃないスか。半端なく。」

「・・ウズイチマツタンダロウ、オンナノサガガ。」

「えっ？何？何て言ったんスか？」

「ナンデモイイダロ、ホラココハモウイイカラ。ミズデモクンデ、セキニスワツテコイ。」

シツ、シツと手を払い隊長は俺を調理場から追い出した。

腑に落ちないが、言われた通り、入り口のウォーターサーバーで水を汲み、空いている席を探す。

「も、もう食べれない。これ以上は・・出ちやう。」

「大丈夫？瑞鶴？お腹擦ってあげるわね。」

「・・っ!!翔鶴姉っ！大丈夫!!大丈夫!!だからお願いっ!!止めっ・・ぶおえええええええっ!!」

「きやああああああつ!!瑞鶴ううううっ!!」

「ハハッ。情けないですねえ、瑞鶴さん。私達はまだまだ食べられますよお？ねえ？加、おろろろろろろろろろろ!!」

「赤城さん、汚いわ。」

「筑摩、人參食べるか？」

「要りません。」

「最近どうよ？あきつ。」
「ぼちぼちでありますなあ。」

こうして見るといろんなのがいるな。あつちなんて食いながらゲロってる。ただの酔っぱらいじゃねえか、色気もへったくれもねえや。うおっ!!こっちは取っ組み合いしてらあ。いやだなあ、関わりたくねえなあ。やっぱ辞退させてもらおうかな。提督なんて、無理ゲーな気がしてきたぞ。

「無理ゲーなんかじゃないですよ？司令官。」
「ふあ？」

何処からか声をかけられる。俺喋ってないよな？軽くホラーなんだけど。いやだ、もういやだ。心まで読めるってもうそれあきまへんやん。帰りまひよ。お家に帰りまひよ。

「帰るだなんて寂しい事、言わないでください。大丈夫です。プライバシーは守りますので。さあ、席に・・・おおっと!!」

山田はこの場を離れるため、声を無視して帰ろうとした。が、その声の主は山田の腹を後ろから摘まみ、動きを封じた。

なにコイツ、サイ●マン●イスか？俺の行動をリーディングでもしたっていいのか!?

(サイなんたらはわかりませんが、司令官の行動原理は把握済みですので、これくらいは朝飯前です。)

えっ？そうなの？

(はい、余裕です。)

・・・え？会話してるのコレ？

(ええ、しますよ？すごいでしょ？相手に直で会話出来る、これが私の能力つ!!)

ビシッと何かのポーズを取った。

・・・。

(抵抗は無駄です。大人しくソコの席に座ってください。)

銃を突きつけられているような冷たい感覚がした。初めてのタイ

ブだ、行動、思考が相手に筒抜けなんて。こんな・・・
「あつ、そういうのいいんで。はよ座ってください。」
「なんて日だ・・・。」

山田は諦めて近くの席に座った。

「それでは改めまして・・・青葉です。以後お見知りおきを、」
「・・・はあ。」

山田は大きくため息をついて、目の前の人物を見た。

「どうしました？ため息なんか・・・ああつ！」

ポンつと左の手のひらにグーの形を作った右手を乗せ、なるほどといった顔をした。

「私が美人すぎて「それはない。」声が・・・。」

「やはりそう言うと思っていましたよ。司令官。で？」
「？」

「本音は？」

「残念美人。」

「んっ!!またまたあく。照れちやつてまあ。」

ヤレヤレと顔を振り、何かを置いた。

「コレは？」

「相手の心を読む装置、ヨムヨム君です。明石さんに三日間土下座をして作って貰いました。」

ドゴオ!!

ヨムヨム君の事を聞いた途端、山田は拳に魂を込めてヨムヨム君に会心の一撃を繰り出した。しかし。

「甘い、甘い。甘過ぎですよ？司令官どのお？」

どや顔をした青葉が山田の拳より速くヨムヨム君を引っ込めた。腕に顔を乗せ、いやらしく山田に視線を送る。

「っ！」

その顔を見て山田は青筋を立てる。

「待ってください、私は何も喧嘩したくてあなたと話してるんじゃない。あなたと仲良くなりたいたいですよ。」

「ならソレを超越せ。」

「壊さないと約束してくれますか？」

「うん、うん、うん、うん。」

「本当に？」

「うん!!うん!!うん!!うん!!」

「本当の本当に？」

「ぶっ壊してやるから早く渡せっていつてんだろうがっ!!」

「うわあ、最後の最後で本音が出ましたよ。この人。」

今までのストレスに青葉の煽りが掛け合わされ、山田の精神がピークになって来た。先程の頷きも、セツ●の如くヘッドバンキングをキめていた。

「まあ、司令官には感謝しているんですよ？」

「え？」

突然の手のひら返しに虚をつかれた山田。

「あなたが来てから、明らかに彼女達の態度が丸くなりました。この間までお互いを牽制し合う女性特有のギスギスした空気が流れていたのに朝礼であなたの姿を見た途端、一変して穏やかな空気になったのですからうれしい限りなんです。」

青葉は自分のコップの水をチビりと飲んだ。

「お陰で顧客も増え「お待たせしました。」

青葉の声を遮り、美味しそうな匂いと共に声が響く。

コトツ、コトツ。

皿を二枚、山田の前に置き、蔓延の笑みの間宮が御盆で口元を隠して山田を見ていた。

「丹精込めて作りました・・・」

「あつ、ありがとう御座います。いやあ、美味しそうですね。」

山盛りのチャーハンが二つ並んでいた。山の頂上に尋常ではない量の紅しょうがを乗せて。

「残さず食べてくださいいね？あな・・・っ!!」

途中何かを言いかけてビュンと調理場に戻っていった。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・手が早いですね。」

「違うわい。」

「いただきます。」

チャーハンの姿を見た途端に腹が鳴り、すかさずスプーンを取った。細切れにされた肉がジュワツと口の中で旨味を広げ、それをシヤキシヤキの歯応えがするネギによって更に味が整えられていく。卵も目立ち、目立たず主張してきて非常にいいバランスだ。シンプル・イズ・ベストこれが一番だよな。

「・・・・・・・・じゆる。」

山田が旨そうに食べる姿をみて青葉がヨダレを垂らす。

「おっ、美味しそうですね・・・」

がっがっ、むしゃむしゃ、ごくくん。

「その量、二つも食べられますかねえ?」

がっ、がっ、がっ、むしゃむしゃ、ゴクゴクコク。

グウウウウウ!!

「うう・・・」

お腹を抑えながらひもじそうにチャーハンを見る青葉。

「食べるか?」

「いいんですかっ!?!」

山田の鶴の一言に目を輝かせ、身を乗り出す。もし彼女に尻尾があつたら、ぐるんぐるんと振り回しているだろう。

「ヨムヨム君を差し出せばな。」

スプーンを置き、青葉に手を出した。寄越せ、寄越せ、ぶつ壊してやるから寄越せ、と。

「嫌です。」

先程の表情から一転、彼女の目から光が消えた。なにいつてんだコイツは？とそんな顔をした。

「あ、そう。」

山田はさつきとは段違いな速さでチャーハンを口に掻き込んだ。ちやんと噛んでいるのか？

「あつ、ああ、私のチャーハン・・・」

左手を出し、ワナワナと震えている青葉。すると突然、下を向いて笑い出した。壊れたように乾いた笑い声で。そんな事を気にせず山田は二皿目の皿に手をかけた。その時。

ダアンツ!!

「わかりましたよ、私も脅しなんてしたくはなかったんですけどねえ・・・」

ニタアと顔を歪め勝利者の顔をしている彼女に戦慄を覚える山田。脅し？たかだかチャーハンをくれないからって脅し？コイツの頭どうなってるの？食いしん坊にも程があるだろコレえ!!こういう目をした奴には大概口クな奴はいない。間違いない、コイツ。俺を・・・

殺す気だ。

テーブルに叩きつけられた青葉の手下には何かあった。写真？

「司令官、この世界に来て初めて会ったら人は誰ですか？」

そんな事を聞かれ俺は流されるまま答えた。

「最初？ええつと．．．ああ、五月雨だっ!!」

ここに連れてこられて、わけもわからない俺に優しくしてくれた優しい子。綺麗な青い髪、クリクリとした目にぷつくりとしたほっぺ。ああ、すっかり忘れていた。ええ子やったなあ。俺の為にあんなたくさんさんのハンカチまで．．．。

「彼女はハンカチを持ってきてくれましたよねえ？ハンカチを．．．
こいつ。」

「艦娘全員からハンカチを借りてきて、箱を一杯にしてあなたに持ってきてましたね？ええ、ええ、一生懸命頑張りましたよ？彼女は。」

まさか

「あなたはその中の一つを取り、気絶をした．．．何故か。」

そんな事．．

「その秘密はっ!!コレだっ!!」

青葉は勢いよくテーブルから手を話した。

そこには写真があった。写っているのは三人。五月雨、明石、そして右手にピンクの柄のパンツを持っている山田が写っていた。

「ううわっ、ううわっ、ううわっ、ううわっ!!」(エコー)

山田は突然心臓を抑え倒れこんだ。

バタツ!!

デーンッデーンッデレレッ!デーンッデーンッデン!!

E
R

G
A
M
E

O
V

29、 駆け抜ける嵐

「はあ、本当に好きですねえ、気絶するの。」

メタ○ギ○のゲームオーバー時のリアクションを大袈裟にとった山田はテーブルとテーブルの間に倒れ込む。何事だ？と心配する艦娘もいたが、ほとんどはそんな事を気にせず黙々と食事を摂っていた。

青葉は倒れた山田を少し眺め、何か閃いたのか顔をニヤつかせ、テーブルの写真を手に取り高らかに掲げ言った。

「皆つさあああああんっ!!提督のすっ……ごく格好いい写真っ!!見たくありません……」

「だあああああああああつ!!」

己を社会的抹殺をしようとする悪意に反応し、意識の深淵からクロールで現実に戻ってきた山田がビーチフラッグのスタートのような勢いで立ち上がり、青葉の口を塞いだ。

「ひへふはいへいはふひはひはへ。ふうへふほ。はんへもはんへほひへふへふあいへふへひふはんへほほはひほへふ。」

訳：

(気絶耐性がつきましたね、そうです。なんでもかんでも気絶で解決出来るなんて思わない事です。)

「何いってんのか、わからんがお前が今までの奴とは違うと言うことはわかった。」

青葉の口を押さえながら、山田は息を荒げる。そして周りを軽く見渡しながら申し訳なさそうに言った。

「ごめんなさい!!そのまま食事を続けてくださいっ!!申し訳御座いませんでした!!」

深く頭を下げ、場の沈静化に全力を注いだ。その熱意に押されたの

か大体の艦娘は食事に戻った。中にはまだ山田を興味深そうに見ていたり、写真を見てみたいと思つた艦娘がソワソワしたりしているが、山田には最早見えていない。目が笑っていないコイツに何故その場面の写真があるのか。を問いただしたかったからだ。

「よし、残りのチャーハンやるから一先ず座ろうや。」

それを聞いた青葉は目を薄め、首を縦に振る。口から手を離し、お互い席に座り直した。

「では・・・」

山田の前にある残りのチャーハンに目配せした青葉は視線を山田に戻し、手のひらを差し出した。そのチャーハン寄越せという事だろう。山田は諦めたようにため息をつき、器を青葉に渡した。空の器を。

「皆つさああああん!!司令つてば私達の誰かのパンツでほにやららをおおお・・・」

「ああああああおば様ああああ!!こちらのチャーハンを御受け取りくださいませええええ!!」

青葉の倍の声を腹から出し、テーブルに頭をつき、チャーハンが乗っている器を前に出した。

「はあああ、なかなか美味しかったですねえ。シンプルなものほど美味しいんですよ。ねえ?司令官。」

「そーですね。」

一連のやり取りから数十分後、チャーハンをたいらげた青葉が水を飲んで一息ついていた。対する山田は青葉が食べ終わるまでテーブルの上の写真を食べ入るように見て、色々考察していた。

斜め上辺りから撮られているこの写真は空中で撮つたには違いな

い。あの時は何もかもわからず、時間に流されるだけだったからな。でも何かが飛んでいる音も気配もなかったハズなのになんで写真なんか。考えている山田を見て青葉が話始めた。

「その写真を撮ったのは、この鎮守府の周りを監視している完全自律思考型のロボットが撮ったものなんです。」

「完全自律思考のロボ?」

「そうです。どこの鎮守府にあるもので、地下、地上、空中、水中と何処にでも稼働出来るとても万能な監視ロボットなんですよ。」

水陸両用でなおかつ空中もいける監視ロボだつて? たまげたな。確かに俺の世界でも無人で動く人工AIはニユースで見たことあるけど完全自律だろ? 人の制御が要らないロボットが勝手に動いてる、すごいと思う反面、怖いとも感じる。もしそのロボットに武装が備えられていて、俺を敵と判断したら・・・

「しかも特殊なメガネを掛けないと姿すら見えないステルス機能付きです。」

「見えない?じゃあお前らにも見えないの?」

「そうです、監視ロボットは主に大本営で生産され、それぞれの鎮守府に納品されます。深海棲艦になるべく察知されない為に私達の身体能力をベースにして造られたと聞いています。人間から見れば私達も深海棲艦も変わらないという事でしようね。」

水を飲みきったコップの中の氷をカランと鳴らしながら説明を続ける青葉。

「ふーん、そういう事ね。なるへそっ。」

後半、少し顔が暗くなった青葉に気を使い山田は少しおちやらけて相づちを打った。

「それで青葉様。」

「青葉でいいですよ。」

「その写真はさあ、どうやって現像・印刷したの?」

「ああ、この鎮守府に小さい管制室があるのでそこでちよちよいと。」

青葉は人差し指を空中でクルクルと回した。

「そう、それでさ。その写真の事なんだけど・・・」

山田は青葉の誤解を解こうとした、違うんだ。俺はパンツを持ってこいといった訳ではないんだ。あれは五月雨の頑張りがちよっぴり空回りしてしまっただけなんだ。と

「わかってますよ、ハンカチが欲しかったんですよね？五月雨ちゃんから直接、ハンカチが欲しいと頼まれましたし、第一あなたにそんな度胸は無いつて事くらいわかってましたので。」

「へ、へえ。それはそれは。」

後半軽くディスプレイされた山田は少し顔をヒクつかせたが、青葉が本当の事を知っていると分かり、山田は少し安心した。

「それでですねえ・・・よつと。」

腰のポケットから何かを取り出し、山田の前に置いた。

「スマホ？」

それはまさしくスマホそのものだった。画面には写真と同じ絵が写っていて真ん中に再生ボタンがあった。動画のようだ。

「じゃあ再生しますねえ。音は無いのであしからず。」

青葉はスマホの再生ボタンを押した。

あつ、パンツを持った俺が倒れた。ドラマみたいな倒れ方だ。第三者の目線で見るとなかなか恥ずかしい。五月雨がアワアワしている可愛いなあ、食べちゃいたいわあ。おお、明石がつかいランチを取り出したぞ。なんでそこからでるのか今でも不思議だが。まさかそれで寝ている俺を殺すつもりじゃあ・・・さ、五月雨が必死に止めてくれる。ああ、心がこんなにも暖かい。

山田の顔が自然と綻んだ。

・・・俺を運ぼうとしている、明石は両腕、五月雨は足を持って・・・まるで豚の丸焼きみたいな感じで滑稽に見える。あつ！明石の奴、手を離しやがった。この時か、たん瘤が出来たのは。

おっ、五月雨が・あぁ、ハンカチの箱を忘れたと。違う俺が落としたパンツを拾った。そうだよな。一応パンツだし、そこら辺に落としたままだなんて可哀想だよな。そのパンツを箱の中に、中に……明石っ!! てめえ!! なんて邪魔すんだよ。五月雨からパンツを取り上げて……

明石は五月雨からパンツを奪うと山田に近づき、なにやらモゾモゾしだした。そして何事もなく山田の腕を持ち、モジモジしている五月雨に足を持つように指示を出していた映像はそこで終わった。

「……………」

山田は恐る恐る右のズボンのポケットに手を入れた。

「……………」

左のズボンのポケット。

「……………」

立ち上がり、右側の尻のポケットに手を入れる。

「……………」

そして最後に左側のポケットに手を入れた。

「……………」

青葉はスマホを戻し、テーブルに肘を付け、両手を組んで頭を乗せ

た。

「今、五月雨さんはあの大量のハンカチを返しに艦娘の部屋を巡回している筈です。艦娘は人間より基本能力が優れている為、記憶力はあります。あなたが持っているソレが誰のであるかも把握しているかも知れません……」

山田の額に一筋の汗が流れる。

「貸し一つ……ですからね？」

蠱惑的に青葉は人差し指を唇に当てて言った。

グツ!!

物凄く血管が浮き出た手で青葉にサムズアップした。

「ぐっ!!」

青葉も口に出しながら山田にサムズアップを返した。

早歩きで食堂の入り口に着いた途端、山田は一気に加速し、階段を駆け上がる。

「五月雨えええええ!!何処だああああ!!」

食堂からそれはそれは大きく、とても悲しげな声が響いたそうなの。

30、side 五月雨

「すみません、ハンカチを返しに来ました。」

「ハンカチ？ ああ、ハイハイ。ありがとね。」

私、五月雨は艦娘の皆さんのお部屋を巡って、ハンカチを返して回っている。何故それを今やっているのかというと、前に提督が私にハンカチを持って来てくれと頼まれてから今の今まで返すのを忘れてしまっていたからだ。提督を運ぶ姿を見た姉妹や他の駆逐艦の子達に囲まれ、質問攻めに遭った。

一人、一人に細かく説明していくうちに、どんどん時間が経ち、そのままハンカチの事を忘れてしまった。自分自身が少し嫌になる。忘れっぽいというか、やることが空回っているような気がして。提督からのお願ひにも何も考えず、ただハンカチが必要なのだとその事だけが、頭に響いて、結果的にこんなにも沢山のハンカチを持ってしまった。少し考えればハンカチなんて一、二枚あれば十分なのに。

でも提督はそんな事を気にしないで、ハンカチを受け取ってくれた。怒りもせず、笑いながら私を誉めてくれた。その日の夜は、提督の役に立てたのだと嬉しくて、嬉しくて殆ど眠れなかった。

この鎮守府は提督が来てからとても活気が出てきたと思う。この前まではお互いがお互いに素っ気ないというか、関心がない様な暗い空気が漂い、とても過ごしにくかった。同じ艦種の子達とはそれなりに会話はしていたが、少し話すと話題が無くなり、気まづくなって自然に解散するという事が多々あった。

私も頑張って話題を考えて何度も他の子に話し掛けたけどダメだった。基本私達は深海棲艦と戦い、人を守るのが仕事。戦闘以外の話題なんてあまりない。もし質問などしても、

「好きな色は？」

「黄色」

と一言で終わってしまう。私も話す事が無くなり、ほかの子との会話を諦めようとしたその時、提督が現れた。

提督がここに来て、一時間も経たないうちに鎮守府中が提督の話題で持ちきりになった。あれほど殺伐としていた空気が一気に変わり、明るく、賑やかになった。

「まさか朝礼で土下座するなんて思わなかったよ。」

「私もビツクリしましたわ。」

「提督さん、可哀想・・・阿賀野が慰めてあげなくっちゃ！」

「阿賀野ねえ、止めて。金剛さんがこっち睨んでいるから・・・」

「へっ。」

「あかんなあ、男が女に頭下げるなんて情けなくて見てられへんわあ。」

「あら、私はそうは思わないけど・・・」

「聞いてピヨン!!あの球磨型達が雌の顔をしてたんだピヨン!!」

「またそんな嘘ついて・・・騙されないよ。あの極悪非道の球磨型がそんな顔するわけないよ。」

「嘘じゃないピヨン!!ホントだピヨン!!」

「あのジャイアントスイングは見事でした。私も司令官に負けないようにもっと鍛えなければっ!!」

「朝潮姉さん、その上腕二頭筋だけでも十分だと思っよ。」

「提督も男ですものー、力はあるわよねー。」

「・・・ふんっ!!」

「提督ってさー。」

「うん。」

「あんまり格好よくないよねー?」

「そうだ・・・っ!!蒼龍っ!!後ろッ!!」

ガッ!!ミリミリミリミリ・・・

「お姉様っ!!止めてくださいっ!!」

「蒼龍さんの頭が割れそうですっ!!」

「・・・いい音ね。」

提督は様々な人達と積極的に交流を深めているらしい。今は同じ艦種のみならず、艦種の枠を越えて皆で仲良く提督の話題で会話をしている。共有の話題から自分の考え、価値観を話して更に盛り上がるというループが続き、とてもいい雰囲気だ。私も早く皆のハンカチを返して他の子達と会話をしたい。もしかしたら他の軽巡、重巡、戦艦、空母の人達ともお話が出来るかもしれない。

五月雨はかつてないほどの高揚感を胸に込め、再びハンカチを返すため歩き出す。

「でも。私が一番お話をしたいのは・・・」

そう言つて五月雨が顔を少し暗くさせたその時。

「五月雨えええええ!!何処だああああ!!」

絶叫に近い声が五月雨の耳に響いた。自分の名を呼ぶ声に一瞬、驚いた顔をしたが、その声の主を五月雨は知っていた。ふふっと思わず笑みがこぼれる。声が聞こえた方に顔を向け、遠くに声が届くように両手を口に添え、息を大きく吸った。

「提督ーっーっ!!私はここでーっーすっ!!五月雨はここにいますよおーっーっ!!」

五月雨は精一杯大きな声を出して山田に答えた。

31、追跡者

「おっ！聞こえたぞ。」

階段をがむしやらに登っていた山田は微かに聞こえてきた五月雨の声に反応した。

「おーい、五月雨えー!!」

五月雨の居場所を把握する為に更に声をあげる、一度立ち止まってよく耳を澄ました。

「ここですよー!!提督ー!!」

声は聞こえるのだが、建物が一般の建物より異常に広い為、上からなのか下からなのか音がどこから響いて来るのか山田は分からなかった。お互いにお互いを呼び合うこの状況。ハタから見ればとてもロマンチックな光景なのだろう。山田が五月雨にパンツの持ち主の事を聞くとという目的がなければだが。

「ゴホッ、ゴホッ。どこだあ？五月雨。」

声を出しすぎたせい、山田の声は次第に弱くなってきた。ナノマシンの影響で通常の人間より強化されている山田だが、度重なる新キャラと超展開により疲労が溜まってそれが喉にきたのだろう。声が出にくくなってしまった。

（ああ、五月雨が一生懸命に声を出して俺に答えてくれているのに・・・せめてスマホがあればな）

そう思いながら三階に登りきった山田はギョっとした。

「……………」

山田の目の前に薄いピンク色をした髪の少女が無表情でビシッと気を付けをした状態で待っていたのだ。

「うわっ！ビックリしたあ。」

誰もいないだろうと心の中で油断していた山田は突然現れた少女を見た途端、背中を震わせ仰け反った。

「……………ふっ。」

山田のリアクションが滑稽だったのか少女は一瞬だけ笑い、元の無

表情に戻った。そして左腕をそのまま横に上げて、人差し指をつき出した。

「え？何？」

何かされるのではないかと身構えていた山田を他所に少女はそのまま固まってしまった。電池が切れてしまった人形のように。少しだけ薄気味悪いと感じた山田だが、彼女が指差す方向を見ると。

「提督さあーん!!・・・おかしいな。声が聞こえなくなっちゃった。」

五月雨がキョロキョロ見渡しながら歩っていた。

「あつ、五月雨だ。」

目的の人を見つける事ができ、安堵の溜め息をつく。よかった、よかった。これで一先ず安心だ。これで五月雨からこのパンツの持ち主についての情報が聞ける。その前に・・・

「ありがとう、教えてくれ・・・」

目の前の少女にとりあえずお礼を言おうと正面を向き直した。だが少女の姿は無くなっていた。先程のまでそこにいたハズなのに。

山田は手を先程の少女が立っていた場所の位置に出し、左右に動かした。

「・・・」

何もない。

回りを見渡しても上に続く階段と下に続く階段、そして五月雨がいる廊下くらいしか人が通行できる所はない。少女が指を指した方角

(山田から見たら右側)に顔を向けたなら、右側の五月雨が在る廊下と下の階段が少なからず同時に見える。もし少女が立ち去ったのならすぐ分かるはずだ。だがそれは無かった。なら上の階段を上がったて行つたのだらう。普通はそう考える、しかしそれはあり得ない。なぜなら足音が聞こえなかつたからだ。

どのような体型の人間でも階段を上がったたり、下がったりする時には必ず音は鳴るはずだ。音を鳴らさないように移動する方法としてはゆつくりと進む以外には無いだらう。だが山田が少女から目を離したのはたつたの数秒。その数秒の間に足音を立てずに階段を一気に駆け上がり、上の階に行くなど現実にはあり得ない事だ。

「提督ー!!提督ー!!・・・あれ?どうかしましたか?」

五月雨も遠くに在る山田を見つけ、手を振りながら近づいてきた。が、何故か放心状態の山田に気付いて声のトーンを少し落とす。

「お、おう。五月雨、会いたかつたぞ。」

「はい、私も会いたかつたです。」

山田の「会いたかつた」の言葉に嬉しくなり、飛び跳ねるのを我慢しながら五月雨はニコニコと笑う。その顔を見た山田も、ふにやーつと気持ち悪い笑顔を浮かべた。俺ら相思相愛やんけ!!と山田はそう思った、その刹那。

ピキイイイイイイイイン。

山田の頭にニューー〇イプのような効果音が流れた。

「殺気!?!」

グルッと首を動かし、天井を見上げた。だが何も無い。

「上に何かあるんですか？」

五月雨もつられて天井を見上げた。

「いや、何か黒い獣が……。」

「黒い獣？」

「何でも無い。気にしないでくれ。」

「は、はあ。」

「ところで五月雨、今ハンカチを皆に返して回ってるんだって？」

「そうなんです。やっと半分返し終わった所で……」

「俺も手伝おう。いや手伝わせてください。」

山田は食いぎみに言った。「ここで働かせて下さい」的な勢いで。

「本当ですか？ありがとうございます!!」

(提督が手伝ってくれるって事はいっぱいお話が出来って事だね。)

「元々、俺の願いが原因だからな。」

(半分は返し終わったのか、ならもう半分の中にパンツの持ち主がいるかもしれない。)

純粹と不純、本音と建前。様々な思いが交差するがこれだけは言える。

――五月雨マジ天使――。

「それじゃ、提督。行きましょう。」

山田についてきてと言わんばかりに歩き出す五月雨。鼻唄を歌って、腕を大きく振り、楽しそうにしている。

「元気だなあ。」

その様子を和やかに眺める山田。五月雨の後についていこうとした時、また天井を見上げた。

「……。」

「提督ー!!早く、早くー!!」

「あいよー!!」

五月雨に返事を返して彼女の後を追った。

山田と五月雨が天井から離れて数十秒後、天井から一枚の布が落ちる。

トッ。

その後薄いピンク色の髪をした少女が天井から降りてきた。先程、山田の目の前にいた少女だ。遠くにいる五月雨と山田をジツと見つめている。

「あれ？ハンカチが入っていた箱、どこに置いたっけ？」

「ええっ!？」（マ○オさん風）

「ふふっ。」

彼女、不知火は山田達の後を静かについていった。

32、持ち主探しの大冒険（古鷹型編）

五月雨と共にハンカチが入った箱を探す為に三階、二階（艦娘達の居室）を往復した。（今は二階にいる。）本人はどっちかの階の廊下に置いたような気がすると言うが、いくら探しても箱らしき物は置いてはいなかった。艦娘は人間より記憶力がいいと青葉が言っていたが、やはり艦娘も人間と同じで個人差があるのでは？と思う山田であった。

「あれー？おかしいな。」

さつきはルンルン気分だった五月雨も次第に顔が曇りだした。

「まあまあ、よく思い出してみ。俺に会う前は誰かと話さなかったか？」

「あつー！」

山田の言葉に思い出したと言わんばかりに五月雨が大きく口を広げる。

「そうです、加古さんにハンカチを渡してる時に提督の声がして……」

「箱を置いたまま俺の所に来たと。」

「わあ、さすが提督。名探偵みたい。」

「よせやい、照れるべ。」

ガチで照れるニートを綺麗にスルーして五月雨は加古の部屋に向かった。（と言っても数十メートルの所にあったのだが。）

ピンポーン。

部屋に備え付けられているインターフォンらしき物を五月雨は押した。

「なんか、冷てえな。」

自分のリアクションを軽くスルーされ、トボトボと五月雨の後をついて行く山田。

「はーい。あら？五月雨ちゃん。どうしたの？」

ドアを開けて出てきたのはヘソ出しセーラーを着ている大人しそうな女の子だった。

「あつ、古鷹さん。あのう、きつきハンカチを返しに来たのですが、その時この辺りに忘れ物をしてしまって……。」

「そういえば加古がそんな事言ってたような……ちよつと待っててね。加古ー!」

古鷹は妹の加古を呼ぶため部屋の奥に戻っていった。ちようどその時、山田も五月雨に追い付き五月雨の後ろに並ぶ形になって立ち止まった。

(部屋の前には箱は無かつたし、忘れ物って事で預かってくれてたのかな?)

状況を知らない山田はそんな事を想像しながら、ふと部屋の中を見た。靴が玄関に二足置かれており、右の棚の上には熊のぬいぐるみが複数飾られている。少ししか部屋の内容は見えないが自分が想像している以上に女の子の家(?) って感じで山田は少しドキドキした。

(山田は異性交流ほぼ皆無)

「おまたせ。今来るから待って……」

部屋の奥から玄関に戻ってきた古鷹は先程のいなかった人影に気が付き、硬直した。

「あつ、ああああ。えーつと、こんにちは。」

部屋をじっくり眺めていた山田も突然現れた女性に驚き、何か言おうとしたが何も思い浮かばず、結局無難な挨拶で対応した。

「てっ、ててててて提督!? な、何で此处に!?!」

「いや、色々あつて五月雨の手伝いを……」

頭から蒸気か何かを出した古鷹が顔を隠しながら壁に隠れてしまった。

「掃除も何もしてないし、片付けもしてない。もし来るとわかってたら……どうしよう。」

古鷹のテンパリ具合を見て、山田は一步後退した。見ず知らずの男が女の人の部屋を訪れるなんて失礼な事だ。いろんな事がありすぎて、そんな初歩な事さえ忘れていた。ああ、申し訳ない。と山田は項垂れた。山田は一言謝ろうとしたその時、もう一人の女性が玄関に現

れた。

「どうしたのー？古鷹。小鹿みたいに・・・おお？」

その女性は山田を見ると片手を上げ、挨拶をした。

「よっ、提督。お疲れさん。」

「・・・ああ、お疲れ・・・。」

そのフレンドリーな挨拶に山田も思わず返す。すると五月雨がすかさず加古に話かける。

「加古さん、先程ハンカチを返しに来たとき・・・」

「ああ、そうだ、そうだ。あの箱ね、駆逐艦が持ってたよ？」

五月雨の言葉を遮って加古はまさかのカミングアウトをした。

「持ってた？」

山田と五月雨は揃って首を傾げる。

「そう、五月雨ちゃんが何処か行っちゃった後すぐに黒い服の子がピョンピョン跳ねながら箱を持って何処か行っちゃったんだ。確か名前は、う、う、う、う・・・」

「う〇ん。」

「そうーう〇ん。・・・じゃないよ!!あたしになに言わせんのさ!!」

山田につられた加古がムツとした。

「黒い服、ピョンピョン、駆逐艦。そして「う」か。」

「一体誰が持ってたよ？ちやっただらう・・・」

「五月雨よ、俺わかつちやっただかもしんない。」

何かを悟ったように山田は五月雨を見つめる。

「ええっ？提督、誰だかわかったんですか？」

五月雨は大きな目をさらに大きくして山田を見つめた。

「・・・おう、たぶんだが。」

五月雨の可愛い瞳に照れて山田は目を背けた。それを眺めていた加古は興味がなさそうというか眠そうな顔をして。

「どうやら謎は解けたようだね。それじゃ、あたしは二度寝キめるから・・・ふぁーあ。じゃあね提督。今度来るときはちゃんとアポとつてね?じゃないと古鷹がこうなるから。」

そう言うといまだ壁にもたれながらブツブツと言っている古鷹を指差した。

「ああ、気を付けるよ。ありがとうな」

「あつ、ありがとうございます。」

「んじや、また。」

加古は気だるそうにドアを閉めた。
パタン。

しばらくたって五月雨は山田に訪ねた。

「それで誰なんですか?箱を持っていた人は。」

「そうだな、とりあえず睦月型の部屋に行くべ。」

33、持ち主探しの大冒険（睦月編・前編）

その後、五月雨に睦月型の部屋の場所を訪ねた。階段が嫌になっていた山田はどうか、どうか睦月型の部屋がここの階でありますようにと密かに願う。だが五月雨の

「睦月型のお部屋は私達の部屋の近くなので三階ですね。」

との言葉で山田の願いはあえなく散ってしまった。少しばかり溜め息をつき、再び階段を上り始めた山田。その様子を後ろから見た五月雨は暗い顔をして話す。

「ごめんなさい。私がドジなばかりに提督まで巻き込んでしまつて・・・。」

せっかく手伝いを申し出てくれたのに自分の失敗で提督を振り回してしまった。あの時、咄嗟に箱を置かなければ。箱を持ったまま提督を探せばこんな事にはならなかったのに。ああ、私なんて・・・

「五月雨。」

自分自身の情けなさに泣きそうになっていた五月雨に山田は階段の途中で止まり、振り向かずに言った。

「お前じゃなくて箱を盗んだ奴に呆れて溜め息が出たんだ。」

「え?」

「それに巻き込まれたなんて思っていないよ。元々俺が頼んだ事だし、階段の上り下りもいい運動になった。」

首を右左と交互に動かし、体の向きを変えて後ろの五月雨を見ながら言葉を続ける。

「あんまり自分を責めるな。いいじゃねえか、ドジだって。それも個性だ、個性。」

「個性？」

「ああ、ドジっ娘。いいじゃないの、可愛くて。」

「可愛い？私が？」

山田のドストレートな誉め言葉（セクハラ）に五月雨は顔をポツと赤くさせた。（★）気づいてくれ五月雨。ソイツはただパンツを返す為だけに君を利用してゐるゴミカス野郎なんだ。騙されちゃダメだ。世の中にはソイツよりも顔の整ったイケメンがうじゃうじゃいる。早まつてはいけないよ？心を強く持つんだ。

「あ？んだお前。やんのかコラ。」

お？なんか文句あんのかコラ。

「俺の顔が整ってねえみてえな言い方したじゃねえか。」

整ってねえから整ってねえって言ったんだろが。

「上等だ!!そこから引きずり出して登場人物に加えてやるわっ!!」

やれるもんならやってみろや!!このっ・・・止めよう。五月雨ちゃんが見てる。すまない、五月雨と会話しているお前が羨ましくてついナレーションに熱が入っちゃまった。許してくれ。

「いや、こちらこそゴメン。俺もストレスからついカツとなっちゃまった。」

（★）からの続き。

「だから、チャツチャツと犯人をはっ倒して、ハンカチ返しの旅に行こ

うぜ。」

そう言うのと山田は階段を再び上り始めた。

(五月雨の声が今にも泣き出しそうな感じだったから少し空気を変えようと頑張ったが厳しいか?)

「……………っ!!よし。」

パシツ!!

五月雨は自分を鼓舞するように両手で顔を叩き、山田の後を追う。後にこの些細な出来事が彼女の、いや、この鎮守府の未来を大きく変える事になるとはまだ誰も知る由もなかった。

「ここか。」

「は。」

階段を先頭で登っていた山田の横を勢いよく抜かして、「こっちです」と先導する五月雨に少しは元気になってくれたのかなとホッと胸を撫で下ろす山田。そしてあつという間に目的地に着いた。

さっそく五月雨がインターホンを鳴らそうと人差し指をつきだす。

ズニユ。

「ズニユ?。」

インターホンの音ではない不思議な音が鳴った為、五月雨はふと後

ろを向く。すると提督の後ろに人影があることに気づいた。とその瞬間。

ドサツ!!

山田が突然、前のめりで倒れてしまった。

「提督っ、大丈夫ですか!？」

「……ツ!!……っ!」

五月雨は必死に山田に声をかけるが、山田からは返事がない。よほど苦しいのか呼吸が荒い。

「大変っ!!明石さんをつ!!明石さんをお願いします。待っててください。提督っ!!」

山田の緊急事態に五月雨は鬼気迫る勢いで明石を呼びに行った。

山田は今にも気絶しそうになるのを堪える。その様子を眺める一つの人影。五月雨が見た山田の後ろにいた人影だ。その影の主はゆっくりと山田の前に移動し、余裕の顔を浮かべ山田を見下ろす。

山田はそれに気づき、薄れゆく意識の中その人物の顔を凝視する。が途中、力尽き気絶してしまった。

その人物はつまらなそうな顔をしてどこかに歩き出した。

次の獲物を探しにいく為に。

34、持ち主探しの大冒険（睦月編・中編）

「ねえ、山田」

「なんだ」

「もし、この世界に得体の知らない化け物が突然やって来て、私を別の世界に浚って逃げてしまったら山田は助けてくれる？」

「テレビの見すぎだ、病院に行け。なんなら付いてってやろうか？」

「ははっ、冗談だよ。冗談・・・」

「やれる範囲でなら助けてやるよ」

「えっ？」

「まあ、助けるといっても国家権力頼みだけだな」

「・・・バーカ」

「……………」

深い眠りから解放され、山田は目を開ける。月明かりの光が窓から溢れ、部屋中を微かに照らす。この景色を見るのは山田にとって二回目だ。ここはパンツを見て気絶した彼が鎮守府に連れてこられ、寝かされた部屋。自分の家では無いことを認識し思わず溜め息を漏らす。「また懐かしいものを見たな・・・」

そう呟き、両腕を頭の下に潜り込ませ、鼻からゆっくりと空気を吸い込み口から吐いた。深呼吸をし、リラックスした山田は気持ち切り替え、いままでの出来事を軽く振り返る。

突然、艦これの世界に呼ばれる

←

←
パンツで気絶する

←

← 盛られる

← 女性用トイレに侵入

← 集団の前で土下座

← 「ここ、パラレルワールドなんです。ハイ」

← 昼食& a m p ;バイオレンス

← 写真一枚で脅される

← 五月雨とデート

← 誰かに襲われる

「ロクなもんじゃねえな」

普通では体験できない事をこれでもかど成し遂げた山田の目から一筋の涙が流れ、キラリと光る。

「う、ううん」

「!？」

自分一人だと思っていた山田はブルツと身を震わせ、急いで上体を起こし足元を見る。すると山田が寝ているベッドの隣に椅子に座りながら器用に寝ている五月雨がいた。こっくりこっくりと船をこいでいる。

「もしかして、ずっとここにいたのか？」

動揺した山田は咄嗟に少し大きめな声を出してしまった。

しまったと思った山田だがもう遅い。その声が決め手となって五月雨は起きた。

「……うん？あつ、提督!!目が覚めたんですね？よかった!!」

ドターン!!

勢いよく立ち上がった為、五月雨が座っていた椅子が盛大に倒れた。思わず山田も「おうっ!」と驚きの声を上げた。

「すつ、すみません」

椅子を戻した五月雨は恥ずかしそうにドアに近づく。

「じゃあ、明石さん呼んできますね……」

ガチャ、パタン。

「……結婚しよう」

ガチャ。

「はぁーい、お・ま・た・せ。明石ちゃんだよー?」

「待ってないから、森にお帰り」

「またまたあ、照れちゃって」

カチ。

五月雨が部屋を出て、しばらくたった後に明石が来た。証明の電源を入れ、椅子に座って山田を見据える。

「まあ、とにかく病気ではないですね」

「そうだろうな」

彼女はあっけからんと話し、それを山田は軽く流す。

「よくよく考えれば、提督の体内のナノマシンのお陰で病気なんてかかりませんし」

「すげえな、ナノマシン」

自身の体に注入されたナノマシンの能力に感嘆の声をあげる山田に頷きながら明石は言った。

「で？大丈夫ですか？お尻」

「めっ……ちや痛い!!」

山田はあの時、病気で倒れた訳ではない。「ズニユ」その擬音と共に尻○に何かを刺され、悶絶し、あまりの出来事に声が出ず、うずくま 踞うずくまってしまった。人間は本当にヤバイ時は声が出ないものなのである。

「でしようね、五月雨ちゃんに呼ばれて来てみれば、お尻が血だらけで倒れてたんですから」

「血だらけっ？嘘っ!？」

血が出ていたとの言葉に反応し、ベッドから起きあがった山田はズボンを確認する。それは今まで穿いていたズボンではなくなっていた。全体が真っ白で少しゴワゴワしている。まるで軍服のようだ。

「あまりにも大量に血が染み込んでいたので治療の途中で交換させてもらいました。男性用の服はそれしかないので我慢してください」

「そんなにか、悪いな。着替えさせて貰って……ありがとう」

山田は右手で頭を掻いた後、頭を深く下げた。

「いえ、これも仕事なので気にしないでください。私特製の軟膏も塗りましたし、すぐ治りますよ」

「そうか」

やれやれとベッドの端にゆっくりと座り直した。その様子を見た明石はふと立ち上がり言った。

「目が覚めた事ですし、食事にしましょうか。あれから五時間も眠っていたんですからお腹すいたでしょ？」

「五時間もか？・・・どうりで暗いわけだ」

「間宮さんに頼んで何かいいものでも作って貰いましょう、待っててください、すぐ持ってきてきますので」

「あ、ああ。ありがとう」

トウク。

な、なんだ？このトキメキは。メツチャ優しくくない？ダメだ、気を緩めたら涙が出る。耐えろ!!俺っ!!

山田の手にギュツと力が入る。涙を我慢し、平然を装う。せめて明石が外に出るまでは泣くものか。

「んん。」

すると明石は少しだけドアを開け、動きを止めた。

「？」

どうしたのかと山田は小首を傾げ、明石を見続ける。

「提督って・・・毛深いんですね。」

パタン。

そう言って部屋から出ていった。

残された山田は何の事だと口をポカン開け固まった。

「毛深いって、そりゃあ俺は男だし、友達より毛の量が多いとは思
う
が」

自身の腕毛をシミジミ見ながら言葉を続ける。

「そりゃあ女から見れば毛深いとも思われるか」

ゴロンと横に仰向けになり、食事が来るのを待つことにした。横に
寝て暫くたつと尻に微かに違和感を覚えた。何だろうと思った山田
は先程の明石との会話を思い出す。

「ああ、軟膏塗ったとかいってたっけ」

尻の違和感の正体が軟膏のせいであると分かった山田は納得し、体
の向きを変えた。

「懐かしいな、昔ヘルニアやった時にも尻から痛み止めを……」

再び違和感を覚えた。さっきのではない、それ以上に何かヤバい
ような、何かを失ってしまった気がした。

着替え

軟膏

毛深い

この三つのパワーワードが折り重なり、オーバーレイネットワーク
を構築する……

ガチャ。

「おう、提督。摩耶様が飯持ってきてやったぜ？感謝して……」

「尻、見られたああああ!!」

尻の痛みより恥ずかしさがより上だった。ベッドの上で顔を手で覆い、ゴロゴロと転がり狂う山田。

摩耶はその様子をただただ、見つめていた。

35、怒り

「落ち着いたか？」

「……」

尻を見られた恥ずかしさで、のたうち回る様子を摩耶に見られ、どうしようもなくなつた山田は顔を見られたくない一心でベッドにうつ伏せになっている。摩耶が飽きて部屋を出るまでずっとこうしていよう、そう思っていた。

「まったく、しよーがねえーなあ」

コトツ、パタン。

そんな音が聞こえた。おそらく食事の乗つたおぼんか何かを置いて外に出たのだろう。せつかく持つてきてくれたのに悪い事をしたな、だけどあんな姿を見られて会話する事なんて到底出来る気がしない。展開的に明石か五月雨あたりが持つてきてくれるものだと思っていたが。

部屋の中には微かな波の音と時計の針の音しか聞こえない。山田の気持ちを汲んだのか、それとも気持ち悪がって逃げたのか。どっちにしても、もう彼女の気配は無い。山田の作成勝ちと言えらるだろう。しばらくして旨そうな匂いが部屋に広がり、腹の音がグウウと鳴り響いた。

「今度会ったら謝ろう」

ゆっくり体勢を変え、起き上がる。摩耶が持つてきてくれた食事を頂こうと床に足を置いた。ふと何気に右側を向くと立ちながら壁に背中を預け、こちらを見ていた摩耶と目が合った。

「やっど起きたか、早く食え」

「アツチョンプリケ！」

観念した山田はおぼんが置いてある椅子を手元に移動させて、スプーンを手にとった。おぼんの上に水が入ったコップとそれはそれは大きなオムライスがバンツと置かれていた。本来黄色である表面が何故か大量にかけられているケチャップのお陰でほぼ真つ赤の状態になっている。

「嫌がらせか?」

ボソツと呟く山田に摩耶は答える。

「間宮さんがケチャップで、でっかいハートを書こうとしたんだが途中でミスって全体に塗りたくったんだと。よつと」

「なるほど」

スプーンでオムライスの端を小さく切り分けると鶏肉、椎茸、玉ねぎ、ピーマン等の具材がたっぷり入ったチキンライスが姿を表した。今すぐ食べたい、食べ尽くしたい。そんな気持ちを一時的に押さえ込んで山田は尋ねた。

「なぜ俺の隣に座るの?」

当たり前のように座ってきた摩耶にツツコミをいれ、スプーンを置いた。

「ああ?座りたいから座っただけだろ?バカか、お前」

喧嘩腰で答える摩耶に少しビビりながら山田は理解した。

「おぼんと食器なら後でちゃんと返しに行くから大丈夫だ」

俺がオムライスを食べた後のおぼんと食器を片付ける為に、わざと俺を煽って早く食わせようとしたのだろう。持ってきてもらったんだ、片付けくらいは自分でやるさ。

「んなのどうでもいい、早く食わねえと無理やり食わすぞ?」

ベッドにあぐらをかき、不機嫌そうな態度を示した摩耶は

横目で山田を睨み付けた。

「はい、いただきます」

気迫に押され、スプーンを持ち直しオムライスを一匙すくって口に入れた。チキンライスのほどよい酸味が口に広がり、食欲を加速させる。外側の卵も柔らかいのは勿論だが細かく刻んだネギやカニカマ

が入っていて、ボリウムがかさ増しされている。山田にとっては大満足な一品だった。

「……………」

黙々と食べ続ける山田を横目で見続ける摩耶。他人から見たら、弟を看病する姉のようだ。暫く時間がたち、一息ついた山田がスプーンを置き、コップに手を出そうとした時……

「おい」

隣にいた摩耶に声をかけられた。

「何でしょう」

不良に絡まれた高校生のようにゆっくりと首を右に向けた。その顔を見た摩耶は腰の小物入れにぶつきらぼうに手を入れ、何かを取り出しそのまま山田の口に当てた。

「口にケチャップ付いてるだろうが。だらしねえ」

カラフルな鯨が小さくプリントされたハンカチを左右に動かして汚れを落とす摩耶。

「ありがとう」

そんな事をやってもらうとは思わなかった山田は顔を今まで以上に赤くさせ、一言だけ礼を言うとスプーンを持ち直した。

ドクツドクツドクツドクツドクツドクツ。

心臓の音が次第に大きくなりながらも再び食べ始める。

「旨いか？」

コクコク。

そんな簡単な質問にも今の山田には頷いて答える事しか出来な

かった。夜は更けていく……

――

あの後、オムライスを食べ終わった瞬間に椅子のおぼんを取り上げ、勢いよく出て行ってしまった。まさかの行動にビックリした俺はそのまま硬直した。摩耶が出ていき、ドアが閉じようとした時、再びドアが開いた。その隙間から摩耶が頭だけ出してこう言った。

「すぐ寝るんじゃないぞ？・牛になっちまうからな」

それだけ言って勢いよくドアを閉めた。

俺はベランダ側に座り直し、海を眺め、呆けていた。

「これが青春か」

コンコン。

扉を叩く音に少し苛立ちを覚える。人が久々に青春を満喫しているというのに。

「すみません、五月雨です」

「はいよー」

明石だったら無視してやろうと思った山田だが、五月雨だとわかると優しく返事をした。

ガチャ。

「提督、あのう……」

「どうした？ああ……」

箱を取り戻す所で俺が気絶したからな。夜になっちまったが大丈夫だろう。よっこいせと腰を上げる山田。

「私、提督が寝てる時に睦月型のお部屋に行っただけです」

いつもとは違う空気に山田は少し戸惑う。

「そしたら卯月さんが箱を部屋に運んでいる所を偶然見つけて、私、声をかけたんです」

――――

「そつ、その中には皆のハンカチが入ってるんです。返してください!!」

「やーだね、これは廊下に置いてあったピヨン。回りには誰もいなかったし。うーちゃんが拾ったからこれはうーちゃんの物だピヨン」
「そんなあ・・・でも・・・」

「そこに立っていると邪魔だピヨン。早くどっか行くピヨン!!」

ドンツ!!

「きやつ!!」

卯月は五月雨の肩を強く押した。その反動で倒れた五月雨は軽く腰を打ってしまう。

「ぶぶぶー、弱っちいピヨン」

箱を部屋の中に入れた卯月は五月雨を見下ろしながらニヤニヤ笑ってドアを閉めた。

パタン。

「うう」

「まったく、また気絶って・・・少しは格好いい所の一つや二つ見せてみなさいよつての、あの気絶提督。うん？」

「・・・・・・・・」

「あら、五月雨ちゃん。どうしたの？」

「っ!!」

「えっ?ちよつと・・・五月雨ちゃん」

――――

「私、何とか返してもらおうとしたんです。だけど・・・」

次の瞬間、五月雨の目から大粒の涙がボロボロと流れ落ちた。ズボンを力一杯握りしめ、口をへの字に変えて。

「ひっく、だげどダメでした、ひっく、がんばってじぶんをつ、かえつ、かえようとしたけど、ダメでした。やっ、やっぱりわたしは、なっ、なにをやっても・・・」

ガシツ!!

それ以上は言わせねえ!! つと山田は力一杯、五月雨を抱き締めた。決して邪な気持ちではない。もう見てられなかった、そんな顔見たくなかった。俺が付いていればこんな事にはならなかった。ああ、情けない。五月雨は必死に自分を変えようとしていたのに俺はのうのと鼻を伸ばして・・・

「わたしっ、ていつ、とくのようにっ、つつ、つよくなれ、なりたくてっ・・・」

「お前は強い子だっ!!弱くないっ!!弱いなんて言わせないっ!!」

山田の腕に更に力が入る。

「お前は俺の艦娘なんだ。他の誰よりもずっと強くなれる!!自分を信じろっ!!そして越えるんだっ!!己の弱さをつ!!」

「うっ、うう、うわああああああんっ!!でいどぐう、でいどぐうううううう!!」

山田はあの時、自分の尻を指した犯人の顔を思い浮かべる。

「流石に今回はオイタが過ぎたな、卯月っ!!」

36、山田、動きます。

俺は五月雨が泣き止むまで頭を撫で続けた。あんまりクドクド言葉で慰めてても、俺は語彙力が無いから同じ事しか言えないしな。「ありがとうございます・・・」

「気にすんな、よし！五月雨。後は俺に任せてお前は部屋に戻れ」

五月雨の肩を軽く二回叩き、立ち上がる。

「いつ、一緒に行きます、今度こそちゃんと説明をして・・・」

「いや、お前は一人で行ったんだろ？なら今度は俺が行く番だ」

腕をグルグル回し、首を回した山田はいきなり五月雨の両頬を手のひらで挟みこんだ。

「むえ」

両頬を挟まれた五月雨は自然と口が「ぶ」の形になる。

「俺は天下の山田様だけ？本気になったら誰にも止められねえ。箱を取り返したらお前の部屋に持っていくからそれまで待ってる。いいな？」

頬をプニプニ触りながら五月雨に視線を合わす山田。誘拐でもするのかな？と思われても仕方ない絵面だが、五月雨から見た山田はとても頼もしく、そして格好よく見えた。

「わかりました、私提督が来てくれるのを待ってます」

山田の手が離れたと同時に話す五月雨の目はいつも通りの明るく、大きなクリクリとした目に戻っていた。

「うし、いい子だ。」

その後、五月雨はドアを開けて自分の部屋に戻っていった。

「ふう。」

泣き出した五月雨が可哀想で一気に俺の怒りの沸点がピークに達したが、時間がたつに連れ、現在収まりつつある。口が達者になって

行動力が活発的になったのは嬉しいが、それと同時に感情的になつてきている。さつきまで五月雨を泣かせた卯月への「殺意」の感情が俺を支配していた。まるで俺が俺で無くなってしまうかのように・

「提督」

声が出た方に顔を向けると、何やら分厚い書類を抱えた大淀が真面目な顔をしてドアの近くに立っていた。

「大淀・・・」

「提督、こちらへ」

大淀は山田にそう言うと、ドアを開けたまま、山田のいる部屋の反対の部屋に向かつていった。素直に大淀の後を付いていく。

「どうぞ、お掛けください」

立派な机に備え付けられた黒い回転式の椅子を手で指しながら大淀は言った。ここは先ほど山田がいた部屋のすぐ隣にある執務室という部屋。床には赤のカーペットが敷いてあり、壁は真っ白で一目では傷、汚れが全く見当たらない。家具は見る限り全て木製で出来ていた。部屋の真ん中に大きい机に、何かの書類がビッシリつまっている棚、洋服を入れるタンス。シンプルな部屋だ。出入口は寝室と廊下、二つある。

（川内をおぶった時もチラツと見たが、改めて見ると息が詰まりそうな部屋だ。）

大淀に指示されるがままに座り、机を触りながら周りを見渡す山田。そんな山田の前に立った大淀は眼鏡の位置を直しながら、口を動かした。

「失礼ながら先ほどの会話をドアの陰から聞かせていただきました。簡潔に言うと、五月雨さんが卯月さんに物を盗まれ、説得を試みたが

拒否をされた。そういう事ですね？」

「そうだ、そして奴は俺の○ナ○処○を奪った・・・」

バンツ!!

大淀は手に持っていた大量の書類を机に叩きつけた。そう、叩きつけたのだ。

「・・・失礼。手が滑りました。」

「・・・」

目力がすごい。大淀の後ろからゴゴゴとかなってそんな圧力を感じる。

「これは真面目な問題なのです。しっかりしてください」

「はい、すみません・・・」

大淀から叩きつけられた書類の一枚を手に取り、読んでみると上に相談報告書と書いてあった。

匿名希望

この前、身長が小さいピンク色の髪の毛の女の子が廊下にゴミを捨てていた。注意したが無視して何処かに行ってしまった。何とかしてほしい。

これは、まさか・・・。俺は他の書類にも手を取り読み進めていく。

あかつき

わたしがごはんをたべていたら、うづきちゃんがわたしのだいすきなはんばーぐをたべちゃったのくやしい。

朝潮

掃除をしていたら、「うーちゃんも手伝うピョン!!」と言ってきたので箒を貸したら、箒で叩かれました。

愛宕

靴にゴミが付いてると言われ、屈んだ時に髪をぐしゃぐしゃにされたわ。次に会ったら撃っちゃおうかしら。

日向

あのピンク、沈めてやる。

長門

提督の尻を眺めていると、何だか胸がざわめくのだ。こんな気持ち初めてだ、どうしたらいい？今度ゆつくりと話をさせてくれ。あなたの尻と。

磨留由

あの駆逐艦、断ることに俺に因縁つけてきやがる。「もぐもぐ」とバカを演じてやってるが、もう限界だ。お前が殺らねえなら俺が殺るぞ？

龍驤

あかん、あの子。卯月とか言ったっけ？ウチのパツ・大切なもんを盗んでいきよった。追っかけたんやけど逃げ足が早い、早い。ホンマになんとかしてや。

川内

この間はごめんなさい。私、夜になると気分が高ぶっちゃう性分です。提督に迷惑を掛けてしまいました。反省してます。だから昼間の、その、埋めるのは勘弁して下さい。

鈴谷

提督、チイーツス☆相変わらずちよずいてる感じ？ウケルー（へっへ）てかさ、あの卯月ってガキ。マジで可愛くないんだけど（；；）（もう、ガン萎えく♪あたしの口紅を使って地面に絵え書くとかマジ、ありえんティ〜♪wwwwお気に入りの色だったのにさ。て、事でお仕置きシクヨロね（へっへ）／

そこで手を止めた山田は椅子を回転させ、後ろの窓側を向いた。

「後半からほぼ関係無くなって来たが、これほとんど・・・」

「卯月さんに対する不平不満の書類です」

「はあ〜。」

なんだアイツ、俺と五月雨以外の奴らにもチョツカイ出してたのか。拳骨一発で勘弁してやろうと思ったがこりやダメだ。

「最近の卯月さんの行動には目に余るものがあります。そして今回の提督への攻撃が決め手として、いまままで我慢していた他の艦娘達の怒りが加速して・・・」

バンツ!!

廊下側のドアが勢いよく開いて、誰かが入ってきた。

「たっ、大変ですっ!!睦月型の部屋の周りを人が取り囲んで今にも暴動が起きそうなんですっ!!」

顔を青く変化させた青葉がぜえぜえ言いながら山田に近づいてくる。

「司令、このままではこの鎮守府が崩壊してしまいますっ!!」
「提督」

二人からの視線を背に受けながら山田はゆっくりと立ち上がり、夜空を見上げ静かに言った。

「行くか」

37、艦娘脅威のメカニズム

「ちよつと、開けなさいよ。いるんでしょ？」

「出てこーい」

「もう許さないんだから!!」

「ふあつきゅー、ふあきゅ、ふあつきゅー」

睦月型の部屋の前で大人数の艦娘が怒りの声を上げ、ちよつとしたお祭り状態になっていた。ドアを叩くもの、奇声を上げるもの、座り込むもの、ヤジウマなど、それぞれ思い思いの行動をしている。中にいる睦月型の艦娘達はというと部屋の真ん中で身を寄せあつてガタガタと震えていた。

「卯月ちゃん、今度は何やったの？皆凄く怒ってるよ？」

「弥生達、どうなるんだろう・・・」

「まさか、こんな事になるなんて・・・怖いピョン」

「姉ちゃん、とつとと謝ってきてよ〜」

睦月、弥生、卯月、望月の四人はいつもとは明らかに違う空気に半泣きになっている。卯月が恐怖で声を上げそうになった時・・・

ドンッ!!

と大きな音になり、先ほどまでの怒声や罵声がピタリと止んだ。

「.....」

四人とも玄関の方を見る。しばらく異様な静けさが続いた。そしてドアがゆつくりと開いていく。

ギギギギギ!!

場面は変わって、時は少し遡る。

三階に着いた山田は唾然とした。見渡す限りの人、人、人。これが暴動というものかと少し顔がひきつった。集まっている艦娘をザツと見渡す。皆明らかにピリピリしていて声を掛けづらい空気だ。

「まさかこんな事態になってしまうとは」

山田の後ろで同じ光景を見た大淀は手に口を当て、プルプルと震えている。その顔は恐怖に歪んでいた。

「……………っ!!」

その隣の青葉も執務室に飛び込んで来た時より顔色が悪くなっている。

前に会ったときとは想像もつかない程の二人の狼狽っぷりに山田も焦り始めた。一人一人が暴れたとしても、鎮圧にそれほど苦労はしないだろうが、彼女達は違う。彼女達は核兵器も通じない深海棲艦を倒せる唯一の存在。それに渡り合えるのだから、力と生命力は人間とは段違いだろう。

そんな彼女達が今、目の前で暴れている。数十人、いやもつといるかもしれない。同じ艦娘でもこんな大人数を止められるわけがない。この暴動が更に悪化し、鎮守府が崩壊してしまう。そんな最悪のシナリオが彼女達の頭にはあるのかもしれない。とりあえず、落ち着くように説得してみよう。多少ユーモアを含めれば、話を聞いてくれるかもしれない。一応俺は、コイツらの上司なのだから。

「おーい、ちょっと……………」

ドンッ!

注意を自分に向けさせる為、山田が当たり障りのない大ききさの声で話し始めたその時、それよりも大きな衝撃音が山田の声を掻き消した。

「夜中に何を騒いでんのさ。さつきから足音がうるさくてイライラすんだけど。」

集まっていた艦娘が一斉にその方向を見る。そこには全身紫色のジャージを来た女性が立っていた。肩より長い栗色の髪の毛を後ろにゴムで結んでいて、明らかに不機嫌そうな目付きをしていた。左手に真っ赤なバットを持ちながら。

「げっ、金剛型……」

「よりによつて長女かぁ……」

「どうする？こっさり逃げちやおうか？」

彼女を見た途端、艦娘達の睦月型への「怒り」が金剛型の長女、金剛への「恐れ」に変わった。ジャ○アンの放つ彼女はバットを左肩に置いて目を細める。その堂々とした態度に艦娘達の一人の頬に汗が流れ落ちたその時。

「ちよつと悪いんだけど、皆。俺の話を聞いてくれ」

「へっっっ」

その声が一番早く反応したのは金剛だった。

「いつ、ハハハハハハこの声はまさか・・・テイトク!？」

さつきまでのピリピリとした空気が先程の「ドンツ」という音で中和されて、ここぞとばかりに山田は声を出したのだ。声の主にいち早く気づき、動揺した金剛は咄嗟に腕で顔を隠し、しゃがんだ。今の姿を見られないように出来るだけ体の面積を縮めようとした結果だ。

（こんな所に提督がいるなんて思わなかった。どうしよう、ワタシ今スツピンなのに・・・）

自分の今の姿に金剛は深く後悔した。が、ちらりと片目を開けてみると、他の艦娘が丁度盾代わりとなって互いに見えない状況だと気づいた。

（危なかった。コイツらがいて助かったわ。にしても・・・）

金剛はゆっくりと中腰になりつつ、艦娘達の間から山田の様子を窺う。彼の目は上を向いたり、横を向いたりと落ち着きがないように見える。

（ああ、テイトク。いつ見てもいい男だねえ、特にあの眉毛。とても太くて格好いい!!眉毛を細くしているチャラ男共なんかより何十倍もいい味出てるわ。落ち着きがないのもまた魅力）

頬に手を当てながら、うっとりとして山田を見つめている金剛。何十、何百時間でも見続けていたい。彼女はそう思っていた。

カラン。

「!!」

気の緩み過ぎで左手の力が弱まり、持っていたバットが床に落ちた。その瞬間、金剛の頭に一気に血が巡り、今後の展開を想像した。

バットの音

← 艦娘共が振り向く

← その様子を見ていたテイトクもこちら側を注目する

← 「あれ？金剛」

← 「ハ、ハイ!!テイトク・・・」

← テイトクがワタシの格好を凝視

← 「えっ、マジで？クソだせえ。」

← 「こ、これはその・・・」

「萎えるわ。お前の事、マジで愛してたのに。結婚してイ○バの物置に乗れるくらいの子供作って幸せに暮らしたいと思ってたのに・・・」
「え？本当？・・・いや、そうじゃなくて。は、話を聞いてヨ。マイダーリン!!」

← 「うるせーボケエ!!もうお前とは絶交じやい!!」

← 「そ、そんなあ」

「っ!!」

バットが落ちて、ものの数秒で最悪の展開をはじめ出した金剛は力を足の裏に全て注ぎ、逆走り幅跳びの要領で後ろに後退し、音も無く走り去った。

カラン。

集まった艦娘の一人の阿武隈が金剛がいた後ろを振り向くと、そこには真っ赤なバット。そして数滴の血が床にあった。

38、 金剛という女

「お姉様、 帰ってきませんねえ・・・」

「そうだね、 何事もなければいいんだけど・・・」

ここは金剛型の部屋。 テーブルに向かい合って座っている榛名と比叡は同時にため息を吐いた。

「私達のお風呂の時間が終わってしまいます」

ちらりと壁の時計を眺めた榛名は前に体を倒し、 テーブルに左頬をつける状態になった。

「霧島はお風呂に入らないでもう、 寝てしまいましたし、 もう私達だけでも行きましようか？」

「うーん、 もう少しだけ待って来なかったらそうしようか」

カチャ、 ギイイイイ。

ドアがゆっくりと開き、 そこから一人の女が部屋に入ってきた。

「お姉様!!」

長女の登場で待つてましたとばかりに立ち上がった二人は、 それぞれ近くに置いてあった着替えやタオルが入った袋を持って金剛に近づこうとしたその時、 金剛は妹達に目もくれず、 自分の部屋に入っいてしまった。 呆然と立ち尽くす二人。

「は、 鼻血が出てましたね・・・」

「誰かと喧嘩してきたのかな？ お姉様、 最近提督と二人きりで話せないってイライラしてたから」

今の姉の状態を冷静に分析し、ヒソヒソと話す榛名と比叡は到底、風呂に誘える空気ではないと考え、刺激をしないようにゆつくりと風呂に向かおうとした。

すると先程の格好とは違う金剛が現れた。髪を後ろにまとめたジャージ姿から髪型をキレイに整え、脇が露出した巫女服の様な格好にバツチリとメイクをキメている。まつ毛が長く、目が強調され女性特有の色気があった。

「よしっ、これで完璧ー！いざっー！」

榛名と比叡の間をすり抜け、部屋から出ようとドアノブに手をかけると同時に両肩にポンと手を置かれた。

「お姉様、そんな格好でどこに行かれるのですか？」

「まさか提督の所ではないですよね？」

「邪魔をしないで、妹達」

金剛の前に進む力と比叡と榛名の抑える力が拮抗する。ミリミリと小さく音が鳴る。

「やはりですか、お姉様が提督を好きな事は重々承知してはいますが今はダメです。自重して下さい」

「少しタイトクとお話するだけだよっ!!それくらいいいでしょ!!」

「じゃあ普通の格好でいいじゃないですか、何ですか！その黒のガーターはっ!!そしてこの匂い、香水ですね？」

「これは足が寒いから穿いてるだけよっ!!香水はたまたま持ってたのを使っただけ。他意はないのっ!!」

「お姉様？」

「……………」。

「まあ、あれだ。それぞれ卯月に恨みがあるのだろうが、一旦俺に預からせてもらっていい……かな？」

艦娘達の視線を一気に浴び、恥ずかしさやら申し訳ないやらで若干うつ向きながら山田は言った。すると空かさず手を上げて、山田に意図する艦娘が一人いた。

「二ついいかしら？」

目尻が上がり、腕を組んで不機嫌そうな態度をとる五十鈴に山田は答える。

「な、なんででしょう？」

「正直、私はあの駆逐艦に何かされた訳じゃないの。妹の為にここにいるのよ」

そう言うとき少し涙目になって訴え始めた。

「妹の名取が今日初めて食堂でご飯を食べたいと言いだしたの。妹はとても恥ずかしがり屋で訓練にもあまり参加しなくてずっと自分の部屋に引きこもっていたの……」

「……………」

「私達姉妹とだけ会話はしていたんだけど。このままではいけないと

思っでもあの子の性格を直すために、いろんな手を使って頑張った。でもダメだった。」

「……………」

「私達も、もうダメと諦めかけていた時、あの子は初めて言ったの。食堂に行きたいって。初めてあの子の意思を言葉で聞いたの。うれしかったわ。私達姉妹はすぐに食堂に向かった。」

「……………」

「着いた途端、キョロキョロと見渡して、落ち着きがなかったけど目にとでも輝いていたの。何かに興味を示すあの子の様子が可愛くて、愛おしかった。…その時、あの駆逐艦が名取に足をかけて転ばせたのよ!!あの子は何もしていないのにつ!!」

その時の感情がよみがえって来たのか、言葉に熱が入る。

「転んだあの子に謝りもしないで笑いながら何処か行ってしまったわ!!おかげでまたあの子は部屋に閉じ籠ってしまった!!もう、私達とも話してくれないっ!!許さないっ!!絶対につ!!だから一回でいいっ!!あの駆逐艦を殴らせてっ!!そうでもしないとっ!!私はっ、私はっ!!」
震えるほどに拳を握りしめて涙を流す五十鈴を見た山田は真面目な顔をして静かに言った。

「お前の気持ちはわかった。他の奴等も聞け。何も卯月に罰を与えないなんて言ってない。お前達、一人一人が卯月に怒りをぶつけてみる。アイツの精神が崩壊しちまう」

「ならどうするのよっ!!」

五十鈴に続いて、そうだ、そうだと周りの艦娘も山田に抗議する。

「だから言ったろ？お前達の恨みを俺が預かると」

口を月のような形にした、悪魔のような微笑みをする男がそこにいた。

39、持ち主探しの大冒険（睦月編・完結編）

その後、五十鈴を含む艦娘達は山田に部屋に戻るよう促され、それぞれ渋い顔をしながら部屋に戻って行った。廊下には山田、大淀、青葉の三人だけが残っている。

「はあ、一時はどうなる事かと思いましたよ」

「あの空気は洒落になりませんでした。いつもならシャッターチャンスとカメラを構えますが今回ばかりはねえ」

眼鏡の位置を直す大淀と額の汗を腕で拭う青葉は鎮守府崩壊の危機を回避出来たと安心し、一息ついた。

「五十鈴は姿が見えなくなるまでずっと俺の事を睨み付けてたけどな・・・おっ？」

艦娘達を見送った山田は床に転がっていた物に目を奪われた。

「なんでこんな所にバットが？」

床にあったバットに近づき、拾い上げた山田はバットのグリップに何やら書いてあるのに気づく。そこには「山田 金剛」と白いマジックのようなもので小さく書いてあった。

「まあ、山田なんて何処にでもいるしな。」

深く考えず、適当な事を言った山田はバットを持ったまま卵月型の部屋のドアの前に立った。その様子を見た二人は一気に顔を青くさせ、必死に山田を後ろから抑えた。

「提督っ!!止めて下さいっ!!いくら何でもバットで殴るなんて酷すぎますっ!!」

「そうですよっ!!少し冷静になってくださいっ!!」

「お前らは俺を何だと思ってるんだ・・・」

顔を見合わせた二人は山田を押さええながら真面目に答えた。

「よく気絶する・・・」

「単細胞？」

「よし、卯月の前にお前らをターミネートしてやる」

「……………」。

睦月型の部屋

ギギギギギツ!!

外の音が止み、ゆつくりとドアが開いていくのを睦月達はただ見つめるしかなかった。ドアが開ききり、彼女達が最初に見たのはバットを持つ山田だった。

「「ぎやあああああ!!」」

彼女達は悲鳴を上げた。もしこの時、山田が手ぶらでこの部屋を訪れていたらこんな反応はしなかっただろう。しかし彼女達は先ほどまでの一件で最大級の精神的疲労により、まともな思考が出来なくなっていた。そんな中、真つ赤なバットを持った男がこちらを見ていたのだ、叫んでしまうのも無理もない。

「ええ・・・?いや、いや、なにもしない、なにもしない。勝手にドア開けたのは悪かったけどさ。俺は卯月に用があるだけで・・・」

「「!?!」」

ただの何気ない山田の言葉が彼女達の頭にはこう聞こえた。

「ほお・・・？おい、おい、たまらねえな、たまらねえな。卯月だけボ
「ボ」にしようと思ったけどよ、全員いるなら丁度いい・・・」

「「「!?:」」」

「少しだけ話をしたいんだが（お前ら全員をブチのめして）」

「「「!?:」」」

「いいか？（埋める!!）」

「「「助けてー!!殺されるうう!!」」」

バタツ!!恐怖がピークに達した四人は仲良く気絶してしまった。

「・・・なんで？」

—————。

「それで—————ですか？こんな—————て」

「—————なもの—————して—————を—————」

「でも—————の—————が—————」

ここは執務室。少女の意識が覚醒する。

「う、ううん」

「あつ、提督。起きたようですよ?」

卯月は瞼を開けてブーツと目の前に座っている山田を見つめた後、回りを見渡し、ここは自分の部屋ではないとすぐに理解した。

「ここは?」

「ここは執務室って所だ。」

「執務室?」

「そう。そして何故自分がここにいるのか・・・わかるな?」

山田は机に腕を置き、頭を置くと正面をじっと見据える。

「それは・・・」

真剣な顔をした山田から目を背け、卯月は少し前の記憶を遡った。いつも通り、他の艦娘に悪戯をした後部屋に戻って寛いでいた時に突然、姉の睦月が血相をかいて部屋に入って来た。どうしたのかと訪ねると姉は自分の悪戯に不満を持った艦娘達がこの部屋の周りに集まり始め、今にも恐ろしい事になるようなそんな感じだという。今まで散々姉に止めろと言われ続けた悪戯を陰で行ってきたのが悪かった。その後、姉と妹に質問責めと罵倒をされながら四人で身を寄せ合い、騒ぎが収まるのを震えて待っていた。

「お前、いろんな奴にチョツカイ出してたんだってな。皆えらく殺気を放ってたぞ?」

「そうですよ、卯月ちゃん。私も前々から注意をしていたでしょ? イタズラなんてしてはいけないって」

後ろからの声に驚いた卯月はビクツと体を震わせる。大淀はゆっ

くりと歩きだし、山田の近くで止まった。

「今回はもう注意だけでは許されませんよ、まったくあなたって子は毎度、毎度、人を困らせてばかりで私がどれだけ……」

「あー、大淀さん、大淀さん。あんまり言っちゃるな。今回の騒動で少しは反省したろうて」

先ほどまでの顔を変え、手をヒラヒラさせ、大淀を宥める山田。
「ですが……」

「まあまあ。なあ、そうだろう?」

ブンブン!!

山田の問いかけに卯月は頭を上下に激しく動かし、肯定の意思表示をした。

「は、反省してるピョン!!もう悪戯なんて絶対、絶対にしないピョン!!」

「ほらな?」

「……」

腑に落ちないといった顔の大淀に向けて山田は言った。大淀は明らかに不機嫌な顔をしている。それを見た卯月は更に言葉を続ける。

「大淀さんにも今までたくさん迷惑をかけたピョン、注意されても反省しないで悪戯を続けた事は謝るピョン・でも、うーちゃんは反省したピョン!!あんな怖い思いはもうしたくないピョン!!」

半泣きで訴える卯月に大淀は少し困惑した。強く言い過ぎてし

まったかな？嘘ついてないように見えるわという顔をしている。

「よしよし、反省してるんならいいんだ。反省してるなら・・・」

山田は蔓延の笑みで卯月に優しく問いかける。それを見た卯月に背筋が凍るような冷たい感覚が走った。

「そ、そう、ピョン・・・反省・・・してるピョン」

「そう、それじゃあ・・・すう~~~~」

山田は大きく空気を吸い込み叫んだ。

「アカえも~~~~んっ!!」

テレレ×6 テレレレン♪

テレレ×6 テレレレン♪

パパ×8 タラララララララララッテ、トトット♪

「はあい、呼びました?」

執務室の扉からアカえ・・・明石が入ってきた。

「アカえもくんっ、助けてくれよーい。卯月がよお、卯月がよお、ここに来て誰とも目を合わせねえんだよお。絶対嘘ついてるよお!!俺はコイツの本音が知りたいんだよお!!」

某漫画のようにデフォルメ化された山田は涙を滝のように流す。

「仕方ないですねえ、提督君は・・・」

明石はポケットではなく、胸から何やら取り出し、天に掲げた。

「ジンジン君〜!!」

「なにそれえ」

「簡単にいえば、嘘発見器だねえ、これを対象の頭に着けて、すべての質問に「はい」って答えてもらうの。もし嘘をついてるならセンサーが反応してブザーで教えてくれるんだ、すごいでしょ?」

「すごい、すごい!!貸して、貸してー!!」

山田は明石に近づいて、ヘルメット状のジンジン君を受け取り卯月に被せた。

「オラア!!」

展開がぶつ飛んでいて、脳内処理が追い付かない卯月は無意識にこの場から離れようと体を動かしたが、両手両足が縛られているのに今気づいた。なので抵抗、虚しく山田にジンジン君を被らされてしまった。恐ろしくなって身をよじった反動で座っていた椅子から落ちそうになった時、山田の手が卯月の片を抑えてそれを止めた。

「どうしたんだ?そんなに慌てて。死ぬわけじゃあるまいし。気楽にいこうぜ?」

山田は机に戻り、椅子に座り直した。

「まあ初めに軽く試してみるか、いいか?俺の質問には全部「はい」と答えろ」

卯月は震えて小さく頷いた。

「悪戯は好き?」

「はい」

.....。

ジンジン君に反応はない。山田は質問を続ける。

「姉妹にも悪戯をしたことがある?」

「はい」

.....

「俺はイケメンか？」

「は・・・」

ブー、ブー、ブー、ブー!!

執務室にブザーが響き渡る。

「.....」

「.....」

ゴホンと咳をした山田は再び質問を続ける。

「じゃあ、本題に入るか。お前は先ほどの騒ぎで反省したといったが本当だな？皆、一人、一人にちゃんと謝って許してもらいたい・・・そうだな？」

「は、はい」

果たしてジンジン君の反応は？大淀がゴクリと生唾を飲み込んだ次の瞬間。

キュイン!!キュイン、キュイン、キュイン、キュイン!!

キュイ、キュイ、キュイ、キュイ、キュイ!!

ジンジン君からパチンコの大当たり時に出るような音が盛大になつた。

「これは何だい？アカえもん？」

「ええー、この反応は全くと言っていいほどそう思っていない事で

すね」

.....。

「.....てへぺろ!!」

「なにが「てへぺろ」じゃあああああ!! やっぱり嘘だったわ!! だってコイツずっと目がギラついてたもん!! 反省してる目じゃなかったもん!!」

山田は勢いよく椅子から立ち上がると、手も足も縛られ身動きが取れない卯月を横に抱え、執務室から廊下に繋がるドアを足で力強く蹴った。

バンツ!!

「アカえもん、丸太か木の板を二枚持って海岸に持ってきてくれ!! あとロープも!! 大淀、さつき話した通りコイツを海に連れていく。力持ちの奴、まあ青葉辺りでいいわ!! アイツも連れて海に来い!!」

「提督!! 何をするピョン!! 離せピョン!! やめ・・・」

山田は光の速さで海へ走っていった。

「丸太かあ、倉庫にいくつかあったような・・・」

明石が呟きながら部屋の外に出ていき、大淀だけ部屋に取り残された。彼女はやれやれと首を振り、執務室の電気を消して、戸締りの確認をとりつつ部屋を後にした。

.....。

真つ暗で何も見えないと思つていたが、外は月明かりで意外に明るくなに不自由なく海に向かう事ができた。山田は卯月を抱えながら波の音に耳を傾けながら、明石と大淀が来るのを待つ事にした。

「私をこんな所に連れてきて何をする気だピヨン？」

抱えられた卯月が不機嫌そうに山田に問う。

「何をする？・愚問だな。お前に罰を与えるんだよ」

「罰？・なんでこんなところで・・・わかったピヨン!!提督はうーちゃんを泣かせるような酷い事をするためにここに連れてきたんだピヨン!!鎮守府の中でうーちゃんの声が響かないように!!」

「……………」

「はっ、凶星ピヨンね!!いいピヨン。好きなだけ殴ればいいピヨン!!その後鎮守府に戻ったらあることないこと言いふらして提督の評判を下げてやるピヨン!!」

「…………戻れたらいいな」

ボソツと山田は呟く。どうやら卯月には聞こえなかったようだ。

「おーい、提督ー!!」

「来たか」

明石の声が聞こえ、山田は振り向く。そこには自分の身長の一・二倍の丸太を軽々と持った明石、くたびれたような顔をした大淀、そして……

「ヘーイ!! テイトクー!! 待たせたネー!!」

顔を輝かせた金剛がブンブンと手を振りながらこっちにやって来た。

「お、おう」

青葉とは全く違う艦娘が来て、一瞬焦ったが卯月への罰が最優先と山田の脳は判断した。

「よし、じゃあ最初に卯月を丸太にくくりつけるぞ」

「ええ?」

「は?」

「ワッツ?」

「今、なんて言ったピヨン?」

明石、大淀、金剛、卯月は山田の言葉に驚いた。

「コイツを丸太にくくりつけて砂浜に突き刺した後、反省するまでずうーっつと放置するんだよ」

山田は笑顔で言い放った。目はひとつも笑ってないが。

「よつと、テイトク。これでいいネ?」

「ああ、いいわ。完璧だわ。最高」

だっ広い浜辺に一つのトータムポールが出来上がった。

「下ろせ、下ろしてピョン!!」

トータムポールという丸太にくくりつけられた卯月は叫んびながら必死に体を動かす。しかし頑丈なロープで体を固定されている為、あまり意味はない。山田が無理やりロープで卯月の体を丸太にくくりつけ、それを金剛が一人で持ち上げ、浜辺に突き刺し、固定させた結果が今のこの状況である。(その場面を細かく書くと、ほぼ犯罪になりそうな描写になるので割愛します。)

そんな卯月を下から見上げ山田は言った。

「お前が本当に心を入れ替えて、皆に素直に謝れるまでここで反省してろ」

「ふざけるなピョン!!こんな事をしてタダで済むと・・・」

卯月の言葉を無視して山田は言葉を続ける。

「お前の軽はずみな行動で涙を流す者、傷ついた者、何かを失った者が大勢いる。これはソイツら全員の怒りだ。精神を入れ替えるか、俺がいいと判断するまでお前はそのままだ。風呂も便所も歯磨きも何も出来ない地獄を味わうがいい・・・」
そう言うと山田はゆっくりと鎮守府に戻っていく。

「ま、待ってください」

山田の後に大淀達も付いてく。卯月の耳にはもう、波の音しか聞こえなくなつた。

40、山田、散る。

「提督、その・・・彼女はいつまであの状態のままなのでしょうか？」
後ろから大淀が山田に話し掛ける。若干、早歩きのまま進む彼にとまどいながらも彼女は声をかける。

「本人次第だな、とりあえず五月雨の所にアレを持っていかなくてはならないから、細かい事はまた後でな」

アレというのは艦娘達のハンカチが入った箱の事である。山田は睡月型の部屋での騒動の後、部屋の隅に置いてあった箱を見つけ、執務室に運んでいた。山田の脳は今後の展開を想像し、妄想を膨らませ続けていた。

「山田の脳内」

「よお、五月雨」

「ああ、提督!!無事だったんですね？私、提督に何かあったらどうしようって不安で、不安で・・・んっ」

俺の人差し指で小さくて可愛い彼女の唇を塞ぐ。

「ははっ、俺があんなチンチクリンに遅れをとるわけないだろ?・・・
孝夫さんだぞ?」

今にも泣き出しそうな彼女に俺は上着を開くような仕草をとる。

「本当によかった・・・本当に」

「それに、ホラ。これも取り返してきたぞ」

卯月から取り返した箱を堂々、五月雨に見せる。

「わあ、ありがとうございます!!」

「これでまた明日から二人きりだな……」

「提督……」

五月雨は顔を赤くさせながら両頬に手を添え、少し俯くと、上目遣いで俺に熱い視線を向ける。そして目を閉じ、唇を尖らせ、顔を近づけてきた。

「ふっ、五月雨……」

俺は震える五月雨の肩を優しく手で抑え、五月雨の唇に……

ズブツ!!

「ぎゃああああああああ!!」

目に何かを刺された山田が地面に倒れ、ゴロゴロと勢いよくもがき苦しみながら転がる。

「ああああああ!!ああああ!!ああああ!!」

「すいませーん、突然立ち止まったと思ったら白目向きながら、ブツブツ何か言ってたんで気持ち悪くて刺しちゃいましたー。てへー」

右手の人差し指と中指を突き出した明石が棒読みで山田を見下ろしていた。

「はあああああ、なんかバカらしくなってきたわ。お酒でも飲みたい気分……」

「いいねえ。どうせ敵も来ないし、久々に鳳翔さんの所に飲みに行く？」

「ええ、行きましょ」

明石の提案で何処かに行くことにした大淀はチラツと山田を見ながら言った。

「提督、着替えと生活用品は執務室に用意してあります。何かありませんたら机の引き出しを調べれば呼び出しボタンがありますのでそれを押して下さい。では」

いまだ苦しんでいる山田をよそに早口で淡々と話す大淀。話終わった彼女は明石と肩を組ながらどこかに行ってしまった。

—————。

「はあー、綺麗だなあ」

すっかり目の痛みが薄れ、目を開けた山田が見たのは一面真っ暗な空、そして散りばめられた宝石のように光る無数の星だった。子供の頃はよく寝転んで夜空を眺めていたが、大人に近づくにつれてそんな事をする時間も余裕も無くなっていった。ああ、あの頃が懐かしい。周りの目も、時間も、汚れるのも気にせず自分のやりたい事を思う存分やっていたあの頃が。

「もう少しこのままでもいい」

おもわず空に向かって手を伸ばす。

染々と自分の武骨な手を眺める。自分の手のひらはこんなに大きかったのか。幼かった頃の自分の手のひらの記憶と今の自分の手の

ひらを比べてそんな事を思う。慣れない事を立て続けに行ってきた山田はセンチメンタルになり始めていた。

「私もテイトクとこのままでもいいネ……」

「そう……か……?」

山田は隣から聞こえてきた声に反応して声を出す。と同時に固まった。何せ今この場には自分一人だけだと思っていたのに隣から声が聞こえたのだ。つまりさつきからボソボソと話していた独り言を聞かれていたという事。

山田は目を瞑り、心の中で空にある無数の星に願った。

ーー恥ずかしい……殺してくれ、と。

「!!」

現実から逃げようとしたその時、山田の上に何かが覆い被さった。ズシリとした重さが突然体の自由を奪う。

(ヤバイツ!!)

反射的にそれを退かせようと手が動かすが、ガシツと何かに抑えられる。おそらく、さつきまで俺の隣にいた人物だろう。明らかにただ事ではない、その証拠にハア、ハアと息を荒げて凄い力で俺を押さえつけているのだ。

「……のっ……」

両腕に力を込めながら俺の上に乗っている奴の顔を見る。そこには必死な形相で俺を見る金剛がいた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・つ!!」

何かの感情が溢れ出ているような彼女の瞳を見ながら俺は悟った。彼女が何故俺にこんな事をしているのか。それは卯月に対して俺が行った罰に憤慨しているからだ。彼女達の仲はあまりよくないと聞いた、しかし同じ使命を持った仲間同士。少なからず思っているのだろう。そんな仲間をつい最近来たばかりの男が罰と称して海に張り付けにしたのだ。あまりの所業にとうとう堪忍袋の緒が切れてしまったのだろうか。なら・・・・・・・・

山田は腕の力を抜き、目を閉じた。

「!？」

それを見た金剛は一瞬、驚いた顔をする。

「好きにすればいい・・・」

一言、山田は言った。

俺は頭もよくないし、偉くもない。そんな奴が人類を守れる力を持つ彼女達、艦娘に罰を与えるなど愚かな事だったんだ。提督、提督ともてはやされて俺はなんて事をしてきたのだろう。殴られても文句は言えないな。ここはケジメとして彼女の怒りをすべて受け止めよう。たとえ・・・・・・・・殺されたとしても。

いつもの山田とは思えない程に真面目な事を言った山田にナレーシヨンは戦慄を覚える。

ポタツ、ポタツ。

その時、山田の頬に雫が落ちた。

(これは、涙？なんで……)

金剛の顔を見ようと山田はおもわず目を開けた。何故泣くのだろう。俺が悪いのに……などと考えていた山田は彼女の顔を見て固まる。

そこには顔をほのかに赤く染め、熱でふやけたようにとろけた目をした金剛。そして涙だと思っていた雫の正体は彼女の口から絶える事なく流れでる唾液であった。

「す、好きにしてくれって……そんな大胆なっ……じゅる!!ハア、ハア。ああ、やばあい。そんな顔をされたらワタシはっ!、ワタシはああああ!!」

「ぎやああああ!!誰か助けてええええ!!○されるうううううう!!」

先ほどまでのシリアスを吹き飛ばすように山田の絶叫が海に響いた。

41、すごいよ!! 金剛さん。

「待つネ〜!! テイトクウウ!!」

「うおおおおお!!」

静かな浜辺に男女の微笑ましい戯れの声がこだまする。まさに幸せ絶頂の二人であった。女は愛する男を追いかける、その顔は照れているのか少し頬が赤い。巫女のような真っ白な衣服が月明かりに照らされ、女性特有の色気を醸し出している。まったくもって微笑ましい。

一方、男の方は何故か鬼気迫る顔で女との距離を稼いでいた。息も荒く必死に前を向いて走る。女と一緒に時間を長く過ごしたいのだろうか。初々しいというかウブというか独り身の男性なら少し妬いてしま・・・

「早くその○○○を○いでワタシ○バー%くく%グ○ブする
ネエエエエエ! ○そゝて数○き#な○程のべ@ビー#ゝ
／おおおおお!!」

「怖い!! 怖い!! 怖い!! 怖い!! 怖い!!」

というのは冗談で山田は必死に走っていた。金剛というバーサーカーから逃げるために。え? 何で逃げているのかって? 男だったら最高のシチュレーションじゃないかって? いやいやいやいや、いやいやいやいや。話は少し前に遡る。

—————。

彼女の涙(よだれ)をくらいながら俺は、とりあえず対話を試みた。

「ちよつ、ちよつと、あの、落ち着いて。一旦話をしましょう・・・」

丁寧な口調でなるべく相手を刺激さないようにゆつくりと話しかける。

「なあに？ テイトク？ …ああ。大丈夫ネ！ ワタシはバリバリの○女ネ！！」

「えっ！！ ああ、いや、その…」

彼女の発言に一瞬、驚いた山田に金剛は言葉を続ける。

「ワタシ、体力だけは自信あるヨ！！ ノープログラムネ！！」

「体力あるのは結構だけど一旦、離れてもらえると嬉しいんですが…」

「…」

最後の山田の言葉に今まで興奮気味だった彼女は突然、無言になった。街頭の光が突然消えてしまったように一気に場の空気が変わる。彼女は山田が発したある言葉を聞いた途端、思考を停止させたのだ。突然の彼女の変わり様に山田は背筋に寒気を覚える。しかし山田はそれを我慢して言葉を続けた。

「俺、体が貧弱なんで…あ、あまりここにいと風邪をひいてしまうかもしれません。だから一回、降りてもらってですね。部屋で…」

「なんで…」

「へ？」

山田の話を通り、金剛がうつむきながら話し出した。

「なんで離れてなんていうネ・・・?」

「・・・あつ、ああ!一旦場所を変えて、建物の中で話そうと思いましたが、この状態では移動も出来ないのものでそれで・・・うわっ!!」

山田は肩を勢いよく捕まれる。あまりにも速かった為、思わず声が出てしまった。何事だと金剛の目を見た山田はおもわず恐怖した。彼女の、金剛の目は光が灯っていなかったからだ。真つ黒な眼球がただただ、山田を見つめている。それがあまりにも不自然で恐ろしかった。

「ワタシは、貴方の事だけを考えて生きてきた。食事の時も、訓練の時も、妹達といえる時も、入浴の時も。ずっと、ずっと、ずっと、ずっと、ずうっーーーーっ!!貴方の事だけをっ!!」

ギリギリ、ギリギリ!!

金剛の指が山田の肩に強く、深く食い込んでいく。

「っ!!」

苦痛の顔に歪む山田に念仏の様に言葉を浴びせる金剛。

「なのに貴方は!!ワタシに離れるだなんて酷い事を言った!!ワタシ達は相思相愛のハズ!!ワタシのどこが悪いのっ!!ワタシ、直すからっ!!貴方がワタシだけを見てくれるように。どんな女が好き?ワタシ、イトクが望むならどんな事だっする。性格も変えるし、仕草も変える、クセも変える、見た目も髪型も何もかも変える!!だからっ!!ねえっ!!離れるなんて言わないでっ!!」

「……………」

ただ、流れに任せるしかなかった。まさかこんな展開になるなんて山田はこれっぽっちも思っただけはなかった。しかし彼は思った。このヤンデレに對話なんて成り立つ訳はない。早くこの場から離れなければ、俺にも、彼女にも未来は無い。と。

「ふっ、ふふふ」

「……？」

「あっはっはっはっはっ!!あーっはっはっはっはっはっはっ!!」

気でも触れたか山田は金剛の倍の声を出して笑いだした。突然の事に金剛も思わず、呆気にとられる。

その時、

「そおおおおおおおいつ!!」

山田は砂浜の砂を拳、いっぱい握んで金剛の目に向けて投げた。(よい子は真似しないでね。)

「うっ、うう!!」

まさかの目潰しを受けた金剛は目を押さえながら転げ回る。それを見ながらゆっくりと砂を払いながら立ち上がった山田は、勝ち誇った顔で言った。

「どうだあ!!砂の目潰しはっ!!俺に最大級のトラウマを植え付けやがって!!会ったばっかで極度のヤンデレとか引くわ!!じゃっ!!」

そう言うと山田はダッシュで鎮守府に向かった。

ダダダダダダ!!

一方、取り残された金剛は。

「へっ、へっへっへっへっへっへっ!!」

さっきの山田の笑い声とは違う奇声に近い笑い声を出した。そして金剛はゆらりと立ち上がり、山田の走って行った方向に顔を向けた。目を閉じたままで。

「テイトクウ、酷いよお。目を潰すなんてえ。本当にヤンチャなんだから……ふへっ」

そして、一歩、一歩と山田の走って行った方向に進んで行く。

「鬼ごっこネ? いいネ・遊んであげるヨ」

ザツ、ザツ、。

「ワタシが鬼・へっへっへっへ。」

ザツ、ザツ、ザツ。

「捕まえる、テイトクを……」

ザツ、ザツ、ザツ、ザツ、ザツ、ザツ。

「捕まえたラ、ワタシのもの……」

良かったじゃん山田、艦娘に好かれてて（白い目）

ああ、ホモオにも好かれてるか。

恐らく人生初のモチ期だゾ。喜べ山田!!

やったね山田ちゃん、家族が増えるよ（笑顔）

「うれしくねえ よおおお!! 助けてくれえええええええええ!!」

42、愛ゆえに（上）

丸太にくくりつけられてから数十分、卯月は変わらない景色をただ呆然に眺めていた。最初は山田に対する罵詈雑言をひたすら叫んでいた。が、次第に口数が減りとうとう黙ってしまった。途中、何とか脱出を試みるも、丸太と体がしつかりとロープで固定されていて何も出来やしない。その為、何をしても無駄とだと卯月は悟り、今に至る。

ヒユウウウウウ。

ガサガサガサガサ。

ザー。

浜にいるためか、少し風が強くなってきた。肌寒い。木や草の音、鳥の鳴き声、そして波の音がずっと聞こえる。誰もいない、ここにいるのは自分だけ。

ポロポロ。

何故自分はこんなに暗く静かな所にいるんだろう、帰りたい。自分の部屋に帰りたい。怖い。悲しい。自分はこのままなのだろうか。嫌だ、嫌だ、嫌だ。負の感情が沸き上がってきた卯月の顔には涙と鼻水が止めどなく流れ出した。

「うつ、うつ・・・」

皆もこんな風に悲しかったのかな、苦しかったのかな。そんな事を考え始めた卯月に叫び声が聞こえた。

「早くその○○○を○いでワタシ○バー%くく%グ○ブする
ネエエエエエ！○そゝて数○き#な○程のベ@ビー#ゝ／

／おとおおお!!」

「怖い!!怖い!!怖い!!怖い!!怖い!!怖い!!」

その声を、山田の声を聞いた卯月は思わず声を上げた。

「しれいかーんっ!!うーちゃんが、うーちゃんが悪かったピョン!!た
くさんイタズラをして皆を悲しませたうーちゃんが悪かった．．だか
らっ!!ロープをほどいて欲しいピョン!!お願いっ!!」

卯月が初めて自分の過ちを事を認めた瞬間である。嘘偽りない心
からの叫びは山田の耳に．．．

「そおとおおおおいつ!!」

届かなかった。

――――

「オオ／―?オオ@オ, オ%ゝ、オオ*、#><オ?:オツ!!」

「ハア、ハア、ハア、このままじゃ、おい、つかれる．．」

通常の間人より身体能力が上がっている山田も艦娘の本気の走り

にはかなわないのか、ジリジリと金剛との差を縮められていく。

もうダメなのか、俺は。山田がそう思ったその時、救いの天使が現れた。

「おーい。司令官ー」

数十メートル先に手を振りながら、近づいてくる影が一人。

「卯月ちゃんがお仕置きを受けている姿を一枚撮影したいのですが、彼女は今どこにいるんですかー？」

手のひらより少し大きな、いかにも高そうなカメラを持った青葉が呑気な顔でこちらに近づいてくるではないか。

「勝機!!」

山田は青葉に目標を定め、突進でもするのかの様に青葉に近づいていく。

「えっ? 何ですか? . . . ちよつ、危ない、危ないです!!」

鬼気迫る勢いで向かって来る山田に思わず後退る青葉。

ビュン!!

ぶつかると身構えた青葉の横を山田は通り過ぎて行った。

「な、なんなんですか . . . ? あれは?」

山田の背中を呆然と眺める青葉はふと、手元を見た。

「あっ!!私のカメラが無いっ!!」

先ほどまで持っていた自慢のカメラが姿形もなく、一瞬で消えていた。いくら自分の上官でもこれはあまりにも酷い。無断で物を盗るなんて。

「なんて事を・・・見損ないましたよ、司令官!!ん?」

カメラを勝手に盗られた事で怒った青葉は一回、ひっぱたいてやろうと山田の後を追いかけようとした。

その時

「ド○エエ@エエ!!コノ%メ×ブ×アア#/?アア!!」

背後から金剛というバーサーカーが充血させた目で襲い掛かってきた。

「-----」。

「これか?いや違う。これか?」

青葉からパクったカメラを俺はいじくりまわす。決して興味本位ではない。生き残る為である。カメラならば、あるはずだ。あの機能が。

「わあああああああああ!!」

「うおっ!!」

背後からものすごい勢いで声が近づいてきたから、奴が追いついてきたと思ったら案の定、青葉だった。ああ、それは怒るよな。いきなり自分の物を盗られれば誰だって。

「悪かったよ、青葉。でもこっちも生きる為なんだ。頼む。少しの間だけ、これを貸してくれ。なっ?」

俺の隣を並走し続ける青葉にペコリと頭を下げた。しかし彼女は俺の言葉を無視して、息を荒げながら必死に話しかけてきた。

「なっとなななな、何ですか!!あの化物はっ!!」

「金剛」

「嘘でしょ!?!」

「信じらんねえなら直接聞いてこいよ」

山田と青葉はチラツと後ろを振り向いた。

「マ@?..?エエエー。 ;:~?%エエ!!オ>?テ##エエ、%エエ!!」

「いやあああああああつ!!」

「俺も嫌だああああああつ!!」

仲間が出来て嬉しくなったのか、少しずつついっもの調子が戻ってきた山田。ここぞとばかりに青葉に尋ねた。

「青葉、フラッシュってどのボタンだ?」

「えっ?ええつと・カメラの上側の緑色のボタンですけど。それがどうしたんです?」

「そうか、ありがとう」

すると山田は走るのを止め、金剛の方向に向きを変え、カメラを構えた。

「司令、何をっ!?!」

「見てろ、青葉。これが俺の・・・」

突然立ち止まった獲物(山田)に金剛は舌舐めずりをしながら飛び掛かる。

「ワ@シを%チャク?ヤに?てー!!」

「必殺技じゃー!!」

金剛の手が山田の○○○○に届くギリギリの所まで来た瞬間。山田は緑色のボタンを押した。

「富○フラァーシュー!!」

閃光弾のような激しい光が金剛を包み込む。

「あ@—あ?:%あっ!!う?:%@/お!!」

金剛、本日二回目の目潰し。

「今だっ!!走れ!!」

青葉に叫びながら山田は鎮守府に一直線に走る。後を追う青葉。再び金剛は取り残される形になった。

「あんまりネ、タイトク。私の事そんなに嫌いなのか?」

愛ゆえに(?)

奇跡の会心の一撃により命からがら鎮守府内に逃げ延びた山田と青葉は緊張感が薄れたと同時に極度の精神的疲労のせいもあったのかお互いの背に寄りかかりながら、力無く座り込んだ。

「はあ、はあ、はあ、た、助かった・・・」

「ふう、ふう、ふう、なんでこんな目に・・・」

今まで味わったことのない出来事が続き、山田の脳にはアドレナリンが大量に分泌され、ちよつとしたハイテンション状態になりつつあった。しばらく呼吸を整えた後、山田はゆっくり立ち上がり手元のカメラを青葉に差し出す。

「ありがとう、コイツのお陰で助かった」

山田にカメラを差し出された青葉はジッとカメラを睨んでいる。言葉一つ出さず、ただジツと。

「・・・?おーい、青葉あ?」

反応が無い彼女に山田は恐る恐る声を掛ける。すると青葉の目から涙がポロポロと流れ出した。涙の滴が一つ、二つ、三つと増え続け、しまいには大雨のように止めどなく涙が流れだした。

「うううう、うえええええええ・・・」

顔を手で覆いながら泣く青葉に戸惑いながらも山田は彼女が泣いてしまった理由を悟り、申し訳なきそうに言った。

「青葉、すまん。お前をこんな事に巻き込んでしまって。俺も必死だったんだよ・・・本当にごめ」

「私の大事なカメラに傷があああああつ!!」

「カメラかいっ!!」

山田のツツコミに青葉は激しく反応し、血の涙が出そうな程に山田を睨み付けた。

「カメラ以外に何かあるんですかっ!!私がこのカメラを手に入れる為にどれつつつただけ苦労したと思っっているんですか!?!このカメラは私のすべてなんですっ!!これが欲しい為に何回、大淀さんに土下座したと思っっているんですかっ!!」

「お前のすべては土下座で出来てんのか、やつすいカメラだな。オイ」
「なにをおおおおお!!」

とうとうキレた青葉が山田の胸ぐらを掴んだその時、ヒタヒタと足音が聞こえてきた。

「!?!」

山田と青葉は足音の方をゆっくりと見ると、先ほどまで追いかけてきた金剛が歩いてこちらに向かってきた。

「やべえ!!すっかり忘れてた!!」

山田は上に逃げようと階段に向かおうとした。

「ちよっ、ちよっと待っててください司令」

走り出そうとする山田に青葉は思わず声を掛ける。

「なんだよ、俺はまだ死ぬわけには・・・」

「あれを見て下さい」

青葉は人差し指を突きだし、金剛を指差した。山田はチラリと指差された方向を見る。そこには先ほどとは別人のような金剛がいた。バーサーカーのオーラも無く、血走っていた目も無くなり、見た感じ普通の女性に戻っている。そしてニコニコと手を振りながらこちらに近づいてくる。

「タイトクロー!!もう大丈夫ネ!!さつきはゴメンナサイ!!」

その様子を見た青葉は安堵の表情を浮かべ山田に言った。

「ああ、よかった……。いつもの金剛さんです。まったく司令官、金剛さんと何かあったんですか？さっきまでの鬼の形相とは全然……。はっ」

何かに気づいた青葉はニヤリと顔を歪めて、肘で軽く山田をつついた。

「さては金剛さんにエッチな事でもしたんですかあ？ダメですよお？そんないいネタ……。じゃない!!そんな事をしては」

「。。。。。」

「艦娘に手を出したなんて鎮守府中に知られば大変な事になりますよねえ？」

「。。。。。」

「カメラの修理代の支払い。そして司令の土下座写真を一枚、撮らせてくれるのであれば目を瞑ってあげますよ？」

「。。。。。」

女性として完全にアウトであろうと思える程のゲス顔をした青葉が山田に脅しをかけるが反応がない。恐らく凶星を付かれて焦っているのだろう。青葉はそう思った。すると山田が突然、階段目掛け走り去ってしまった。

「ああっ!!司令、待つ……。逃げられましたか」

最高のネタを逃がしてしまったとガツカリと肩を落とす青葉だが、ならばと今度は金剛に狙いをつけた。さっきは彼女の威圧的なオーラで思わず山田と一緒に逃げたが、それは山田個人に対する感情であって自分に対しては無い。そう考えた。

「いやあ?、どうも、どうも、金剛さん」

――――

「はあ、はあ、はあ、ふう、はあ、はあ、はあ、はあ」

ところ変わって山田は必死に階段を駆け上がった。先ほどの金剛の顔を思い出しながら。そして四階に着いた山田は男子トイレに駆け込み、大の個室に入って鍵を閉めた。

「ここまで来れば、ひとまず安心だ」

便座に座りながら、二、三回深く深呼吸をする。

「見た目が普通に戻ったから、安心しかけたが……俺の野生の勘がアレはヤバイと判断した」

あんなに狂っていた金剛が突然、自我を取り戻して友好的に接してきた事に山田は酷く恐怖を感じていた。

「とりあえず二、三〇分はここに立て込もって、少し休もう」

山田は便座にもたれ掛かり、瞳を閉じた。

ピピッ、ガガガガガッ。

鎮守中に何かの雑音が響いた。

「な、なんだ？スピーカーか？」

この田尻鎮守府には、作戦内容、呼び出し、時報などの情報伝達を

よりスピーディにする為、いたる所にスピーカーが取り付けられている。もちろん山田がいる男子トイレにも。ただならぬ嫌な予感に生唾を飲みながら静観する山田。

(ハーイ、テイトクウウウ!!あなたのハニー、金剛デエエス!!)

山田は思考は彼女の声を聞いた途端、止まった。

(ワタシにあんな情熱的にモーションを掛けておいて逃げるなんてあんまりネ……)

鎮守府内に金剛の悲しげな声が響く。

(でもワタシ、わかったの……テイトクがワタシから逃げる理由を)

山田の顔中に尋常ではない量の汗が流れ出て、心臓の鼓動が身体全体に鳴り響く。

(ワタシと永遠に二人きりになれる場所を探していたのですネ：ゴメンナサイ、ワタシ気づかなくて……)

山田は凄い勢いで首を横に振る。

(カワイソウなテイトク：寂しかったデシヨ、怖かったデシヨ、苦しかったデシヨ、けどもう大丈夫・今からワタシがアナタにありつたけのLOVEを注ぎに行きます。だから……)

山田の身体が一気に震えだした。

ソコで待っていてくださいいね？

(司令官っ!!早くそこから逃げてくださいっ!!じゃないと殺さ

れ・・・)

(ガゴツ、ひいつ!!止め・・・ガツ!!ガツ!!ガゴツ!!ピー、ガシヤ)

違う女の声が聞こえたかと思えば、何かを殴る音が聞こえ、音が止まった。

山田は個室の鍵を開けて、外に出るために勢いよく扉を押しした。しかし。

「えっ!!なんでっ!!なんで開かないんだ!?!」

鍵を開けた筈なのに扉がまったく開かない。早くしないとアイツがここに来る。逃げなきゃ、逃げなきゃ。という焦燥感に襲われ、山田は体当たりで扉を開けようとするが、それでも扉は開かない。

「なんでだよ!?!なんでっ!!」

思わず山田は扉を蹴った。その時、山田は気づいた。上から誰かに見られている事を。山田は恐怖で顔を歪め、震えながら上を見上げる。

《●》《●》

そこには無表情な顔でこちらを見下ろす一人の女。金剛が個室の扉の上にぶら下がりながら、山田の顔を見つめていた。

「ひいつ!!」

倒れこむ山田が最期に見たものは、どこか一点を見つめながら近づいてくる金剛の口元だった。彼女の口は喜びに歪みながらこう動いた。

「モウニガサナイ」

「ギやああああああああ!!」

――――。――――。

その後、山田は男子トイレの片隅で冷たくなっているのを発見された。死因は窒息。何故、彼がこうなってしまったのかは当事者にしかわからない。その後、田尻鎮守府は提督不在の為に解体され艦娘達は他の鎮守府へと移動となった。

後日談だが田尻鎮守府の艦娘の一人が妊娠したというニュースが大本営に知らされたのはその事件から一年後の事だった……

俺の鎮守府（完） バッドエンド

43、愛ゆえに（中）

奇跡の会心の一撃により命からがら鎮守府内に逃げ延びた山田と青葉は緊張感が薄れたと同時に極度の精神的疲労のせいもあったのかお互いの背に寄りかかりながら、力無く座り込んだ。

「はあ、はあ、はあ、た、助かった・・・」

「ふう、ふう、ふう、なんでこんな目に・・・」

今まで味わったことのない出来事が続き、山田の脳にはアドレナリンが大量に分泌され、ちよつとしたハイテンション状態になりつつあった。しばらく呼吸を整えた後、山田はゆっくり立ち上がり手元のカメラを青葉に差し出す。

「ありがとう、コイツのお陰で助かった」

(タイムパラドックス!!)

「はっ!!」

「うえっ!!」

ポロツ、ガツ!!

山田の手からカメラが離れ、盛大に転げ落ちた。

「ぎいやあああああつ!!何をするんですかあ!!」

カメラを床に落とされ、青葉はこの世の終わりのような表情でカメラを拾い、山田の胸ぐらを掴む。

「私のすべてを破壊しようとするとか、どこのディケイドですかあ!!」

弁償してくださいっ!!」

「えっ? いや・・・あの、えっ? ぐ、ごめん」

何故青葉が怒っているのかわからず、曖昧な反応で答えるが、カメラを胸に抱えながら泣く青葉を見て、なんとなく状況を理解し、謝る山田。

「ぐ、ごめん」で許されるとでも思ってるんですか!? そんな言葉でチャラに出来るとも!? 私の土下・・・私の努力の結果、手にいれたカメラを取り上げた挙げ句、落とすなんて!! どれだけ非常識なんですかっ!! アナタは!! うう、本体にひびが・・・」

山田から手を離し、ひび割れた部分を指でなぞる青葉。

「うーん」

首をかしげ、カメラと青葉をボーツと見る山田。

「司令? あの、大丈夫ですか?」

様子がおかしい山田に青葉は不安そうに声をかける。

「青葉」

「はい?」

「俺って生きてるよな?」

「あらあら、大淀さんが悪酔いするなんて珍しいわね」

するとカウンターから一人の女性が姿を表した。黒髪のポニーテールが印象的なその女性は割烹着姿をしており、両手でおぼんを持ちながら微笑んでいる。

「鳳翔さん・・・すみません、騒がしくしちゃって」

「気にしないで。これ、作ってみたんだけど、よかつたら・・・」

彼女、鳳翔はおぼんの上にある皿を明石の前に静かに置いた。

「わあ、肉じゃがだあ!!うれしい!!あーん」

明石はじゃがいも一つを摘まむと口の中に放り投げた。

「おいひい、おいひいれふよ。鳳翔さん!!」

「そう、よかった。でもダメよ、食べるならちゃんとお箸を使って食べないと。」

頬を押さえながら幸せそうに咀嚼する明石に鳳翔は優しく注意する。

「はあーい」

明石は右手を上げ、元気よく返事をした。

鎮守府での基本的な食事は間宮が作ることになっているが夕食が終わった後は鳳翔が厨房に入る。一時期は間宮と共に食事を作っていたが、とある事情により厨房に立つ時間が限られてしまった。それでも元々料理が趣味の鳳翔は限られた時間の中でも料理を作りたいたいという思いがあった。ならばと、夕食後から数時間の間だけ、酒や軽い食事を出す居酒屋のような事をしてみたらどうかと間宮から提案を受け、酒と軽い食事が楽しめる、なんちゃって居酒屋を初めるようになり現在に至る。

ドコオオオオオオオオ!!

パライイイイイイイ!!

ドタドタドタドタ!!

「こんな時間に随分元気な事……」

酔っ払いの大淀の前にも皿を置いた途端、大きな音になり、鳳翔はふと天井を見上げた。

「ああ、大丈夫ですよ、鳳翔さん。提督がまた何かやってるんですよ、ほっときましょう」

いつもの事だと音におかまいなしに鳳翔から貰った箸で肉じやが

を食べる明石。

「ふふっ」

ガタツ!!

「提督?」

明石の提督という言葉に反応した大淀は勢いよく立ち上がると鳳翔の方を向いて言った。

「縛るなら私を縛ってくださいっ!!」

大淀の叫びに明石、鳳翔、その他のこの場に数人いる艦娘達が一斉に彼女を見た。全員がうわあとした顔をする中、鳳翔だけは違った。

(彼女をここまで骨抜きにするとは……私も一度、お話をしてみたくなったわ。山田孝夫さん……)

――――。

「とりあえず大淀達の所に行って助けてもらおう」

「そうですね、この時間ならおそらく食堂にいるはずですよ」

「食堂？という事は地下か。」

あれからお互いの顔をつねりあった二人は赤く腫れた顔で食堂に向かう事にした。地下に降りる階段は今いる位置からそんなに遠くはなかった。

「よし、すぐに地下へ……」

「提督、あれ……」

青葉は人差し指を突きだし、震えながら何かを指差した。山田はチラリと指差された方向を見る。そこには先ほどとは別人のような金剛がいた。バーサーカーのオーラも無く、血走っていた目も無くなり、見た感じ普通の女性に戻っている。そしてニコニコと手を振りながらこちらに近づいてくる。

「テイトクロー!!もう大丈夫ネ!!さっきはゴメンナサイ!!」

その様子を見た青葉は微かに震えながら山田に言った。

「司令、アレは……アレは何ですかっ!？」

「……………やっべえぞ」

コロ○キのナ○ルのような声をだした山田が見たものは……

右腕にチェンソーを持ちながら、口角を極限まで上げた金剛だった。

「奴めっ!!ただのバーサーカーから理性を持つバーサーカーへとジョブチェンジしやがった……」

「大丈夫よ？・テイトクウ。大丈夫、ダイジョウブ、だいじょうぶ、だあいじょうぶう」

「ありやダメだ!!青葉走れっ!!」

山田は青葉の腕を強引に掴み、地下へと行ける階段に一直線に向かうとする。

ヒュウオオオオ!!ダンツ!!

山田の行動の行動を先読みしたのか凄まじい跳躍力で金剛は山田達の前に立ち塞がった。

「どこにいくんですか？・テイトクのお部屋はそこではないでしょ？」

金剛はチェーンソーのスイッチをつけ、青葉に向けた。

ブオブオブオブオ!!ブオン!!ブオン!!ブオン!!

「ひっひっ!!」

「そして、その隣の生き物はアナタにはいらなない……」

ブオーンツ!!

「死ねえええええ!!……」

金剛は青葉に向かってチェーンソーを突き刺そうと真っ直ぐに突っ込んで来る。

「青葉っ!!」

青葉の腕を離し、山田は咄嗟に青葉の前に移動し両手を広げて彼女を守る姿勢になった。山田は何故自分がこんな行動をとったのかわからなかった。

死ぬかもしれん。だがこいつが殺されるよりはマシだ。

その感情だけが山田を動かした。

「司令っ!!ダメですっ!!」

チエーンソーの歯が山田に向けて近づいてゆく。

「くそっ!!」

もうダメだと山田は目を閉じた。

――――

「……あれ?」

暫くして痛みが無いことが不思議に思った山田はゆっくりと目を開く。

すると金剛のチェーンソーが山田の体に突き刺さるか刺さらな
いかの所で止まっていた。山田は暫くチェーンソーを眺め、ゆっくり
と金剛の顔を見た。

「うえっ!!」

化け物のように顔を変えた金剛に山田は驚き、思わず声が出た。が
彼女はまったく反応がない、というか動かない。まるで時間でも止
まってしまったかのように。

「なっ、なんだ?おい青葉……」

ふと後ろの青葉を見たが、青葉も同じように止まっていた。そーつ
と頬に触れてみるが普通に柔らかい。他にも試してみようと青葉の
鼻に人差し指と中指を突っ込もうとした。

「あいてっ!!」

すると山田の頭に何かが落ちてきた。

カラカラカラカラ。

頭に当たった物体が床に落ちる。

「どこから落ちてきたんだ？」

山田は頭をさすりながら天井を見上げる。しかしそこには何もなかった。一面中真つ白な天井しかなく、何かが落ちるといふ事はないえなかった。とりあけず何が落ちてきたのかを確認する為、その物体を拾い、確かめてみる。それは手のひら程のサイズでボタンが5つあるリモコンだった。赤い線で書かれた○、水色の線で書かれた×、ピンク色の線で書かれた□、緑色の線で書かれた△、そしてスタートと書かれたボタンがある。

「まるでプレ○テのリモコンだな……」

((((△)))

すると突然、山田の頭に三角のマークが浮かんだ。電気が走るような感覚が山田の頭の中に鳴り響く。ボタンを押せと言うかのように。が、とりあえずはチェーンソーから青葉を遠ざける言葉が先決だと山田は判断した。青葉の体をずらそうと青葉に触れた瞬間。

「……メ○ブ○アアアアア!!」

止まっていたはずの金剛が動きだし、青葉に突っ込んでいく。

「司令ー!! ってあれえ?なんでえええええつ!?!」

目の前に立って壁になってくれた山田が消え、金剛と鉢合わせの状態になった青葉は悲鳴(?)を上げた。現在、山田は青葉の左側に立っており、金剛のチェーンソーにはかすりもしない位置にいる。

しまったと山田は思った。止まっている時間がいつまでなのかわかればもう少しやりようはあっただろうが、悔やんでいる時間はない。そんな山田の頭に再びマークが浮かんだ。

(((((△))))))

(もうどうにでもなれっ!!)

絶望的なこの状況を打開するにはもうこれしかない。山田は△のボタンを押した。

カチ。

「うおっ!!」

すると山田の体が突然動きだし、金剛の右手に鋭い蹴りを喰らわせた。

「ぎっ!!」

あまりの痛さに金剛はチェーンソーを離し、床にうずくまった。持ち主を失ったチェーンソーは空中に舞った後に地面に勢いよく突き刺さった。

ブオブオブオ、ブオ、ブオ、・・・・・・・・。。。

「青葉、大丈夫か？」

「はあ・・・・・・・・」

青葉は顔を赤くしながら山田を見つめる。

「おい!!」

「えっ? あ・・・はい!! 大丈夫です。それよりも司令、今の動きは・・・

？」

「ノリだ」

「ノリってそんな・・・」

「んなもんでもいいわ。遠回りになるけどあっちの階段を使って二階にいくぞ」

山田は金剛がいる逆側の階段を指差した。

この鎮守府には入り口から見て、南側と北側にそれぞれ階段がある。地下への階段は現在、金剛に近い南側の階段の一ヶ所しかない。その為、北側の階段を一旦上がり、反対側の階段に向かい、下りていけば地下に行けるのではないかと山田は考えた。その事を青葉もわかったのか力強く何度も頷いた。

「先に行けっ!!」

青葉は北の階段に走っていった。それに対し、山田は金剛が立ち上がるのを待っていた。何故そんな事をするのか、それは山田自身、試したい事があったからだ。

「あ、あはは。やっとワタシと一つになる……時が……」

「……………」

「きたネエエエエエ!!」

艦娘ならではの力をフルに使い、人間の目ではとても追えない程のスピードで金剛は山田に襲いかかる。なのに山田は逃げる素振り一つしない。むしろニヤリと笑いながら金剛を見続けている。金剛の手が山田に届こうとする瞬間、山田の頭にマークが浮かぶ。

((((□)))

カチツ。

山田は右手に握られたリモコンの□のボタンを押した。

すると金剛の動きを上回る速さで腰を落とし、接触を回避。その刹那、再び山田の頭にマークが浮かんだ。

(((((O))))))

カチツ。

山田は下から金剛の顎におもいつきりアツパーを炸裂させた。

ドゴオ!!

「—————!!」

不意をつかれた金剛は息を荒げながら、後ずさる。彼女の目は元の血走った目に戻っていた。

「ギヤアアアアアア!!」

ただのバーサーカーに戻った金剛は咆哮を上げ、敵意を山田に向けてきた。自分に攻撃を加える敵として認識したのだ。いわゆる暴走状態という奴である。

「今のでよくわかった。」

山田は地面に突き刺さったチエーンソーを引き抜き、金剛を見つめる。

「俺がこれからどうすればいいか。何をすべきか……」

「オオオオオオオオオオ!!」

「ここで終わりにしようぜ、タ○ラント」

金剛と山田の戦いが今、始まる。

「かかってこいやあああああ!!」

「アアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

《New》

山田はQTE（クイックタイムイベント）が使えるようになった。

44、愛ゆえに（中2）

「あぁっ!!あそこで謙介が裸でU○A踊ってるぅ!!」

金剛の後ろを指差しながら、声を上げる山田。

「……………」

しかし金剛は反応しない。真っ直ぐに山田を見つめるのみである。だが、山田は金剛に目もくれず指差しながら固まっている。

「うわぁ……………すっげえ。誰特だ?あれ?」

「……………」

「いや、いや、いや、いや……………」

「……………」

「キレがすぎえな……………うおっ!!マジか……………そんな……………」

「……………」

金剛は後ろを確認する為、ゆっくり首を動かす。

(((((○))))))

「んなもんいるわけねえだろ!!ヴァーカ!!」

金剛が後ろを向いたその瞬間、山田は力いっぱいチェーンソーを投げた。金剛の頭をめがけて……………

ガンツ!!

「ギャツ!!」

いきなりの衝撃に金剛は前のめりに倒れた。それを確認すると山田は青葉が逃げた方向に走っていった。そして階段にたどり着くと後ろを確認する。誰もいない。このまま更に差を広げようと勢いよく一段目に足を置くと同時に……

((((△)))

山田は右に飛んだ!!

ボゴオ!!

山田がいたところには先ほどのチェーンソーが突き刺さっていた。よほどの衝撃だったのか、土煙が舞っている。チェーンソーをかわした山田は壁に体をぶつけるかたちになった。

「いってえ……」

山田は痛みを耐えながら素早く階段を登り始める。真ん中まで登った時、山田の右足が何かに掴まれた。土煙が晴れて、視界がクリアになっていく。そこには山田の右足を両手で掴む金剛がいた。

((((×)))

(連打!!)

即座にかがみ、残った左足で金剛の顔面を蹴り続ける。

ガン、ガン、ガン、ガン、ガン!!

「このっ!!早くっ!!落ちろっ!!」

「ガッ!!グッ!!ゴアッ!!」

(※蹴られているのは艦隊これくしょんに出てくる金剛です。ゾンビではありません。)

「司令っ!!」

山田は呼ばれた方向を見る。そこには逃げたはずの青葉がいた。

「お前っ!!何でここに・・・」

「これをつ!!」

青葉から何かが山田に投げられた。

「対艦娘用超強力スタンガンです!!」

「ナイスウ!!」

((((□))))

山田はそれを取けると空かさず金剛の頭に近づけ、スイッチを押した。

ビリビリビリビリ!!

「ガアアアア!!」

(※スタンガンを喰らっているのは艦隊これくしょんに出てくる金剛という女の人です。ゾンビではありません。)

「ぎゃああああ!!」

自分の足が掴まれているのを忘れていた山田にも、もれなくスタンガンの電撃が襲う。

「そんなベタな……」

ふと青葉の口からそんな言葉が出た。

スタンガンを受け、黒こげになった金剛と山田はその場で動かない。青葉はとりあえず山田の体を二階の廊下まで運ぶ事にした。

「よいしょ、よいしょつと。もしもし、司令官、大丈夫ですか?」

白目を向いた山田の体をゆさゆさと揺らす青葉。

「起きてくださいよお。ねえ、ねえ、ねえ」

ポンポン。

山田の頬を軽く叩くが反応が無い。

パン、パン!!

今度は少し強めに叩く。が反応が無い。

「司令のほっぺ……いい音ですね」

ボソリと一言呟いた青葉は目を閉じ、深く深呼吸をした。そして数秒後、目をカツと広げ山田の頬をリズムカルに叩き始めた。

パン、パツ、パン。

パツ、パン、パン。
パン、パン。

ポン、パン、ポン、パン、ポツ、パツ、ポツ、パツ!!
パツ、ポン、ポツ、パツ、パン、パン、ポ、パン!!

(((((○))))))

ブオン、ゴスツ!!

途中からノリノリになった青葉の顔面に山田の左拳が直撃した。

「俺の頬は太○の達人か？あん？1000円で2プレイですか？このやろう。」

「よかった、気がついて・・・さあ、今のうちに地下へ」

「コイツきいてねえ。二つの意味で」

青葉の反応に驚愕しつつ、山田は下の階段を覗き込む。そこには黒こげの状態の金剛がうつ伏せになって倒れていた。痺れている為か、腕や足が小刻みにピクピクと動いている。命に別状はないのだろう。

「.....」

それを見た山田はゆっくりと階段を下り始め、一階に戻っていく。

「あつ、危ないですよ司令」

青葉の声に山田は反応しない。金剛の所まで一步、また一步と近づいてゆく。

カン、カン、カン、カン。

そして倒れている金剛と同じ位置までたどり着いた。

「司令……?」

山田は一瞬立ち止まったが、慌てることも警戒すらせずに金剛の横を通りすぎて行く。しばらく歩き、青葉の視界から山田の姿が消えてしまった。

(ど、どうしたのでしょうか、司令官。まあ、もともと頭は残念な方ですが……はっ、まさか先程のスタンガンで頭が完全にパーに?そんな、青葉はどうしたら……)

追いかけてようと階段を一つ降りようとした青葉。その時、山田が戻ってきた。その顔は実に晴れやかな顔をしている。山田は青葉に向けて手を振り始めた。その姿を見た青葉も手を振り返した。

(そうか、司令官は下の安全を確認しに行ってくれたんですね?でもわざわざ近づかなくても……)

ブオン!!ブオン、ブオン、ブオン、ブブブブブブ・

「ん?」

下の方から何やらエンジンのような音が聞こえてくる。

「へ?」

その音の正体を青葉すぐにわかった。なぜなら・

「ゾンビはなあっ!!頭を潰さねえとなあ!!駄目なんだよおおおお!!あひやあああああっ!!」

正気を失った上官が右腕に持つチェーンソーを高らかに上げ、倒れている金剛の頭を潰そうとしたからである。

先程のスタンガンが山田の脳細胞をいい具合に弱らせ、判断力を奪ってしまったのだろう。なんてこった。パンナコッタ。

「えええええっ?!ちよ・司令!!嘘でしょ?待つて!!待つて!!待つて!!待つて!!」

「来たかあ?兄弟い?うひひひひ・ヒヤア→→もう我慢できねえ!!」

正気を失った山田の顔はそれはそれは輝いていたと言う・

45、愛ゆえに（下）

「落ち、落ちついてください!! 金剛さんはゾンビではありませんよ、確かに先程までの行動は正気とは思えませんでしたが!!」

ブオン!!ブオン!!ブオオオオ!!

山田が金剛にチェーンソーを振り下ろそうとするのを止めさせようと、階段を一気にジャンプして降り、山田の背後に近づいて後ろから羽交い締めになっている。

「H A ☆ N A ☆ S E !! 俺にはわかる!! バ○オ4をやった俺にはわかる!! コイツは寝ながら恐ろしい跳躍力で一気に近づいてくるモンスターだ!! ゴー○トバスターアアアア!!」

ブオン!!ブオオオオ!!ブオオオオ!!

「わからない!! 私には何を言っているか!! もうわから・・・えっ!? 嘘!! 力強っ!! 私、結構力あるはずなのにつ!!」

山田は青葉を物ともせず、金剛の頭に少しずつつチェーンソーを近づけていく。この小説が違う意味のR18指定になるのも時間の問題だ。

「仕方ないですね・・・」

パツ

何を思ったのか、青葉は山田から体を離してしまった。押さえつける力が無くなり、山田はチェーンソーを高く掲げ、今度こそと言わんばかりに金剛目掛け振り下ろした。

「光になれええええええ!!」

ブオオオオン!!

チェーンソーの刃が金剛の頭に触れるその刹那……

「そおおおおおおおいつ!!」

ガツ!!

「うわらべっ!!」

ドゴオ!!

山田は一瞬で壁に叩きつけられた。

それではスローカメラでもう一度。

山田から少し距離を離れた青葉は両足を肩幅に広げた。そして左足を軸にして、体の重心を左から右に動かす。と同時に右足を上に上げ、踵を山田の左頬にぶちこんだ。そう、すなわち横蹴りというものである。

「ふう、横蹴りなんて大本営以来ですよ。でもなんかスッキリしました。ほら、司令起きてください」

仮にも自分の上官を蹴っただけで何事もなく接してくる彼女は普通なのか、ナチュラルサイコパスなのかもう作者にもわかりはしない。

「あ、ああ。青葉か、あれ?なにやってたんだ、俺?」

「覚えてないのですか？ 金剛さんにスタンガンを当てて・・・」

「そうだ、そうだ。思い出した、それで俺もくらって・・・気絶してた」と

「そうですよ、もうすっかりしてくださいよお。あはははは」

もし、もしもこの場に第三者がいて、この状況を見たらきつところ
思うだろう。

「お前、上官に横蹴り喰らわせて、スッキリしてたやんけ」と

山田は回りを見渡してみる。違和感のある笑みを浮かべる青葉、う
つ伏せに倒れている黒こげの金剛、なぜか天井に突き刺さっている
チェーンソー。

「・・・・・・・・」

左頬に残る尋常じゃないほどの痛み。

「司令はここで待っていてください。私は地下に行つて、大淀さんか、
明石さんを・・・」

「待てい」

「な、なんですか？ 早く行かないと金剛さんが・・・」

「このよ、左の頬の痛みはよ、なん……」

シーン。

山田の発した「この」の時点で青葉は地下への階段へと向きを変え、「痛み」の所で颯爽と走り去っていった。青葉が消えた為、山田の問いかけは空中で消えてしまった。山田は突き刺さっているチエーンソーを見つめながら、左頬に手を添える。

「まいったな。卯月、川内に続いて浜辺に埋める奴が一人増えちまつたわ」

ガタガタガタガタ!!

(ちよつと、姉さん。お、落ち着いて)

山田がため息混じりについた言葉の後、天井から物音が鳴ったが、山田は気づかなかつた。相当、疲弊しているのかあまり覇気が感じられない。

(私達の役目は提督を影から見守る事、これは私達にしか出来ない任務なの。だから……ああ、もう)

「はあ、……ん?」

ふと視線を落とした山田は何かを感じとり、倒れている金剛に視線を移す。すると金剛の体から何かが飛び出してきた。

「えっ? 何だアレ? 虫?」

それはゴキブリよりも大きくカブトムシより小さな虫のような生き物だった。見た目は黒く、一瞬見ただけなら普通の虫だと思うだろう。だが、この生き物は何かがおかしい。ゴキブリなら移動するスピードは速い。しかしゴキブリよりはるかに大きい。カブトムシは動きは遅いがあんなに足は長くはない。おかしい、あんな虫見たことがない。山田はそう思った。

「ギギイ」

その虫は音を発した。しかしコオロギやキリギリスのような音色に近い音ではない。明らかに声を出している。異様だ。ただの虫があんな声を出すなんてあり得ない。

「ギギ・ギイイイ!!」

「!?」

虫は素早く山田の方に向きを変えた。その瞬間、虫の体から巨大な目玉と複数の触手が生え、虫とは思えない早さで山田に遅いかかつてきた。しかし山田には秘策があった。そう、それはリモコンだ。(前の話から探してみてね)QTEが使える不思議なリモコンで山田はタイルント(金剛)と死闘を繰り広げてきた。きっとこの状況もなんとかなる……そう思ってた時期もありました。(山田)

「ギイイイイイ!!」

「はっ、QTEさえあればこんな虫ケラ……」

「ギイイイイイ!!」

「あれ?」

明らかな危機にも関わらず山田の頭にマークが浮かばない。それもそのはず、前の攻防でスタンガンをくらった後、リモコンは二階に落としたままだったのだから。

「ギイイイイイ!!」

「嘘? マジで?」

ポケットに何度も何度も手を入れる山田。

「ギイイイイイ!!」

「いや、あの・・・」

「ギイイイイイ!!」

虫の触手が一つにまとまりドリルのような形状になった。

「そ、その触手イカしてますね」

「ギイイイイイ!!」

キュイイイイイツ!!

「さつき調子乗ってすみませんでしたああああ!!!」

触手が山田の頭に突き刺さろうとした時。

カパア、シユ!!グサツ!!

「ギツ、ギイイイ!!」

何処からか何かが投げられ、それが虫の体に刺さり虫の動きを封じた。

山田は両手で顔を守りながら、いつくるかわからない痛みに耐えるべく強ばっていた。

「あれ?」

しばらくしても何にも起こらない為、恐る恐る目を開く。そこにはクナイで体の中心を貫かれている虫がギチギチと動いていた。よく観察しようと全体を確認しようとした時瞬間、貫かれていた筈の虫が消えていた。まばたきを一回したと同時に。

「.....」

「司令、お待たせしました。大淀さんは再起不能な様子だったので、明石さんを連れてき.....つてあれ?どうしたんです?顎を取られた猪木のような顔をして」

「アハハハ!!青ちゃん例えがうまい。山田くうーん場布団持ってきてえー。なんちやつて」

「あらら、やっぱり明石さんも駄目っほいですね」

「なんだ、このやろう。元気なのかこのやろう。ハッ、ダンカンばかりやろう」(明石しゃくれ顔)

「・・・・・・・・・・」

先程逃げた青葉が顔が真っ赤に染まった明石を連れて帰ってきた。到底役には立たないであろう助っ人を。

「ねえ、提督う。元気なんですかっておいおい」

「・・・・・・・・・・」

「ひっく、不機嫌な顔してえーきつもちわるうー、にあってませんよお？」

「・・・・・・・・・・」

「まったく毎度毎度ワケわからない事ばかりして、発情期の猿ですか？あなたは？うり、うり」

一点を見つめながら座っている山田に茶々をいれる明石。はたから見ると上司と部下の微笑ましい光景で・・

「にやあああああああああ!!!!」

山田の渾身の右ストレートが明石の顔面をとらえた。

「うぼあああああああああ
!!!!」

物凄い衝撃でぶっ飛ぶ明石。

「えっ?」

何が起きたのかわからない青葉

ドシャッと明石が頭から地面に落ちた。

それを確認すると山田はどこかに歩き始めた。怒涛の展開に口をポカんと開けていた青葉もふと我に返り、なるべく刺激しないように、後ろから山田に話しかけた。

「あ、あの、司令・・・その・・・どこに・・・」

「便所!!」

山田は振り向きもせず二階へ上がっていった。

―田尻鎮守府・浜辺

「や、やばいピヨン……ジュース飲み過ぎたピヨン。ト、トイレ、漏れちゃ……」

(にやあああああああああ!!!!)

「ひいっ……っ!!」

ポタ、ポタポタ。

卯月が救出さ(思い出さ)れるまで残り10時間23分45秒

46. さらば川内

「あー、もう嫌だ。こんな肉体的にも精神的にも疲れたのは、高校の入学試験以来だわ」

思わず口から弱音を吐く。階段を上がる山田は老人のように背中を曲げ、気だるそうにしている。自殺でもするのではないかというほどに覇気がない。トラブル&イベント続きで山田の精神はズタバロボンボンなのだ。

「つーか、なんで襲われてたんだっけ？えーつと・・・ああ、五月雨いじめたあのピンクを海に還して・・・その帰りに金剛に襲われて・・・」

二階に上がり、山田は立ち止まった。

「聞いてんのかよ？鳥海!!」

「聞いてます、聞いてますよ、姉さん・・・」

誰かの話し声が聞こえる。なにやら賑やかだ。

「アイツはよお、そりゃあ、もうよお!!」

「はい、はい」

聞いた感じだと、酔っ払っているのだろう。怒鳴るとまではいかないが、結構な大声だ。酒が飲める所でもあるのか？というか酒飲んでいいのか？やっぱりこれは夢なんかじゃないのかと思えてきた山田は、階段に座る。

もうこれ以上、新キャラと交流したくない。面倒くさい。そう考え

た。そんな山田とは裏腹に会話は続く。

「なんつーか、ずっと見ても飽きねえんだよなあ!! こう……母性本能をくすぐられるみたいなの?」

「へえー」

なんだ? ここってペットでもいんのか? 母性本能をくすぐる? 子犬か? …いいよな、子犬。足短くて、ピョンピョン跳ねてよ。モフモフだし、一日中見ても飽きねえよな。

「飯を食う時もよお!! 一心不乱にがつついてよお!! 口回りの汚れも気にも止めねえんだよ!!」

「そうですか」

食べ盛りだもんなあ。そりゃあ、ガツガツ食うわ。体もちっちゃいし。食うのにも一生懸命だろうて。

「それがもうっ!! 可愛くて可愛くて、かぁー!!」

「姉さん、ヨダレ垂れています」

わかるわあ。俺も柴犬飼いたかったけど、高えんだよな。あと躰とかトイレの世話とか予防接種とかさ。飼いたい、欲しいとは思うんだけど、なかなか……

「でもよ、照れてんのかわかんねえけど、目を合わせてくんねえんだよなあー」

「お願いですから静かにしてください、また怒られますよ?」

でも生き物を飼うって事は、最期まで責任を持って育てるといふ事

だ。自分の息子、娘のように深い愛情を持ち続けられるという自信があつてこそ生き物飼う資格があるんだ。もう少し稼いで、生活に余裕と暇が出てきたら、検討してみるかなあ。

他人の会話を聞いて、勝手に解釈し始めた山田は少しテンションが上がってきた。今までの会話から見て、おそらくこの鎮守府にはペットがいるのだろう。子犬かどうかわからないが動物には興味がある。というか動物と触れ合つて癒されたい、いやマジで、マジでと山田は考えた。

「だからよお、今度また機会があつたらまた飯持つてついでにやろうと思つてよ!!」て・「提督」

「ヒョッ!!」

ペットについてももう少し情報を得ようと聞き耳を立てていた山田は突然後ろから声をかけられた。反射的に後ろを振り向くとそこには

「そ、その・・・さつきは大丈夫だった?」

川内が気まずそうに立っていた。

山田の頭に彼女との思い出がフラッシュバックしていく

ー「私、わかるよ。トイレの後・・・夜戦行くでしょ?」

——「よーしっ！トイレに向かって全速全身っ！！進めー！提督号っ！！」

——「終わった？」

「ああ、終わった。すべてが。」

—————。

「さっきと言うと？あれか？虫みたいな奴・・・」

「そつ、そう。あの時提督と接触する前にクナイを投げたのは私で・・・」

「そうか」

「それでその後、提督が階段に座り込んでブツブツ話してたから・・・大丈夫かなあ？と思って」

川内は山田の顔を見ず、下ばかりを見ている。腕を後ろに組んでそわそわと落ち着かない様子だ。

「大丈夫だ、問題ない」

「・・・よかった」

山田の反応を見て川内はひとまず、ホツとした。そして何かを決心したかのように言葉を続けた。

「そつ、それでね提督・・・あの・・・その・・・ごめんなさいっ！！」

突然、頭を下げた川内に山田は一瞬、身構えた。

「あの時はなんかテンションが上がってさ、提督の事を考えないで行動しちゃって・・・それでたくさん迷惑をかけちゃったから」

反省している様子で、たどたどしく話す彼女を見ながら山田は思い出していた。

おんぶがてら首をしめられた。

下半身をハサミギロチンで圧迫され続けられた。

押しつけられた胸。

全てを捨てて女子トイレに特効した。

その時の吹雪のきよとんとした顔

天龍の恥ずかしそうな顔。そして・・・

龍田のデカイゴキブリを見つけたような、決して人に向けてはいけないような目。

「提督？」

山田は大きく深呼吸をして、川内に手を差し出した。それが山田が出した答えだった。

許そう、最初は絶対に砂浜に埋めてやろうと思っていたが、その後の出来事がエグすぎてもういいかなくて。さっきも襲われそうな時、助けてくれたらしいな。もう水に流そう、憎しみは争いを生むだけだつてわかれ☆

山田に手を差し出された川内は山田の顔をチラツツと見た。するとそこには、怒りも憎しみもない、ただただ真っ直ぐ川内を見つめる優しい瞳がそこにあつた。

「っ!!」

それを見た川内は両手で山田の手を握り、キラキラした目で山田を見つめ返した。

(なんだよ、よくみりや可愛い顔してんじやねえか)

祝え、たびたび憎しみあつてきた二人(山田のみ)が今、お互いを尊重し、友好を確かめあっている。辛く長い戦いも一旦ここで幕を閉じることとなった。いやあ、よかつたな川内。許してもらえて。これで山田と川内の仲睦まじいお話が書けるってもんよ。よし、久々にアンケートでもとってみるかな。これで少しはネタが増え・

ポロツ、カラカラカラ。

川内のポケットから何かが落ち、階段を転がり落ちた。山田は落ちたそれを目で追い、なにが落ちたのか確認した。

「……」

山田はそれに見覚えがあった。それはボタンが4つある黒いスイッチだった。タイラント（金剛）を倒すために使った道具で山田の必須アイテムだった物だ。だが落ちた衝撃で（○）のボタンが取れて床をくるくる回っている。おそらく壊れただろう。

「えーっと、あれって提督のだよな？その…落としたままだったから返そうと思ってポケットに入れといたんだけど……」

「川内」

「はっ、はっ！」

「オマエノチハナニイロダ？」

47、償い

「ひいっ」

川内は身の危険を感じて山田から距離をとった。

「仲良くしようと思った途端、これですよ。へへっ」

一歩、川内に近づく。

「ごっ、ごめんって提督!!わざとじゃないの・私だって提督と仲直りして、またお話したいと思ってたの、それから・・・」

「残りの俺の力をすべて使って終わらせてやる・・・」

また一歩、近づく山田。

「球磨型の人達みたいに一緒にご飯食べたたり」

「俺の拳が」

「明石さんみたいにじゃれあったり」

「真っ赤に燃える」

「さ、五月雨ちゃんのように本音で話をしたり」

川内の声が震える。瞳には涙も浮かべ、必死に山田に語りかける。

「勝利を掴めと」

「金剛さんのように追い駆けっこもしたいよお!!」

「いや、それだけはちやう」

神の指的な技を出そうとしていた山田も流石に最後の言葉は聞き捨てならなかったようだ。

「え?」

「ちやう、ちやう。あれは追い駆けっこじゃない。あれは一方的な人間狩りだ、人間狩り。出荷ギリギリまで逃げる豚の気持ちも味わえたわ」

「.....」

「それならお前も今度、金剛に追いかけてもらえ、まあ生きてるかどうかわからんがな!!あーはっはっはっは!!」

「.....ふっ、ははは」

山田の小粋なブラックジョークと豪快な笑い声につられ、おもわず川内にも笑みがこぼれた。もう先ほどまでのピリピリとした空気はない。穏やかな空気の中、山田は川内に近づき頭を撫でる。

「別にもう怒ってねえよ。わざとじゃない事はなんとなくわかったしよ。軽いジョークだよ、ジョーク」

その言葉をきいて、一瞬驚いた顔をした川内だが頬を膨らませ、山田の胸を叩いた。

「もうっ!!本気だと思っただじゃん・・・バカ」

「はんっ、バカの方が人生楽しいんだよ」

「はっはっはっはっはっはっはっ!!」

(あんな顔されちゃ、流石に追い討ちはできんて)

二人の声が鎮守府内に響き渡る。二人でひとしきり笑った後、川内が山田に手を出してきた。

「なんだよ、もう握手はしたろ?」

「いいでしょ?私がしたいんだもん!!」

駄々っ子のように手を差し出す川内にやれやれと首を動かしながら山田も握手するために手を差しのべる。

「姉さんっ!!危ない!!」

互いの手が触れ合うその時、ビュンと誰かが二人の間に入ってきた。ホームに電車が来たような風が山田を襲う。思わず差し出した反対の腕で顔にかざした。

「提督」

川内とは違う落ち着きのある静かな声が山田を呼ぶ。かざした手をゆつくりと視界から離していく。そこには川内と同じ格好をした長髪の女の子が手を広げ、立っていた。

「少し落ち着いて下さい、姉さんは敵ではありません」

「じ、神通」

ふにっ。

川内にそう呼ばれた彼女は、凜とした顔で山田と対峙している。鎮守府内での彼女は穏和で他の艦とも仲良くしており、たとえ卯月にイタズラをされても笑顔でいる菩薩のような存在だった。姉に振り回されたり、妹にパシられたりと苦労人な彼女だが、許せない事がある。一つは、大好物のイチゴ大福を盗られる事、そして自分の姉妹が危害を加えられたり、馬鹿にされたりする事である。

「確かに姉さんは落ち着きがなくて、少し危ないところもありますが、明るくて優しい人なんです」

ふにっ。

「神通・・・」

「姉さんは提督と・・・」

神通は知っていた。山田に対する姉の思いを。

—————。

「姉さん、おそば冷めちやいますよ?」

「うん・・・」

山田の方を見ながらそばを啜る川内。

—————。

「皆つさああああんっ!!提督のすっ・・・ごく格好いい写真っ!!見たくありません・・・」

「だあああああああああつ!!」

「・・・はあ」

「姉さん・・・」

—————。

「提督って・・・毛深いですね。」

パタン。

「・・・っ!!」

「み、見てしまいました、と、殿方の・・・」

「……………」。
「まいったな。卯月、川内に続いて浜辺に埋める奴が一人増えちまつたわ」

ガタガタガタガタ!!

「ちよつと、姉さん。お、落ち着いて」

「き、嫌われてる、私、提督に嫌われてる。うう」

「姉さん……」

「……………」。

姉の寂しそうな表情を思い浮かべ、神通は言葉を紡ぐ。

「仲良くしたかったただけなんですっ!!最初の印象は良くなかったかもしれませんが、姉さんは……」

「神通!!」

神通の背中からひととき大きな声が響く。それ以上言うな。彼女はそう言っているのかもしれない。今まで聞いた事がない姉の声に戸惑いながらも振り向く。すると川内が神通を指さして、アワアワと口をを動かしている。

「？」

姉のリアクションを不思議そうに眺め、視線を山田に戻す。

「……」

山田はとても真面目な顔をしながらピクリとも動かない。

ゴクリと神通は喉を動かす。

(これが提督、山田孝夫……なんてプレッシャー。人間ではない私たちと同じくらいの何かを感じる)

山田と初めて対面した神通に汗が流れる。流れ落ちた汗は地面に落ちなかった。違和感を感じ、自分の汗が落ちた所を見るとそこは山田の手だった。なぜ提督の腕に自分の汗が落ちるのかと疑問を持った瞬間、神通の顔がみると赤くなっている。

むにっ。

「わっ、わわわわわわわっ!!!!」

なぜ姉が、声を荒げ、あんな顔をしていたか神通はわかった。今まで感じたことがない違和感が神通に駆け巡る。

そう!!

山田は!!

神通の胸を!!

揉みしだいていたのだっ!!

「ぎやあああああああああ
!!!!!!」

山田は川内と握手する為に左手を出していた。そこに神通がスライドをする形で山田と川内の間に入って来た。山田の左手は神通の腕に当たり、いい感じに回転して、吸い込まれるように神通の胸に収まった。エイ○ヤの赤石がカー○の手に向かうが如く、ごく自然に動いた。ハハツ☆とんだラツキーボーイだぜえ!!

「だ、大丈夫?神・」

川内は座り込む神通に声をかけるが、神通は脇目もふらず泣いていた。姉を助ける為になれない事をしたあげく、上官にセクハラされる

という何とも可哀想である。

「ひっく!!ひっ!!ううっく!!ひっ!!」

「神通、泣かないで。ねえ?大丈夫だから・大丈夫」

「・・・」

その様子を眺める事しか出来ない山田の心には罪悪感という獣が体中を駆け抜る。山田だって普通の人間だ。多少暴力的だとしても人が本気で嫌がる事は絶対にしない男だ。彼は考えた、どうしたら自分は罪を償えるのか。どうしたら目の前の彼女と向き合う事が出来るのか。そして彼は見つけた。その方法を。

「・・・情けねえ」

「え?」

山田の言葉に川内は耳を疑った。

「情けねえと言ったんだよ」

その言葉に川内は流石に怒った。

「ふざけないですよ!!神通は提督に胸を触られて・傷ついて泣いてるんだよ!!」

「それが情けねえつつつてんだよ!!!」

川内の更に倍の大声を上げる山田に一瞬、静まりかえる。

「たかだか体を触られたくらいでピーピー泣きやがって!!もし俺が敵だったらどうするんだっ!!」

山田の言葉に神通は泣きながら顔を上げ、山田を見つめる。

「敵が深海棲艦だけと、誰が決めた!!自分達に襲いかかるすべてが敵だと思え!!お前は胸を触られただけで膝まずいて泣くだけか!!」

「つぐ、ひつく」

「お前の仲間が、姉妹が敵に襲われている時、お前は泣いているだけか？敵に胸を触られただけで泣きわめいているだけか？」

「ちがっ、うっ・・・」

「実際そうだろうか!!今、敵が現れてもどうせお前は泣いてるだけ。なんの役にもたたない腰抜けだ!!」

「ちがう・・・」

「仲間が、姉妹が泣き叫んで傷ついたとしてもお前は泣いてるだけなんだなっ!!」

「違うっ!!」

山田の声に呼応して神通が歯を食い縛りながら立ち上がる。

「神通……」

「ならどうすんだ？」

「私が……私が敵を倒します。そして皆を守ります」

さつきまで泣いていたとは思えない程の強い眼光を放つ神通の背にはこれ以上はない程のオーラがあった。戦艦や空母にも劣らないその気迫は常軌を逸していた。山田はそんな彼女を見ると少し笑みを浮かべた。

「なら……倒してもらおうじゃねえか。俺をよ」

「!?!」

山田は手を広げ、無防備な腹を神通に見せつけた。川内と神通は山田の行動に対する理解が出来なかった。

「提督が、敵って……」

「お前、話を聞いてなかったのか？言ったらろう、襲いかかるすべてが敵だと」

「すべてが……敵」

「軽い演習みたいなものだ。一撃で仕留めてみる」

「で、ですが・・・」

煮え切らない神通を見た山田は真顔でこう言った。

「川内、殺すぞ?」

ブチイイ!!

その一言で神通の精神のリミッターは無くなった。右腕に力のすべてを集中し、一直線に山田の腹部に向かう。自分に襲いかかるすべてが敵、彼女の頭はそれを繰り返した。

神通の拳が山田を貫こうとした時、拳が止まった。

ブオン!!

「はい、そこまです」

神通の力のこもった一撃は、小さな手のひらに阻まれ動きを止めていた。山田が止めたわけではない。なら川内？それも違う。

「提督はともかく川内ちゃんも、神通ちゃんも少し落ち着きなさいな」

割烹着を着た、黒髪はその女性は突然現れた。初めからそこにいたのではないのかと疑う程に。彼女は止めた。人など簡単に壊せるほどの力を人差し指のみで。

「ほ、鳳翔さん!!」

48、ごめんね、鳳翔

神通の拳から手を離し、そっと彼女の頭に手を乗せ軽く撫でる。

「神通ちゃんのおんな顔、初めてみたわ」

子供の意外な成長を見たかのように優しい声で話す鳳翔。

「鳳翔さん、これは・・・」

しかし、撫でられている神通の顔は何故か青ざめていてひどく怯えているように見えた。少し離れている川内のでさえも、歯をカタカタいわせて明らかに様子がおかしい。その表情は何か恐怖をしている顔だ。

「どうしてこんな状況になったかについては、後でお話を聞きましょう・・・」

神通の言葉を待たず、鳳翔はゆっくりと、そしてはつきりと声を出して言った。その言葉を聞いた、神通と川内の二人は背筋をピシッと伸ばし、新兵のように姿勢を正す。

「私は提督に用がありますので、二人は一旦、お部屋で待っててもらえますか？」

鳳翔は微笑んだ。一般の人が今の彼女の笑顔を見れば、とても可憐で魅力的な顔だと思うだろう。しかし彼女達は知っている。鳳翔の笑う薄目の中に隠される真の感情を。

「はいっ!!」

神通と川内は返事をすると同時にものすごい速さで階段をのぼっ

ていった。

先ほどまで賑やかだった場所が一気に静かになる。今、この場にいるのは山田と鳳翔の二人だけ。

「はあ・・・」

初めて彼を見た時は度肝を抜かれた。まさかあの場、皆の前で土下座をするなど誰が想像できようか。私は呆れた、いい年の男が土下座など情けないと。しかし彼がこの鎮守府の提督になってしまった以上、仕方がない。これから彼がどんな人間なのか見極めていこう。そう思った。

「……………」。

「大淀さん、明石さん応援を頼みたいのですがっ!!」

突然、青葉が勢いよく食堂に入ってきた。

「おー、青ちゃんだあ。どーしたのそんなマジメな顔おー→へへっ」

「明石さん、実は司令がですね・・・」

「はいっ!!元気ですっ!!」

明石の隣でビールのビンを枕代わりにして寝ていた大淀が青葉の「司令」という単語に反応に立ち上がった。食堂にいるすべての艦娘の視線を浴びながら彼女は、ただ、ただ輝いていた。それを気を留めず鳳翔は青葉に尋ねる。

「青葉さん、提督がどうしたのですか？」

「あ、はい。司令がカクカクシカジカで・・・」

青葉の言葉を聞いた鳳翔はニコニコ微笑みながら、小首を傾げる。

「ふざけているのですか？」

「ええ？いや、だからカクカクシカジカで・・・」

「なんですか？カクカクシカジカとは。意味がわかりません。しっかりと説明してください。でないと・・・」

鳳翔はピンポン玉を持つような軽いジェスチャーをしながら青葉に言った。

「挟りますよ？（目玉を）」

「っっ!!」

「あはっ!!青ちゃん、青ーい☆青だけにつ!!あひゃひゃひゃひゃ!!」

「はいっ!!メガネはおやつに入りますか?提督!!」

「……………」。

その後、青葉さんから提督と金剛の事を聞いた。彼女は比較的酔いが軽い明石ちゃんを連れて、提督の所に向かった。たぶんなんの役にもたたないと思うけど。それから少しした後、食器を片付けて食堂を出た私は、青葉さん達の様子を見に行く事に。

「あ、明石さーん、大丈夫ですよね?おーい」

「……………」(白目)

「これは一体、どんな状況ですか?」

壁はへこみ、床はあしあとやホコリで汚れ、しまいには天井には穴が空いている。あのチェーンソーはどこから持ってきたのだろう。そして地面に倒れこむ明石ちゃんと金剛。何故こんな状況になっているのか、改めて当人に聞くしかないだろう。

「あの、青葉さん」

「なんででしょう?」

「山田提督はどちらに？」

「ああ、トイレに行くとかで階段を・・・」

青葉は山田が上っていった階段を指差す。

「そう、ちよつといつてきますね」

鳳翔はそう言うのと足早に階段を上っていく。青葉はその背中を見つめ続け、しばらくたった後、こう言った。

「あの、この状況・・・どうすれば？」

「……………」

山田孝夫、ようやく彼と話す事が出来るのだ。言いたい事はたくさんある。聞きたい事もたくさんある。朝礼の件に金剛との件・・・そして日頃、温厚で優しい彼女が何故、あなたに危害を加えようとしていたのか。いけない、いろんな事が頭の中を駆け巡って少し混乱している。息を整えて、落ち着こう。

「はあ・・・」

「……………」

息を整え、背中側にいるであろう山田を意識しながらゆっくりと向きを変え、前で手を組みながら、軽く会釈をする。

「初めまして、私、鳳翔と申します」

「……………」

しかし山田からの反応は無く、静かに時間が過ぎるだけだった。

「？」

不振に思った鳳翔は頭をふと上げた。挨拶をしたというのに無反応とは失礼にも程がある。一発殴ってやろうか？そんな事を脳裏でスツと考えながらも次の言葉をかけるために声を出そうとした瞬間、彼女は目を疑った。それはその筈、目の前に誰もいなかったのだから。

「……………」

そう、彼女は。

「……………」

話したのだ。

「……ふっ」

念願の。

「あはははっ!!」

壁と。

「あんっのおっ!!クソガキイイイイ!!」

49、IT（イット）

「まさか鳳翔さんが来るなんて思わなかったなあ」

「そうですね。この時間帯ならまだ食堂の方にいるはずなのですけど」

川内と神通の二人は自分達の部屋に向かっていた。

「鳳翔さんも提督とお話したかったのかな？」

両腕を組み、首を傾げながら歩く川内。

「ふふ、案外そうかもしれないね」

姉の横を歩く神通は手で口を押さえて、笑った。

「どうだろうな。そんなフレンドリーな感じではなかったような気がするけど」

その後ろ側を歩く山田。

「それは提督が問題ばかり起こすからじゃない？」

「失礼な、俺はこう見えても一生懸命だぞ。真摯にお前らと向き合ってきた自信がある」

「うっそだあ!!なら今まで提督がやってきた事を思い出してみても!!」

ビシッと人差し指を山田に向けて言い放つ川内。

「・・・あー。うん、うん。ああー・・・問題しかないわ。まいったねえ、こりゃ」

「ほらあー、私の言った通りでしょ？」

「ガツデム!!」

山田と川内の他愛のない会話で穏やかなムードが流れるなか、その流れに違和感を持つ者がいた。

「どうしたの？神通？鯉みたいに口をパクパク開けてさ」

「息が出来ないのか？まさか、喘息持ち？大丈夫？少し休むか？」

「・・・ぜ・・・」

「ぜ？？」

「やっぱり喘息か。よし、壁に手をつけて楽な姿勢をとってゆっくり呼吸するんだ。大丈夫、大丈夫だから・・・」

川内に顔を覗きこまれ、山田に背中をさすられながらも神通は言葉を続けた。

「何故ここに提督がいるのですか？」

妹の問いに川内はあつけからんと答える。

「バカだなあ、神通。それは提督がこの鎮守府の提督だからだよ。ここにるのが当然じゃないの」

「いえ、私が言いたいのはそういう事ではなくて・・・」

神通は山田の方をチラツと見ながら、衝撃の事実を口にした。

「鳳翔さんとお話しているはずの提督が何故ここにいるのですかと
言っているんです」

ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、ピシャーン!!

川内に電流走る。

ガラ、ガラ、ガラ、ガラ、ピシャーン!!

山田にも電流走る。．．．いや、なんで？

「そうだよ!!提督!!鳳翔さんとなにか用事があるんじゃないの？」

川内は鬼気迫る勢いで、山田に問う。

「いや、確かにあの人：俺に用がある云々言ってたけどさ。俺に背を向けたままなんか止まっちゃってな。なんか怖くなって、お前らの後をついて来たんだな、コレエ」

「そんな木○丸みたいな言い方．．．じゃなくて!!ヤバイよ、提督!!それはヤバイ!!」

思わず山田の肩を掴みながら、グワン、グワンと揺する川内の顔は真っ青になり、歯をガチガチと鳴らしていた。演技ではないと断言できる程の勢いだ。

「おっ、おおおおお落ち着けよ!!死ぬわけじゃあるまいし．．．」

揺さぶられながらも軽く余裕を見せる山田。そんな彼に神通は少しうつむきながら話し始めた。思い出すのも嫌なのか、強く握る拳がプルプルと震えている。

「あれは、セミが鳴き始める初夏の頃．．ある方が鳳翔さんに言った、たった一言がきっかけでした。」

最初から小さかった声が途中からほぼ聞こえなくなり、山田は思わず聞き返した。

「ですから、――――と」

だが神通の声は大して変わらなかった。なんと言ったのか、そしてどうなったのか。山田は知りたくて、知りたくてたまらなかった。

「あーもー!!おい、川内。その艦娘はなんて言ったんだ?教えてくれよ」

「えっ?私?」

何かを思い出すように腕を組ながら、相づちをうっていた川内に思わず声をかける。

「頼むよ、いいだろ?別に減るもんじゃあるまいし」

「うーん、まあ昔の話だし・・・ね・・・」

コッ。

「ん?どうした?後ろに後退って・・・」

コッ。

何故か山田から一歩ずつ離れる川内。

「あわ、あわわわわ」

神通も川内と同じく一歩離れる。何かを恐れているのか、視線がやや上に向いていた。天井にクモでもいるのだろうか山田はそう思い、何も考えず後ろを振り向く。山田の瞳には和服姿の女性が拳を振りかざしている姿が写った。

「ああああああああっ
!!!!!!!」

――――

川内と神通は走った。自分達の部屋に向かって。走るしかなかった、走る事しか出来なかった。山田を助けるという考えすら出なかった。自分達がやれることは、逃げることのみ。怒り狂うライオンにネズミが勝てる筈は無いのだから。

50、力

拝啓

穏やかな日々が続いております。お母さん、お父さん元気で過ごしておりますか？

俺が突然、いなくなつてさぞ驚いたでしょう。俺も驚いています。でも心配しないでください。しっかりと生きています。ついでに職も見つけました。たぶんそのうちお金も出るので仕送りをしたいと思います。職場の人達のほとんどはフレンドリーに接してくれるので、あまりストレスはありません。だから大丈夫です。

早く仕事を覚えて、よりよく働けるように努力していきたいです。最後になりますが、お二人の健康を遠くの世界から祈っております。さようなら

山田孝夫

P. S 助けてください

「ぎゃああああああああ!!」

和服美人に腕を掴まれ山田は叫んでいた。

「ここにいましたか、提督。酷いではないですか？私を無視するなんて」

「俺のっ!!俺の腕がボンレスハムになるっ!!熟成されるう!!いやあああつ!!」

洗濯ばさみのように鳳翔の右手が山田の腕に食い込んでいる。指の間に山田の腕の肉がはみ出て、まさにボンレスハム状態になっていた。

「あまり大声を出さないください。寝ている方もいますので」

ぎゅうううううううう!!

「ダブルはやめてえ!!乱暴にしないでえ!!あたい、初めてなのおおおおおお!!」

人は痛みには耐えられなくなると脳が崩壊するらしい。

その後、山田は強制的に座らせられて鳳翔からの質問（という拷問）を受けていった。（山田があまりにもかわいそうなのでダイジエストで進行します。）

Q 1. どうして私から逃げたのですか？

A. 何かを考えている様子で声をかけにくくて。

Q 2. 下の階で起こった事を簡潔に説明してください。

A. モンスターに襲われたので応戦しました。

Q 3. モンスターとは何ですか？

A. 金剛です。

Q 4. 彼女が一人が襲いかかってきたからあんな騒ぎを起こしたと？

A. はい。必死でした。

Q 5. ふざけているのですか？

A. え？

Q 6. 金剛さんにすべて罪を押し付けるなど愚の骨頂です。恥を
知りなさい。

A. いや、押し付けも何も本当の事で・・・

ピシヤ!!

Q 7. 後で一回に戻って、掃除と後片付けをしてください。いいで
すね？

A. 全部が全部、俺の責任じゃ・・・

ドゴツ!!

Q 8. いいですね？

A. 暴力はよくないと思います。まず話し合いを

バキツ!!

Q 9. いいですね？

A. 弁明を・・・

ズムツ!!

Q 10. いいですね？

A. お願いします。暴力はやめてください。

ミシツ、ミシミシミシミシ!!

Q 11. いいですね？

A. 俺は悪くないっ!!全部金剛が悪いつ!!

Q. \$も・：—||> . いいですね？

A. すべて、僕の責任です。許してください。鳳翔様。

山田は生まれ変わった。清く正しい心を持つ真面目な青年に。理不尽な暴力を乗り越え、彼は進化をしたのだ。人類のその先へと：

「それでは僕、片付けに行つてまいります。」

「ええ、掃除用具は玄関近くのロッカーに一式入っていますのでそれを使つてください」

「ありがとうございます。それでは」

勢いよく90度に腰を曲げ、一階に降りて行く山田に鳳翔を微笑みながら小さく手をふった。

「山田孝夫さん、思ったより骨があるかもしれませんね」

鳳翔はゆつくりと歩き出す。

「いいサンドバッグも手に入りましたし、明日から楽しみですね……
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

かつて、あまりの戦闘力と狂暴性を発揮し、敵、味方共に恐れられた者がいた。空母なのに航空機をまったく使わず、拳だけで倒すというバトルスタイルを貫き、まさに鬼神の如くの活躍を見せたという。のちに大本営から強制的に退役を命じられた彼女は関東のある鎮守府に給仕として働くようになったという。

51、絡みつく恐怖

「はあー、拳を振るう事に全くためらいがなかったよ。あの人。これからどうなるんだろう」

ちりとりと箒を持ち、瓦礫を片付けていく山田。せつせと掃除をする彼は、本当にこの鎮守府の提督なのだろうか。用務員の間違いではないのかと、この頃作者は思っている。

「とりあえず、綺麗にはなったべ」

見渡す限りの瓦礫やゴミを玄関口近くにまとめ、山田は一息ついた。ふと体を見ると手のひらは砂のようなものが付着している。しかもそれが爪の中まで入り込み、違和感がすごい。ズボンの裾も何故か汚れている。裾を踏んだ覚えも、座った覚えもないというのに。手を洗いてえ。てか風呂入りてえなあ。そう思っていると、あるものが目についた。

「よつと」

山田は落ちていたチェンソーを拾い上げ、マジマジと見る。こんな物騒なもんを向けられてよく無事であったものだ。自分自身を誉めてやりたいものよ。感慨深く眺めていると黒のマジックで何か書いてあった。田尻鎮守府と。

「学校か？ここは。まあ、個人所有だったらそれはそれで問題だがな。はっはっ」

山田がチェンソーを玄関の端に立て掛けようと歩きだした。

トントントントン。

「・・・・・・・・」

床を叩くような音が聞こえる。山田は音の方向をチラツと見るとすぐに元に戻り、何事もなかったように歩き始めようとした。

ドンドンドンドン!!

「・・・・・・・・」

さつきより少し音が大きくなった気がする。だが山田は動きを止めず、チェンソーをロツカーの隣に置いた。

「とりあえず、手洗いてえな。四階か、階段だりいなあ」

男子トイレで手を洗おうと階段をノロノロと上ろうとする山田は欠伸をかいた。

ダンダンダンダン!!

「・・・・・・・・」

ダンダンダン、ダンダンダン、ダンダンダンダンダン!!

「……………」

ダンダンダン、ダンダンダン、ダンダンダンダンダン!!

「ああ、騒音お○さんか。懐かしいなあ、オイ」

「ちがわいつ!!」

山田が掃除を始める前から何故かうつ伏せで寝ていた金剛は上半身をグワツと起こしてツツコミを入れた。

「酷いネ!! テイトク!! さつきから呼んでいるのに気付かないふりをして」

頬を膨らまし、うつすらと涙を浮かべる彼女は普通の女性そのものだった。目を潤ませながら、若干の上目遣いを向けるその表情は男性にとってはとてもたまらないものだろう。それが初見であれば。

(この女、この期に及んでまた泣き落としか。小賢しいっ)

山田は知っている。金剛の本気の顔を、自分に向けていた殺意を秘

めたあの顔を。

「なんか体中が痛いし、頭はクラクラするし、何故か廊下で寝てるし、もう何がなんだかわからないデス」

（やはり掃除なんかしないで、さっさと部屋に帰った方がよかったか？）

「「いいですね？」」

「!!!」

ビクッ!!

「ど、どうしたネ、テイトク・・・」

急に背筋を伸ばして硬直する山田に思わず声をかける金剛。それ

を止めるかのように、手のひらを彼女の前に出し山田は深呼吸をする。そして目を閉じた山田は心を落ち着かせる。

(落ち着け、俺。お前は先程まで本物のバーサーカーと対峙していたじゃないか)

山田の脳裏には彼女(名前を呼んではいけないあの)からの一方的な暴力を写し出していた。

――――

ちよっ!!やめっ!!食い込んでる!!食い込んでる!!爪がっ!!いたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたい!!

首がっ!!首・・・呼吸がっ・・・本当にやめ・・・

えっ?そんなものどこから・・・?

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ!!

あぎあああああああ!!

え?何で?何で笑ってんの!?俺は仮にも偉い立場なんだよね?なんでそんな平然と蹴りを入れられんの!?まさかストレス解消目的で暴力を・・

ガスツ!!

のおおおおおおお!!

この野郎っ!!下手に出てればっ!!オラア!!

痛ってえええ!!なんでこんなにかてえの!?

女じゃねえよっ!!アンタツ!!かてえもの!!心も体もかてえもの!!
!!そんな不気味な顔しねえものっ!!よだれなんか垂らさねえものっ
!!もういやだあああああ!!

おか、おか、おか、おか……おかあちやああああああんつ
!!助けてええええええええええええええええ!!

—————。

山田はゆっくりと目を開ける。そこにはあの人はいない。いるのは、目をパチクリさせるただの茶髪。ただの小娘一匹。ただ突っ込んでくるだけしか出来ない、いや「たいあたり」しか覚えていないコ○キング。恐怖など微塵も感じない。

「勇気とは怖さを知る事、恐怖を我が物とするものなり」

山田は真っ直ぐに金剛を見据えた。来るならこい、真の恐怖を知った今の俺なら貴様など赤子のようなものだ。俺の命を取りたければ全力でくるがいい。そう、山田の目は語っていた。

・・・はあ。

「どうした？」

いやあ、なんかな。

「なんだよ、はっきり言えよ」

飽きた。

「え？」

飽きたよ、この展開。だってなんか同じような展開やん？読者の人はさあ、きつとお前と艦娘とムフフなイベントとか、いい加減にストーリー進めろよとか思ってるよ。たぶん。

「うーん、ムフフはともかく、ストーリー進めなきやあかんよな。うん」

そこでだ。

「へ？」

ムフフな展開とストーリーを進める、この二つを同時に起こせる最高の一手がある。

「だからムフフはいいって、俺は別にハーレムアニメの主人公になる気は……」

揉め……

「……………?」

乳を揉め……

「……………」

金剛の乳……

「言わせねえよ!」

なんだよ、先に進みたくなえのかよ。ピリオドの向こう側に逝きたくなえのかよ。

「そりやもう展開はさ、進めたいけれどさ、それは……もう……違うやん」

何をいまさら……お前、神通の揉んどいてさ……

「っ!!ばっか!!おめえ、あれは事故だよ!!故意じゃねえ!!」

いいか？お前が金剛の乳を揉む。そしたらお前は顔面を殴られて
気絶する。そしたらなんやかんやあつて明日になる。どーよ、これ。
完璧だろ？

「お前、この小説の第一話から見直してこい。同じような事やってる
から」

うっそ、マジで？俺もボキャブラリー少ねえなあ。

「あのお、テイトク？誰と話してるノ？」

「えっ!?ああ、いや何でもないで」

・・・誰か（作○）と話していた山田はふいに金剛に言葉をかけら
れ我に返り、手をブンブンと振り誤魔化した。

「それで、あの・・・聞きたいことがあるんデスけど、いいデスか？」

「・・・」

改めて金剛と正面に向う形になり、山田は改めて金剛の顔を眺め

る。なんとも真剣な顔でこちらを見ている。目にもちやんと光が入っていて、まるで生きているようだ。襲ってきた時のような、死んだ秋刀魚の目を赤で塗装したような目ではない。頬も少し赤くてまるでピカ○ユウのように可愛げがある。襲ってきた時のような餓死寸前のダル○ムではない。彼女は正常に戻ったのか？山田は思った。そんな山田に金剛は不思議な質問を投げ掛ける。

「その、気持ちよかったデス……か？」

「……なにいつてんだ？おめえ」

52、叫び

気持ちいいとは。

1. 心身の状態がいい。
 2. 触れたときなどの感じがいい。
 3. 物事が滑らかに進行して具合がよい。
 4. 考え方や行動が好ましい。
- などがある。(○○辞典より)

――。

「責任、とつてくれますよネ。テイトクウ・・・」

右腕の袖を口元に当てながら、瞳を潤ませる。そんな彼女とは裏腹に山田はとても冷静だった。

「気持ちいいとか責任とかわからないので説明してもらえますかね？」

「もう、とぼけちゃつテ。あの駆逐艦を縛った後から記憶がないけど、そういう事なんでシヨ？」

金剛はチラツチラツつと目線を山田に向け、恥ずかしそうに頬に手を添える。仕方がない人ね、と言わんばかりである。

「記憶がない・・・だと?」

その言葉に違和感を覚えた。あの駆逐艦・・・えーっと、あー・・・何だっけ? まあ、いいか。あのピンクを海に捧げた後、俺は浜辺に寝そべって星を見ていた。その時からだっけ? コイツと死闘を演じたのは。そういや、初めて会ったときは威圧感なんてなかった。殺意なんかない普通の奴らだったと思う。・・・まさかあの虫が関係あるのか? (※よくわかんねえよ。と思う貴方は前の話を探してみてね☆)

出会いから現在を思い返し、考える山田。

「デユフフフ・・・きつとこーんな展開デエース・・・」

恍惚とした表情の金剛の頭から回想らしき白いフワフワな物体が現れる。

「うおっ!!なんだ!?!」

ホワン、ホワン、ホワン、ホワン、ホワン、ホワン。

ー。 (ここからは金剛さんの妄想です。)

「ああ、綺麗だ・・・」

彼は寝そべりながら星を眺めながらも、子供のような顔で私に語りかけた。昔からちつとも変わらない。初めて会った頃は、気に入らない事があるとすぐ怒鳴ったり、物に当たったり、とても乱暴な人だった・・・。

こんな人が私達の提督になるなんて冗談じゃない、絶対に認めない。弱みを握ってこの鎮守府から追い出してやる。そんな事を毎日考えながら生活してきた。しかし彼は司令官としては優秀で大本営からの難易度が高い作戦も淡々とこなしていく。性格は最低なのに・・・。

――

私は妹達と昼食をとっていた。深海棲艦との激しい戦いばかりで心も体も傷ついている私達にとってこの時間だけが唯一の癒しなのだ。それなのに彼は突然、私の前に現れてこう言った。

「お前に飯に食う時間なんてない。そんな暇があるなら今すぐ鎮守府周りの警備に行け」

彼は眉一つ動かさずに冷たく言い放つ。私は思わず立ち上がった。今の時間帯は駆逐艦達が哨戒しているはずだ。私が行く意味はない。理不尽にも程がある。私は抗議をしようと彼に詰め寄った。

バチイ!!

一瞬、大きな音が鳴ったと思ったら食堂内が静まり返る。理由は簡単。私が彼から顔に平手打ちを受けたからだ。

「っ!!」

訳がわからなかった。今まで命令に背いた事も無く、任務も完璧にこなしてきたつもりだ。もちろん文句や不満もあったが声には出さなかった。仕方がない、私は戦う事しか出来ない化物なのだから。そう割り切っていた。

今回が初めてだったのだ。初めて彼に反抗したのは。いや反抗ではない。私は問いたかったのだ。

「何故私のですか」と。

私が叩かれ、固まっていると近くの妹達が彼に詰め寄っていた。三人とも怒号に近い声で何かを訴えている。いつも優しい彼女達があんなに声を荒げているのは、私の為・・・なのだろう。私は――。

その後の記憶は朦朧気であり覚えていない、しか・・・

「おい、おい、おい、おい。ちよっち待てや」

金剛の回想の白いフワフワな物体を押し退け、山田が突っ込みを入れる。

「何これ？俺、俺そんな活躍いちっ・・・mmもした事ないし、そんなシリアスな展開を起こした覚えもない!!」

そんな山田を正座をしながら、ニマニマと見つめる金剛。

夫を優しく見守る新妻のような雰囲気醸し出している。

「つーか俺、お前とほほ面識ないし、今日初めて会ったばかりだし……」

しかし彼は何故私に突っ掛かるのだろうか。私に何か恨みでもあるのだろうか？

「おーいっ!!人の話を聞けよ!!無視してんじゃねえ!!」

山田の言葉にうんうんと頷きながらも金剛は回想を続ける。

でも恨まれる覚えはない。私は命令された事を忠実にこなしていった。では何故?そう考えていると、ふとある答えが思い浮かんだ。……彼はもしかして私の事が好きなのか？

「好きじゃねえよおおおおお(怒)!!ブスウウウウウウウウウウウ(殺)!!」

山田は金剛の正面に回り込み、これでもかと大きな声を出す。それは正真正銘、山田孝夫の魂の叫びだった。

「……はあ」

そのため息をつくとき、金剛はゆっくりと目を開けて山田を見る。

「わかりまシタ。」

どうやら真面目に話してくれる気になったようだ。と山田は感じた。やっと本題に移れる。記憶が無いとはどういう事なのか。なぜ自分を攻撃してきたのか。聞きたいことは山ほどある。山田が最初の質問を聞く前に金剛が話し始めた。

「テイトクが砂浜に横になって星を眺めていたネ。なんだかとても寂しそうな目をしていたヨ。」

「・・・」

「そんな目をしているテイトクがほっとけなくて、私もつい隣で横になったネ。」

「うん」

「そしてテイトクは唐突に手を伸ばしたネ。」

「ああ、そこらへんは覚えて・・・」

「ワタシの胸に」

「へあっ!？」

思わず変な声が漏れた山田。

「そして、このままでいたってテ??」

「いやっ!!そのセリフは言った事があるけどっ!!違うよ!!主旨が違うよ!!」

山田のツツコミと同時に金剛の目が変わった。その目はどこにも焦点が合っていない。心なしか黒目が通常の倍の大きさになっている。金剛は呪詛を唱えるように言葉を続けた。

「前々から好きだったんだ金剛!!愛してる!!」(金剛裏声)

「だ、駄目ヨ。テイトク。ワタシ・・・」

「他に好きな奴でもいるのか?」(金剛裏声)

「そんな人はいないけど・・・」

「ならいいだろう?」(金剛裏声)

「テ、テイトク?なんか怖い・・・ヨ?」

おもむろに彼はワタシの「だあああああ!!」

彼の反り立つ「いやあああああ!!」

上下に揺れる「のおおおお!!」

何度も突「はあああああ!!」

「やめろよお!!終わるううう!!」「俺の鎮守府」が終わるううう!!
せっかく戻ってきたのにつ!!垢バンされるううう!!」

山田は必死に金剛の声を大声で書き消していく。彼女に追いかけて
られていた頃よりもずっと激しく。

「やっぱりコイツ、正気に戻っても頭がおかし・・・」

互いの性「ほおあああああ!!」

中がグチャグ「にやあああああ!!」

このまま、このキチ○イのせいで連載が終わるかもしれない。そんな恐怖が山田を襲い、咄嗟に叫ぶ。

「もう誰か助けてくれええええええ!!」